TOHOKU
UNIVERSITY

2020

読書の年輪

― 研究と講義への案内 ―

東北大学　教養教育院
高度教養教育・学生支援機構
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

| 表紙の写真 |

東北大学史料館（片平キャンパス）。旧制東北帝国大学の中央図書館として、1924年（大正13年）に竣工。戦災を免れて1965年（昭和40年）までの本学の研究、教育を支えた。現在は、2階の旧学生閲覧室が本学の歴史資料の展示場となっている。

| 上の写真 |

東北大学百周年記念会館川内萩ホール（川内南キャンパス）。50周年で建造された記念講堂のデザインを可能な限り保存、修復し、第一線級のコンサート専用ホールと同等の非常に高度な環境のコンサートホール的要素を加味した国際会議場である。

2020

読書の年輪

― 研究と講義への案内 ―

東北大学　教養教育院
高度教養教育・学生支援機構
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

読書の年輪

― 研究と講義への案内 ―

Contents

刊行にあたって 5
教養教育院長　滝澤　博胤

スマホを閉じて、本を開こう 6
水野　健作

スキルを踏まえた知的生産 10
鈴木　岩弓

読書は苦手でしたが・・・ 14
山谷　知行

文学少女との出会い 18
宮岡　礼子

本で得る視座の転換と感動体験 22
米倉　等

背表紙の囁き 26
高木　泉

乱読と精読のすすめ ―私の読書経験から 30
座小田　豊

書を持って、旅へ出よう 34
花輪　公雄

乱読、濫読、爛読 38
山口　隆美

好之者不如樂之者 42
野家　啓一

読書の思い出 46
吉野　博

乱読の履歴 ―そしてこれからの推薦本― 50
工藤　昭彦

学問とは何か? ―大学は何を目指すべきか― 54
森田　康夫

自分の夢を社会の夢に
―日本と世界の未来について考えよう― 58
福西　浩

すこし離れたところから眺めてみる 62
福地　肇

若い頃の洋書との出会い 66
前　忠彦

本との出会い ―今、君たちだったら― 70
海老澤　丕道

「大学時代でなくても、できること」ではなく 74
柳父　圀近

教育・研究の舞台裏
―私を支え・慰め・励ましてくれた本― 78
海野　道郎

学ぶ本・議論する本・楽しむ本・
鼻歌まじりの本…出会った本 82
秋葉　征夫

本誌の書籍紹介一覧 86

Institute of Liberal Arts and Sciences,

刊行にあたって

本を開くと、そこには見たことのない情景や体験したことのない世界があります。知識や経験だけではなく、学究に没頭した先達の魂が込められています。自らの意思でページをめくり、書籍の中の世界に入り込んで行くことこそ、学びの本質です。

この小冊子「2020読書の年輪－研究と講義への案内－」は、令和元年度に本学教養教育院に所属する、教育と研究に高い実績を持つ経験豊かな本学名誉教授である総長特命教授7名と、現在はその任を離れたOB12名、元教養教育院長1名の、計20名の先生方が、自らの講義やゼミの受講の際に有益となる本を、お一人6冊ずつ紹介したものです。どれもが定評のある選りすぐりの名著と言えるでしょう。皆さんが、紹介された全120冊の本の中から、先生方の紹介文を参考に一冊でも多くの本を手に取ってくださることを期待しております。

読書は豊かな心を作ります。皆さんが確かな教養を身につけるためにも、日常的に読書に親しんでください。

2020年2月

東北大学　理事・副学長
高等教養教育・学生支援機構長
教養教育院長

滝澤　博胤

Tohoku University

水野　健作　MIZUNO, Kensaku

スマホを閉じて、本を開こう

水野 健作　MIZUNO, Kensaku

総長特命教授、東北大学名誉教授、理学博士
専門分野:分子細胞生物学

担当科目
基礎ゼミ:「ノーベル賞で読み解く現代生命科学」
基幹科目:「生命と自然:エッセンシャル現代生命科学」
展開ゼミ:「がんと老化の生物学」

研究室:国際交流棟2階　203号室

小さい頃から本を読むのが好きだった。昆虫図鑑を開いては、まだ見たことのない美しい蝶や甲虫に胸を躍らせていた。恐竜図鑑も大好きで、今でもジュラシックパークの映画は欠かさず見に行く。小中学校では、ヴェルヌ、ウェルズ、ベリヤーエフの空想科学小説や、ルパン、ホームズの物語に夢中だった。高校に入ると体育会系の部活が忙しく、本を読む時間がなかった。この時期で覚えているのは、漢文の先生に薦められて読んだ大岡昇平の『野火』と中島敦の小説くらいである。『野火』に出てくる戦争描写の印象は特に強烈だった。大学に入ってからは、高校時代に読めなかった時間を埋め合わせるように、多くの本を読んだ。高橋和巳、大江健三郎、開高健、安部公房、司馬遼太郎など、少しでも興味を持った作家の作品は手当たり次第に読んだ。旅行記、探検記のたぐいも好きで、『極限の民族』、『世界最悪の旅』などを夢中になって読んだ。大学2年の時は紛争でほとんど授業がなかった。この頃、小田実の『何でも見てやろう』を読んで触発され、あちらこちらと旅するようになった。沖縄の離島や東南アジアにも行った。マレーシア奥地への旅行は、自分がこれまでいかに限られた環境で暮らしてきたかということを気付かせてくれた。

大学3年の時に、DNA の二重らせん構造の発見で有名なワトソンの書いた『遺伝子の分子生物学 (第2版)(三浦謹一郎ほか訳)』を読んだ。この本は教科書とは思えない面白さで、毎日のように読みふけり、2週間余りで上下2巻を読み終えた。生物のように複雑なものを分子の言葉で合理的に理解できるようになるのはまだまだ先の話であろうと考えていた私は、この本を読んで、今こそそういうことのできる時代になったということを知らされた。無知であったが故に「知る」楽しみを教えられた。ちょうどタイミングが合っていたのだろう。理学部化学科の学生であった私は、これがきっかけとなり、将来は分子生物学の研究に携わりたいと思うようになった。一冊の本との出会いが人生を変えることもある。

これまで好奇心の赴くままに多くの本を読んできた。本は未知の世界の扉を開いてくれる。本は、時空を超えて、自分の一生だけでは経験できない多くのことを追体験させてくれる。本は、自らの狭い考えを広げ、偏った考えを正してくれる。偶然手に取った本が自らの将来を決定づける場合もある。そして何よりも、本は人生に楽しみを与えてくれる。

最後に、『方丈記私記』や『ゴヤ』で知られる作家・堀田善衛の言葉を贈ろう。「十七歳から二十二歳までの読書が君の人生を決定する。本当にそうなのだ。怖いことだと思わないか。この世は君一人のものではないのだ。他というものがいるのだ。その他とは何か、どういうものであるかを、教えかつ知らせてくれるということが、読書の中身なのだ。思慮深く、強い決断をもった人間を育ててくれる、最良の手段が読書というものなのだ。君がもう二十二歳を越えていても、遅すぎるということはない。一冊の書物を手にせよ。出発はそこからだ。」

さあ、スマホを閉じて、本を開こう。

開高 健 著、高橋 昇 写真
オーパ！
集英社文庫、1981年

「何事であれ、ブラジルでは驚いたり感嘆したりするとき、「オーパ！」という。」この言葉ではじまる本書は、南米アマゾン流域にピラルク、ピラニヤ、ドラドなどの大魚、怪魚を追った釣り紀行の本である。釣りだけでなく、アマゾンの大自然やそこに住む人々に対する驚きが、饒舌で溢れ出るような言葉で語られており、躍動感のある写真とともに、釣りをしない人でも文句なしに面白い。とにかく、読んで楽しい、眺めて楽しい、そういう本である。開高健は、洋酒会社の広告文で名を挙げ、『裸の王様』で芥川賞を受賞する。その後、特派員としてベトナム戦争に出かけ、戦闘に巻き込まれて九死に一生を得る。この経験をもとに書かれた『ベトナム戦記』と『輝ける闇』は、死に直面した者にしか書けない迫力があり、惹きこまれずにはおれない。その後、開高は釣り紀行にのめり込んでいく。『オーパ！』以後も開高の釣行は続けられたが、58歳で永眠。開高の本には、多くのアフォリズムが記されている。「明日世界が終わるとしても、今日私はリンゴの木を植える」「漂えど沈まず」などなど。そして、『輝ける闇』『悠々として急げ』のように相反する言葉を並べたタイトルの著作が多い。釣り紀行に写る豪放な姿の開高と、書斎での鬱屈した表情の開高、この二面性が開高健の魅力である。私は、開高健の本を読んで、釣りに親しむようになり、人生の短さについて学んだように思う。

沢木 耕太郎 著
深夜特急　1～6（全6巻）
新潮文庫、1994年

「深夜特急」とは囚人たちの隠語で刑務所からの脱獄を意味するらしい。本書は、若き日の沢木耕太郎が、「机の引き出しに転がっている一円硬貨までかき集め、仕事のすべてを放擲して」、インドのデリーからロンドンまで乗合バスで行くという目標をたてて、旅した記録である。文庫本で6冊もあるが、面白くて、すいすいと読める。前半の3冊が香港から出発地のデリーまで、後半がデリーからシルクロードを経てロンドンまでの記録である。偶然に身をまかせて、バスを乗り継ぎ、安宿に泊まり、街をひたすら歩き回り、時には賭博に没入する。名所、旧跡の類はほとんど出てこない。何か特別なことが起こるわけではないのだが、偶然出会った人々との何気ない出来事が筆者の心の動きとともに自然な形で語られていて、次はどういう展開になるのか、推理小説を読むような面白さがある。この本を読むと、自分も出かけたくなって、うずうずしてくる。実際、多くの若者がこの本を読んでバックパッカーになった。このように、この本は気ままな放浪の旅の魅力を存分に伝えているが、一方で、長期の放浪には自分を崩れさせてしまう危うさが含まれていることも記されている。沢木の著作では、マラソン銅メダリストの円谷幸吉について書かれた『長距離ランナーの遺書』や、報道写真家キャパの有名な写真「崩れ落ちる兵士」の真実に迫る『キャパの十字架』も忘れられない作品である。

大岡 昇平 著
野火
新潮文庫、1954年、2014年改版

大岡昇平は、太平洋戦争末期、フィリピンで一兵士として従軍した。この本は、この経験をもとに書かれた戦争文学の代表作である。主人公の兵士は、敗色濃厚なレイテ島において、肺病のため野戦病院に送られるが、食糧不足のため、病院からも部隊からも追い払われる。丘陵地帯を一人彷徨う中、村で現地人の女性を射ち殺してしまう。上空には敵機が飛び、彷徨中の道端には多くの餓死者や病者が横たわる。投降しようとした兵士は目の前で米兵に殺されてしまう。激しい飢えで、草や自分の血を吸った山蛭を食べて空腹をしのぐ。そんな中、出会った瀕死の将校は、死に際して「俺が死んだら、ここを食べろ」と言って、左腕を叩く。私は屍体に剣を振るおうとするが、その時、剣を持った私の右の手首を、私の左の手が握る。そして、「神」の声を聴く。このようにして一旦は人肉嗜食を思い止まるのだが、その後、「猿の肉」を常食とする友軍の兵士と再会し、そして壮絶なラストを迎える。この本は、単なる戦争体験記ではない。極限状況におかれた人間の行動と意識の変遷がつぶさに描かれている。私は高校生の時にこの小説を読んで、親の世代はこういう体験をしてきたのだという事を知って、大きな衝撃を受けた。太平洋戦争では300万人以上の日本人が亡くなった。レイテ島では兵士の97% が死亡したという。悲惨な戦争の歴史を繰り返さないためにも、多くの若者に読み継いでもらいたい小説である。

黒木 登志夫 著
がん遺伝子の発見
—がん解明の同時代史—
中公新書、1996年

がんは、死因トップの恐ろしい病気である。その発症のしくみは長い間わからなかったが、およそ40年前、最初のがん遺伝子「サーク」がニワトリのがんウイルスから発見されたことをきっかけにして、がん遺伝子やがん抑制遺伝子が次々と発見され、がん研究は大きな進展を見せることとなる。こうして「がんは遺伝子の変異の蓄積によって生じる病気である」という共通のメカニズムが明らかになってきた。本書は、がん遺伝子とがん抑制遺伝子の発見を中心に、発がん機構の解明に向けた研究の歴史が、日本人研究者の貢献も含めて、わかりやすく説明されている。また、発見に到るまでの研究者の確執や競争のドラマも興味深く描かれている。所々に挿入されている著者の以下のような辛口のコメントにも首肯かされることが多い。「偉大な発見は何でもないような些細な発見に始まることが少なくない。それを見落とさず、発展させることができるかどうかは、まさに科学者の才能によっている。しかし一方では、些細な現象にこだわり、それが大して重要な問題でないことを見抜けないまま、何もできずに一生を終えた科学者がたくさんいるのも事実である。」エインジャー著『がん遺伝子に挑む』も、がん遺伝子、がん抑制遺伝子の発見に大きく貢献したワインバーグ研究室の若い研究者の苦闘が臨場感をもって伝わってくるお薦めの一冊である。

シッダールタ・ムカジー 著

遺伝子―親密なる人類史―（上・下）

田中 文 訳、早川書房、2018年

この本は、メンデル、ダーウィンの時代からゲノム編集が可能になった現代まで、約150年の遺伝子研究の歴史を描いた本である。ムカジーの話術に引き込まれて、一気に読み通すことができる。メンデルの法則、ダーウィンの進化論、DNA 二重らせん構造の発見、遺伝子組換え技術、ヒトゲノムの解読、ゲノム編集などの画期的な成果がいかにして生まれたのか、生命の不思議が解き明かされていく過程が、多くのエピソードを交えながら活き活きと描かれている。同時に、ダーウィンのいとこのゴールトンによって始められた優生学とそれに続く断種法やナチスの民族浄化政策についても詳しく述べられており、悲惨な歴史から私たちが学ぶべきことを教えてくれる。現在、私たちはヒトのゲノムを読み取り、書き換えることができるようになり、遺伝子診断、ゲノム編集などの技術によって人間の運命を意図的に改変できる時代に入ろうとしている。ヒトのゲノム編集はどこまで許されるのか、はたして「正常」とは何か、新たな選別（新優生学）を生み出す危険性はないのか、これらの倫理的にも社会的にも重要で、人類の未来を左右する大きな課題を考える上で、遺伝子の過去・現在・未来を重層的に描いたこの本は必読の書である。ムカジーは前著『がん―4000年の歴史―』でピュリッツァー賞を受賞しているが、この本もがんとの闘いの歴史が興味深く描かれている。

ユヴァル・ノア・ハラリ 著

サピエンス全史
―文明の構造と人類の幸福―（上・下）

柴田 裕之 訳、河出書房新社、2016年

言わずと知れた世界的ベストセラーである。あのビル・ゲイツやバラク・オバマも絶賛しているという。取るに足らない類人猿の一種であったホモ・サピエンスが、人類（ホモ属）の中でなぜ唯一生き残り、文明を築き上げ、地球上でもっとも繁栄する種になることができたのか。ハラリは3つの理由を挙げる。曰く、認知革命、農業革命、科学革命である。認知革命によってサピエンスは神、宗教、貨幣、国家、企業、法律などの虚構を生み出し、それを信じる能力を獲得した。その結果、大規模な協力関係を築き、多人数からなる文明社会を築くことができるようになった、と筆者は述べる。私たちが当たり前に存在していると考えている多くのことが実は虚構であり、それを共有できることが人類の特質であり、人類の繁栄に必要であったという筆者の達見に目を見開かされる。農業革命や科学革命についても刺激的な考えが数多く提示されており、目からウロコが何枚も落ちる楽しみを味わうことができる。人類による大型動物の絶滅の記述や、現在の家畜の飼育状況の悲惨さの記述を読むと、人類の罪深さに呆然とする。本書の最終章並びに次著『ホモ・デウス』では、人類は将来、生物工学、情報工学の進展によって生物学的限界を突破し、超人あるいはホモ・デウス（神の力をもつ人）へ向かうという予測が示される。技術の進歩と欲望追求の中で、人類は賢い選択をすることができるのか、深く考えさせられる。

鈴木 岩弓 SUZUKI, Iwayumi

スキルを踏まえた知的生産

鈴木 岩弓 SUZUKI, Iwayumi

総長特命教授、東北大学名誉教授、文学修士
専門分野:宗教民俗学・死生学

担当科目
基礎ゼミ:「『遠野物語』をあるく」／「仙台市中心部のカミガミ―『願掛重宝記』を作ろう―」
展開ゼミ:「文学者の見た『死』－日本人の死生観－」／「年中行事からみた日本文化」／「日本の民間信仰」
総合科目:「memento mori－死を想え―」

研究室:国際交流棟2階202号室

皆さんは、他人の本棚って関心ありませんか?さりげなく眺めた本棚に、読んだことのある本を見つけると、「おっ、こいつもこの本を読んでいたのか」とニヤリとし、逆に自分が知らなかった本を見つけた時には「エッ!こんな本あるの」と、先を越されたことを疎ましく思ったりして……。本棚に並ぶ本には、その人の歩んで来た人生が示されており、それまで知らなかった“人となり”が深まって見えてくることも珍しくありません。それがゆえに、他人に本棚を見せたがらない人がいることも確かです。とすると、私がここで推薦書を提示することは、下手をすると私という人間の“浅薄さ”を皆さんの前にさらけ出す危険行為であるのかもしれません。かかる不安を持ちつつ、前年の『読書の年輪』を見ていくと、「そうそう」と、私も候補書として挙げたくなる本が多数並んでいることに気付きます。やはり“読むべき本”は誰が見ても“読むべき本”なんだな、と納得する次第です。その意味から、まずは本書掲載の推薦書に心を留め、それらの本との出会いの機会を作ることは、効率的な書籍選択なのでしょう。

私の推薦書は、結果としては私にとって“想い”のある本になるわけですが、これまでの推薦書と重複せずに、バランスを考えて選択しようとすると、何らかの座標軸が必要です。読書の場面を改めて整理すると、そこには二つの極を設定できます。一方の極は<目的のために読む>読書で、知識やスキルを習得するための情報入手の場合です。これに対し他方の極はいわば<読むことが目的>の読書で、文学鑑賞のように内容に心躍らせて楽しむ場合です。以下、スキル入手に役立つ二冊、前者と後者の間のより前者寄り二冊、後者寄り二冊を推薦しましょう。

なお一点留意すべきは、本書に挙げられた“読むべき本”は、それを“どう読むか”によって、その書籍の意味づけが違ってくる点です。例えば『源氏物語』を文学書として読むなら、それは<読むことが目的>の娯楽性志向の読書となるのでしょう。しかしこれを、平安貴族の宗教生活の実態が垣間見られる資料として読むならば、それは<目的のために読む>実利性志向の読書と言うことができるのです。『読書の年輪』の目的は、まずは“読むべき本”の推薦ですが、“本をどう読むか”というスキルもまた重要です。傍線を引くとか、重要な記述をカードにとると言った情報収集のスキルは、最終的には個性に合ったやり方に落ち着くものですが、着地点が見えるまでは先人のやり方に耳を傾けることも有効です。例えば大内兵衛・茅誠司著『私の読書法』(岩波新書、1960年)には、以下で挙げる梅棹忠夫も含め、20人の著名人の読書法が収録されているのでご参考に。

梅棹 忠夫 著
知的生産の技術
岩波新書、1969年

「氷山の一角」の原意は、海上に浮き出ている氷山は全体の一割程度で、後の大部分は海面下に隠れていることに由来するというが、学問的営為もこれとよく似たところがある。多くの論文や本を読み、調査や実験などを繰り返して集められたさまざまなデータを分析した結果が一本の論文に結実するのであるが、そこに書かれた内容は、収集された情報量の何分の一かでしかない。一本の論文の背後には、陽の目を見ないデータが多々残されるのが常である。かかる営為は全てが無駄とは言えないが、スキル習得によって研究方法を改善できる余地もある。しかしわれわれの学生時代、ノートの取り方、本の読み方、資料整理の仕方などの研究技術は、先生や先輩を真似るのみで体系的に習う機会などなかった。

こうした風潮に棹さしたのが梅棹忠夫で、彼は学校教育が知識偏重の反面、知識獲得の方法や創造的な知的生産を行う上での基本的技術が軽視されている点を問題視し、実践的なスキルをまとめ上げた。

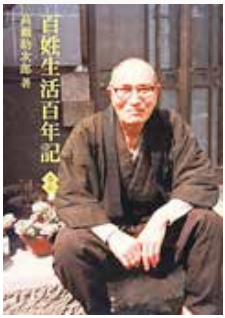
今ではよく使われるB6判カードによる情報整理法も、本書で紹介されており、PCによる情報整理の思想の原型もそこから垣間見られる。川喜田二郎の『発想法ー創造性開発のためにー』(中公新書) も、知的生産の技術を磨くための基本中の基本書である。

本多 勝一 著
＜新版＞日本語の作文技術
朝日文庫、2015年 (朝日文庫『日本語の作文技術』、1982年)

正しい日本語で良い文章をどのように書いたら良いかと言うことは、多くの人が悩みいろいろに試行してきた課題であろう。そうした指南書は「文章読本」などの題名で、谷崎潤一郎・三島由紀夫・川端康成ら数多くの文学者によって書かれていることが知られているが、本書は『朝日新聞』の記者によって書かれた点が異色である。

本書の題名に「技術」の語があることに示されるように、本多は本書の目的を「読む側にとってわかりやすい文章を書くこと」におく。文学者が目指すような名文や上手い文章を書くことは一種の「才能」であるが、わかりやすい文章を書くことは「才能」ではなく「技術」であるという認識に立っているからである。「才能」は有るか無いかが決定的であるが、「技術」は学習可能で他人に伝達することが可能なため、誰でも身につけることができるのである。

「句読点のうちかた」「漢字とカナの心理」「助詞の使い方」といった章立てが示すように、われわれが改めて聞かれると迷うような事柄を、一つ一つ丁寧に解説してくれるのはありがたい。本書は1982年に出版された『日本語の作文技術』の新版であるが、その応用・追試・検証として『実戦・日本語の作文技術』(朝日文庫) がある。



高瀬 助次郎 著

百姓生活百年記　巻壱

村山民俗学会 編、原人舎、2014年

本書は、現在の山形市大字谷柏に誕生し昭和60年に89歳で亡くなった、一人の百姓の書いた「民俗誌」の原稿を、村山民俗学会で編集して平成26年3月に刊行したものである。高瀬の受けた学校教育は尋常小学校のみであったが、地域の考古や歴史に興味を持って研究し、いわゆる郷土史家として多くの成果を残した。全四巻のうち最初に刊行された本書は江戸時代から明治時代の地域の人々の暮らしに関する「聞き書き」を、挿絵を交えながら纏めてある。地域に住む生活者の側から書かれた「民俗誌」は、自文化研究の視座からなされた事例報告として興味深く読むことができ、読者が問題意識をもって考える材料をいろいろに提供してくれる。

他地域でも南会津郡南郷村（現在は同郡南会津町）の安藤紫香による『奥会津の民俗』(歴史春秋社、1994年）があり、またフランスで社会学や人類学を学んだ山田吉彦が、きだみのるの名で書いた『気違い部落周游紀行』(冨山房百科文庫、1981年）も、敗戦直後の日本の山村におけるフィールドワークに基づく見事な「民俗誌」である。「民俗誌」は知識の供給源であるのみならず、<読むことが目的>の娯楽志向の読書として読んでも、われわれの発想を揺すぶってくれることが珍しくない。

柳田 國男 著

先祖の話

角川ソフィア文庫、2013年（筑摩書房、1946年）
（筑摩書房『柳田國男全集』15、1998年）

戦争末期の空襲の中で執筆され、終戦の翌春に刊行された本書は、日本人の死生観をテーマとする古典である。本書で扱われる内容は、土葬主流でイエ意識の強い時代の日本人の生活であって、死後人は肉体と霊魂に分離し、肉体は消滅するが霊魂は存在し続ける、という「霊肉二分論」的死後観念が述べられる。死者の霊魂は、子孫からの法事を逐次受けることで死のケガレが希薄化し、三十三回忌もしくは五十回忌のトムライアゲを経た後、そのイエの他の死霊と融合して祖霊となり、イエの先祖として祀られるのである。この指摘の裏には、逆に子孫から祀られない死霊は先祖とはなれず、無縁化する慣習が前提されており、子孫を残さず亡くなった戦死者が不祀の死霊となることを忌避する方策が模索された。この時期の柳田自身は先祖と祀られることで安心した死後の保証を切望していたので、その前提としての<イエの永続>を声高に叫んでいたのである。

並外れた読書量をもつ柳田は、書物の限界を感じて日本中を廻り歩いたが、本書にも聞き取り調査の成果が多々示されており、現代日本の「死」に対する提言として読んでも有益な指摘が多々見られる。本書は、これまでの私の人生で一番読んだ回数の多い本であるが、読むたびに新たな発見がある。

岸本 英夫 著
死を見つめる心
－ガンとたたかった十年間－
講談社文庫、1973年（講談社、1964年）

自分の“いのち”があと僅かしかないことが判明した時、人はその事実をどのように受け止め、どのように死を迎えるであろうか?本書には、アメリカ渡航中に皮膚がんが見つかった、東京大学宗教学教授であった岸本英夫が、自己の死に直面しつつ生きた10年の間に書かれた原稿がまとめられている。

われわれ生者が経験する死は、あくまで二人称の死もしくは三人称の死で、一人称の死を経験することはない。一人称の死の瞬間、死を経験している自己は存在しなくなるからである。とは言え多くの人は、そうした自己の死を想定しながら、一人称の死が生起する時に向かって歩を進めている。

ガンの宣告を受けた岸本は、生命飢餓状態の中で自己の死を見つめる一人の人間としての立ち位置と、学問の対象として死を捉える宗教学者としての立ち位置を併存させた観点から死を見つめており、そのことが、本書を類書とは際立った論理の深みに導いている。アリエスの言うところの「タブー視される死」の時代であったこの当時、書名に「死」の語が入って刊行された本書であるが、1964年度の毎日出版文化賞を受賞している。死生観研究の素材として読む以前に、まずは自己の生き方を考える際の手掛かりとして読むのに打ってつけの本であろう。

折口 信夫 著
死者の書
角川ソフィア文庫、2017年（青磁社、1943年）

「した　した　した」という水の垂れる音が聞こえる中、死の眠りについていた大津皇子が、墓の闇の中で目を覚ます場面から、本書は始まる。旧仮名遣いで、カタカナのルビが振られる表記も、そうした妖しげな雰囲気を盛り上げる効果を生んでいる。さらには国文学者であり民俗学者でもある折口信夫の古代研究の成果が、釈迢空という著名な歌人でもある折口の感性鋭いインスピレーションと一体化することで、独特の雰囲気を持った折口ワールドが現前され、本書を形作っている。それが故に読みにくいという反応もあり、本書に対する評価もハッキリと二極分化するようである。

柳田國男の学問が「柳田学」と呼ばれるのと同様、折口が進めてきた学問も、国文学や民俗学といった既存の学問体系に分化されるのではなく、それらが総体として一つの体系をなした「折口学」を形成しているとされる。こうした雄大な学問体系に根付く著作は、個別の情報を知る<目的のための読書>としてのみならず、<読むことが目的の読書>の素材としても有効である。とりわけ後者の読書では、目的が不明確であるがゆえに即効性は薄いが、長い目で見てわれわれの発想力を熟成させる、良い刺激をもたらしてくれるのである。

読書は苦手でしたが・・・

山谷 知行 YAMAYA, Tomoyuki

総長特命教授、東北大学名誉教授、農学博士
専門分野:植物分子生理学

担当科目
基幹科目:「生命と自然」 研究不正はなぜくり返されるのか？
基幹科目:「生命と自然」 無から有をつくる植物のしくみ
展開ゼミ:「日本の食料事情」 日本の食料を考えましょう

研究室:国際交流棟2階214号室

もう半世紀も前になりますが、中学2年生の担任が国語の先生でした。その影響を受けて、中・高と国語は好きで得意でした。しかし、運動部が生きがいだった悲しさか、私が持つ「読書」の語感は、「文学少女・文学青年・まじめ・感性」等、私とは相反するものと思ってきました。特に行間を読むことや長文が嫌いで、しかも、今でもカタカナがうまく読めません。従って、世界史も不得意です。大学生になってから星新一さんのショートショートくらいは読みましたが、文学書には縁遠く、相変わらず身体を動かすことばかりをしていました。勿論、教育・研究に携わってからは、専門書や英語の論文などは商売道具ですので、必要以上に多くの出版物をしっかり読み、身につけたつもりです。でも、それ以外は相変わらず。

転機になったのが、2006年から3年間兼務した日本学術振興会学術システム研究センターの主任研究員になったことです。毎週木曜日の夕方遅く仙台を出て、金曜日の夜に戻る生活が続きました。新幹線の中で、当初はPCで仕事をしていましたが酔ってダメ。新幹線は微妙に横揺れが有り、テーブルでプリントアウトの論文を手直ししていても酔います。近視・乱視によるのかもしれません。結局、身体と一緒に揺れる文庫本が一番とわかり、何気なく読み始めたのが池波正太郎さんの真田太平記（新潮文庫）。その後、往復で2冊のペースで読み続け、3年間で池波さんの文庫本は様々なシリーズの、ほぼ全てを制覇しました。その後も旅のお供には文庫本で、時代小説に今でもはまっています。気に入った作者の著書はすべて読むのが私の作法で、藤沢周平さんとか、最近では佐伯泰英さんの文庫を読破しています。全てを読むと、作者の体調や集中力もわかるような感覚になりました。現実味がない作品ばかりですので、気分転換には最適です。しかし、いわゆる純文学と言われる作品は、まだ難しくて相変わらず苦手です。活字離れが進んでいると聞いていますが、まずは読んで楽しい本を読みましょう。

2012年から4年間、日本植物生理学会が刊行しているPlant and Cell Physiologyという学術雑誌の編集長をしました。日本の学術雑誌ではトップクラスの国際誌で、年間に500以上の論文が投稿されてきます。採択率は厳しく、多くが不採択となります。Editorの負担を減らすため、編集長として全ての論文に目を通し、査読に回さずに却下する論文を増やしました。平均すると、毎日二つの英語の投稿原稿を読みますので、編集長時代の後半では、内容の善し悪しが短時間でわかるようになりました。論文を読むことは読書とは違いますが、たくさんの本を読むことも、物事の判断を早く正確にする上で役立つのではないでしょうか。

以下に、敗者の視点から書かれた珍しい本と、私の専門に近くて気軽に読める本を紹介します。

高橋 克彦 著

火怨　北の耀星アテルイ（上・下）

講談社文庫、2002年

私は青森市で生まれ、盛岡市で高校まで過ごし、仙台に長く住んでおります。青森での子供時代、蝦夷の言葉なのかアイヌ語なのかわかりませんが、日常的に使っていた言葉があります。例えば、マキリ（小刀）、ケリ（くつ）などです。なぜ青森市では賑やかなねぶた祭をするのか、弘前市ではなぜ比較的静かな扇ねぷたなのか、蝦夷と関係があるのか、興味があります。いわゆる歴史は、勝者の側から書かれており、負けた側の資料の多くは継承されてこなかったのではないかと思われます。本書は、岩手県出身の著者が、平安時代初期にあった蝦夷征討について、敗者である蝦夷のまとめ役の阿弓流為（アテルイ）・母礼（モレ）の視点から描かれた本です。中央政府に従わない蝦夷に対し、789年に征東大使となった紀古佐美が来たものの、胆沢で多数の損害を出して失敗しました。その後801年に坂上田村麻呂が征夷大将軍として遠征。蝦夷の人々を守るため、最終的にアテルイ・モレは500名以上を率いて降伏し、河内国で斬首されたと描かれています。その間、常に敗者側から物語が作られており、東北人としては日本人のルーツの一つとして誇り高く思える本です。近年まで、白河以北一山百文と差別され続けられてきましたが、授業で教わる歴史とは一味も二味も違います。

黒木 登志夫 著

研究不正　科学者の捏造、改竄、盗用

中公新書、2016年

著者の黒木先生は、1960年に東北大学医学部を卒業され、加齢研や医学部で教員もされた私たちの先輩です。東大教授・岐阜大学学長を経て、2008年に学術振興会（JSPS）学術システム研究センター顧問になられ、短い間でしたがご一緒しました。当時、研究不正・研究費不正の発覚が多く、文科省や国立大学における公正な研究について、JSPS で散々議論を重ね、指針を作成したことを思い出します。しかし研究不正はあとをたたず、著名な大学や研究機関では現在でも発覚しています。本書では、なぜ科学者が不正に手を染めたのか、どのような結末に至ったのかなど、事例を具体的に多数取り上げながら、科学のあるべき姿の提言がなされています。名誉・地位・研究費・国際的な成果などなど、研究者が陥るかもしれない事例を詳細に分析して、読者一人一人に安易に走らないように呼びかけた優れた啓蒙書でもあります。電子化やネットワークの急速な発達に伴い、自分らしさを失いがちな昨今です。不正は、必ずばれますし、一生を棒に振ります。研究者やさまざまな分野で指導者を目指す皆さんには、是非とも読んで頂きたい一冊です。

日本植物生理学会 編

これでナットク！　植物の謎 Part2

講談社ブルーバックス、2013年

私が所属しております日本植物生理学会では、植物に関するあらゆる質問を、小学生から大人までを対象として受け付けています。これは、この学会のホームページ「みんなのひろば　質問コーナー」で、質問とその答えを載せております。答えが難しい質問が多く寄せられますが、経験を長く積まれたサイエンスアドバイザーの先生方を中心に、現役の専門家の先生方にも協力して頂き、植物の謎に迫っております。本書は、この質問コーナーをまとめた本で、2007年に刊行された『これでナットク!　植物の謎　植木屋さんも知らないたくましいその生き方』の継続版です。実は、小学生からの質問が難しく、学会側では大変な努力をして答えております。本書では、10項目を取り上げています。「おいしい植物」、「育てる植物」、「植物の仕組み」、「葉っぱ」、「花」、「鮮やかな植物」、「幹や根っこ」、「種子や実」、「植物の健康」、「自由研究で挑戦」に関する「謎」です。植物生理学に関わる私が読んでも、質問では「よくこんなことを知っているな」とか、答えでは「こんな難しい質問によく答えられるな」と思うことばかりです。教科書に書かれていない内容が多く、誰でも気軽に読める一冊です。

滝澤美奈子 著、島崎 研一郎 責任編集

植物は感じて生きている

植物まるかじり叢書②、化学同人、2008年

本書は、日本植物生理学会の関係者が植物科学への関心を高めて頂く広報活動の一環で刊行された「植物まるかじり叢書」全5巻のなかの第2巻です。この第2巻のテーマは植物の環境応答で、高校生以上の方々を対象として編集されました。ご承知のように、植物は個体としての移動能力はありませんので、発芽した場所で一生を終えます。さまざまな環境ストレスを受けますが、植物はただじっとしている訳ではなく、外部環境を感じ取り、様々な対応をすることで次の世代にバトンタッチします。本書の構成は、「赤い光を感じる」、「青い光を感じる」、「気孔の秘密」、「寒さをしのぐ知恵」、「重力の下で生きる」、「土の中にある大事なもの」、「香りにこめたメッセージ」の7つのトピックから構成されています。それぞれの第一線の研究者に、サイエンスライターの滝澤美奈子さんがインタビューし、章ごとにまとめられています。研究者も非常にわかりやすく内容を紹介していて、また研究に取り組む姿勢や考え方が丁寧に書かれています。本書を読めば、他の4巻も読みたくなるはずです。ちなみに第1巻は『植物が地球をかえた!』、第3巻は『花はなぜ咲くの?』、第4巻は『進化し続ける植物たち』、第5巻は『植物で未来をつくる』です。

斉藤 和季 著
植物はなぜ薬を作るのか
文春新書、2017年

著者は、薬学のなかでも生薬学や植物成分のゲノム機能科学の専門家で、我が国の植物科学に代謝産物の網羅的な解析を行うメタボロームを導入したこの研究分野の第一人者です。発芽した場所から個体として「動かない」を選択した植物が、様々な環境変化や捕食者から身を守り「生き残る」ため、さまざまな有用物質を作る進化を遂げてきました。古来、薬の多くを植物に依存して、生薬や漢方薬がうまれました。時には「毒」となる物質まで植物は合成し、その「毒」から自らを守る方法も手に入れてきましたが、長い間、なぜ植物が薬や毒をつくるのか、どのように身を守るのかは解明されていませんでした。毒は、さじ加減で優れた薬にもなります。近年のゲノム科学の発展により、この巧緻な仕組みが遺伝子レベルで解き明かされつつあります。本書では、ポリフェノール、カテキン、フラボノイドなど日常用語となっている成分も含め、解熱鎮痛薬・天然甘味料・抗がん薬などの成分の合成や代謝など、植物が持つ驚くべき戦略がわかりやすく紹介されています。本書は、7章からなり、植物から作られる薬の紹介から、人類と植物との共存の将来像までを見据えた力作です。

小泉 武夫 著
超能力微生物
文春新書、2017年

著者は醸造学や発酵学の第一人者であり、我が国の造り酒屋の極めて多くの責任者が教えを受けています。日本人と発酵は切っても切れない関係にあり、微生物の働きを利用した食品、例えば味噌、醤油、納豆、酒など、発酵によって「うまみ成分」を増します。また、発酵により、室温でも長期の保存が可能となる食品を大切にしてきました。最近では、健康維持に腸内細菌叢が大切な役割を果たしていることも明らかにされています。ヒトは微生物と共生しているといっても過言ではありません。しかし、人類と関わりの深い微生物はまだ微生物の中では少なく、中には人類が考えつかないような「超能力」を持った微生物が無数に存在しています。例えば熱湯でも生きる微生物、高濃度の塩水や酸性水中で生きる微生物、レアメタルのありかを探し出す微生物、新たな薬をつくる微生物などです。著者は、遺伝子組み換えに頼らずとも、未知の超能力微生物の発見と利用が大切であると指摘しています。本書では、「はじめに」と「おわりに」を含めて7章から構成されており、超能力微生物について、その種類や機能、さらには将来性までをわかりやすく解説しています。勿論、微生物グルメのエピソードも満載です。目に見えない小さな生物の、驚きの底力を堪能しませんか?

宮岡 礼子 MIYAOKA, Reiko

文学少女との出会い

宮岡 礼子 MIYAOKA, Reiko

総長特命教授、東北大学名誉教授、理学博士
専門分野:微分幾何学

担当科目
基礎ゼミ:「統計学入門」/「今更ですが「もしドラ」を読んでみよう、見てみよう」
数学:「線形代数学概論」/「線形代数学A」
展開ゼミ:「曲がった空間の幾何学」/「フーリエの冒険」
数学専攻:「幾何学序論B」

研究室:国際交流棟2階 201号室

小中学校は地元の学校に通っていた私ですが、高校は当時、都立高校の御三家と言われていた都立戸山高校に入学しました。もともと男子校で女子は3分の1しかいなかったのですが、よく言えば傑出した、悪く言えばちょっと変わった女子が多かったかもしれません。1年生で仲良くなった黒髪の美少女は、大変な文学少女で、私は結構影響を受けました。もともと母がいつも本を読んでいたので、私も読書は好きでした。でもやはり年長者の影響よりは、同世代の影響が大きいと思います。彼女はブラジル育ちでポルトガル語を話し、一番驚いたのは本を買うときは一度に2-30冊を買うというのです。文庫本ではあったようですが、様々な本を読んでいました。それで私も高校の夏休み中、戦争と平和とか、アンナカレーニナとか、罪と罰とか、普段読めない長編小説を読破したことを思い出します。隣のいとこの家にあった世界文学全集も片っ端から読んで、大体有名どころは読破したのですが、残念なことに、当時は読解力も人生経験もなく、今になって読み返して、そうだったのか、とやっと理解できる本も多いです。例えばフロベールのボバリー夫人とか、ラファイエット夫人のクレーブの奥方を高校生が理解するのは無理です。さて大学生になると、分厚い理科学書を試験前に必死で読む、というのがパターンになり、普通の読書をする暇もなくなってしまいました。大学院、そして研究生活、子育て、と読書環境は悪化の一途をたどりました。年に何冊本を読みますか?と聞かれて、ふと考えると、子どもの絵本だけなんてこともありました。

最近になってようやくまた読書欲が復活してきて、読みたいと思ったらすぐにアマゾンプライムで手に入れ、昔は目も向けなかったミーハー本でも気軽に買って読んで捨てます。本はむやみに増えるので処分が必要。ハードカバーはブックオフに売ります。やはり読書は人生を豊かにしてくれるし、思いもかけなかった考え方に遭遇したり、未知の世界に連れて行ってくれたりするのでこたえられません。

日本の小説家も、高校生の頃は、漱石、鴎外、芥川、有島、…と大御所しか読みませんでしたが、今は村上春樹も出るたびに読むし、「娯楽」と思って、また「気晴らし」と割り切って楽しみます。理系人間で文学的センスもありませんから、気楽に読めるのかもしれません。でも三島の『仮面の告白』とか、本当にこの人は天才だ、と思えるものにも時々遭遇します。そしてなんだかんだ言ってもちゃんと生き残っている本というのはどこかに価値があるのだなあと思えるものが多いのです。そんな中から6冊選んでご紹介します。

ソーニャ・コヴァレフスカヤ 著

ソーニャ・コヴァレフスカヤ
－自伝と追想－

野上 弥生子 訳、岩波文庫、1978年

参考:「コワレフスカヤの生涯」ワロンツォーワ著／三橋重男訳、東京図書、1985年

美人女流数学者として著名なロシア人の伝記というか、エピソードが詰まった本です。これは高校生の頃に母に勧められて読んだ岩波の文庫本で、野上弥生子訳でしたが今は絶版です。私が一番覚えている場面は、当時50歳くらいのドストエフスキーが、ソーニャの姉を目当てに頻繁に訪れ、ソーニャが失恋するところです。実際にあったことですし、なにせ相手がドストエフスキーですから驚きでした。

先日、神保町の明倫館書店で『コワレフスカヤの生涯』(文庫本ではない) を見つけ、迷わず買ってしまいました。私が数学者になったことと、ソーニャの伝記を読んだことが関係あるのかというと、当時は数学者としての彼女より、ドストエフスキーに恋をしていた乙女の姿しか印象にありませんでした。コバレフスカヤの定理として今も度々引用される重要な定理を証明した高名な女性数学者であると認識したのは、だいぶ後になってからです。ちなみに母は教育ママとはかけ離れた放任主義者で、単に自分の好みの書を娘に読ませただけです。

ソーニャの時代には女性が大学で講義を受けることは通常は許されず、彼女は18歳で偽装結婚をしてヨーロッパに出て、好きな勉強をしました。24歳で博士号をとり、28歳で出産し、33歳で夫を亡くしますが、次々に良い研究成果をあげ、34歳のとき、ストックホルム大学で教授の地位を獲得、41歳の死去に至るまで、輝かしい業績を残しました。 彼女の周りには当時の著名な数学者の名前が溢れ、彼女がその一員であったことは、この時代には画期的なことであると感動します。

夏目 漱石 著

こころ

『こころ/坊ちゃん』文春文庫、1996年

漱石の名作。下宿のお嬢さんを好きになってしまい、ひょんなことで一つ屋根の下に下宿した友人もお嬢さんを好きになってしまう。その時、主人公は何をしたか。重い小説です。一生をそのお嬢さんと過ごすことになった主人公は果たして幸せであったか。ちょっとミステリー風の書き出しですが、心の底にひしひしと伝わってくる何かがあります。好きなものを諦めることはできない。不可抗力だったのか。好きになってしまったら許されるのか、色々考えさせられる小説です。

漱石といえば、猫とか、坊ちゃんとか、ユーモアに富んだ小説を思い浮かべることも多いかと思いますが、同じ作家でもいろいろ読んでみると見方が変わり、興味をそそられます。幼少期は複雑な育ち方をして、東京帝大の英文学部を卒業し、イギリスに渡って精神を病み、帰国後文筆家として認められ、49歳で亡くなった作家です。 次にあげる三島と同様、40代で死にゆく作者は、いつこんなに多くの傑作をものしたのだろうと考えてしまいます。平均寿命が90歳近い現代からみると、この時代の偉人の仕事ぶりには感心させられます。

三島 由紀夫 著
仮面の告白
新潮文庫、2003年

中学生の頃読んだ『潮騒』と同じ著者ということでちょっと驚いた『仮面の告白』。今回斜めに読み直しました。三島の天才性を感じる小説です。ちょっと異端かもしれませんが、LGBT の時代ですから、文学の世界でなくても普通にこれを読めば、共感できるところがあるでしょう。心理描写、情景描写、自らの中高生のときの体験かみずみずしさを感じる記述、そして女性を愛せないことによる女性に対する達観は、ある意味救いとなっています。

三島は学習院を首席卒業、東大法科で論理性を学び、これが文学においても唯美主義でありながら、なお鋭さを感じる作家の背景です。祖母に溺愛されて育ったひ弱な少年は、のちにボディビルにはまり、肉体改造をし、俳優としても活躍。そして45歳の若さで自衛隊に軍服姿で突入し、大演説を行なった後、切腹介助により自死しました。「金閣寺」や、「肉体の学校」などなど、琴線に触れる作品を多数残していますが、今回これを書くにあたり、まだまだ読んでない作品が多数あることに気づき、読むのが楽しみになってきました。こういう人はやはり天才なのだと思うわけです。ちなみに最近、三島賞をとった作品、あれはちょっと三島には程遠い。

リチャード・ファインマン 著
ご冗談でしょう、ファインマンさん（上・下）
大貫 昌子 訳、岩波現代文庫、2000年

ノーベル物理学賞をとったファインマンは数冊のエッセイを書いています。これはもう20年以上前に話題になった本ですが、ファインマンの科学者としての日常、実験者としての飽くなき追求、アイディア溢れる実験、いろんな意味でおもしろいです。何事に対しても工夫と原理を考えていて、ラジオの修理から電話の効果的な繋ぎ方とか、インゲン豆やジャガイモの切り方とか、金庫の開け方とか、あらゆることに興味を持ち、改善を考え、楽しむ。ありの行動を調べるために行列を操作してみたり、スプリンクラーの吹き口を水中に入れたらどう回るかとか、普通の人が考えないようなことを考えて実行する、そんな話が次から次へと書かれていて、飽きることなく読めて、自分も科学者の目で色々なものを見てみよう、という気持ちになります。ユーモアもあり、ファインマンの性格が伝わってくる素晴らしい本です。MIT では、科学ばかりでなく、文学や哲学が必修だったそうです。ファインマンは哲学を選択。教授の講義は「むにゃむにゃもがもが」としか聞こえなかったらしいのですが、レポートのために夢をテーマに夢分析をしています（フロイトみたい）。なんでも興味の対象にして真剣に取り組むファインマンの姿があります。

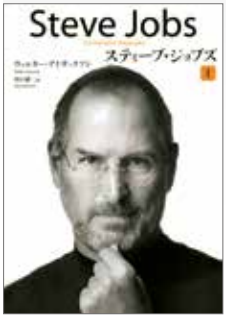
ラファイエット夫人 著
クレーヴの奥方
生島 遼一 訳、岩波文庫、1976年

美しい妻を心から愛しているクレーブは、妻も自分のことを同様に愛していると信じています。一方、美しい奥方を密かに愛してしまう貴公子ヌムール公。今で言えばストーカーのような行為をして迫るも奥方は? 奥方の肖像画をそっとマントに隠すヌムール公を見てしまった彼女も、ヌムール公を心から愛してしまいます。もちろん二人は決して触れ合いません。そして奥方はついにその思いに耐えきれず、それを夫に告げてしまう。夫はショックで病に倒れ、死んでしまう。さて、二人はどうなるのでしょう?

この結末には感動を覚えます。奥方の母親は、若い娘に愛について厳しく教えました。愛というものは移ろいやすく、どんな熱烈な愛にも、嫉妬や不安にかられる時が訪れる、そうしたものに振り回されてはならないと。この教えが奥方に崇高な生き方を選ばせました。

今の若者には、いえ、親の世代にもなかなかできない考え方でしょう。だからこそちょっと読んでもらいたい小説です。 愛というものを知り尽くした著者の傑作だと思います。欲望のままに生きるボバリー夫人と対照的です。両方読んでください。

しかし ── 夫に他の男性への思いを告白してしまう、これはどうでしょう。それで夫は亡くなったのですから。



ウォルター・アイザックソン 著
スティーブ・ジョブズ I
井口 耕二 訳、講談社、2012年

言わずと知れたアップルの創始者。一度は首になったアップルを立て直した立役者。しかし、多分、発達障害と言われる部類の人物です。こんな人が隣にいたら、こっちもおかしくなります。それでもなおその天才性に魅入られ、これでもか、これでもかという要求に周りも答えていく。そして美しい i-Mac が生まれ、i-Pod が生まれ、そして i-Phone につながる。フォントにこだわった背景にはカリグラフィーの習得があり、デバイスの形状にも画面の配置にも彼の美意識が極端にまで反映されています。彼の死は本当に惜しいと思います。もっともっと私たちの夢を実現して欲しかった。妥協を許さず、とことんこだわり、ユーザの身になった製品を次々開発しました。スポーツや音楽は万人に感動を与えることができます。そしてこうした商品を開発した人も万人に幸福を与えることができます。羨ましい人たちです。今回この本の II を読んでいないことに気づきました。是非読んでみたいと思います。

2015年9月に、講談社プラスα文庫として文庫化もされています。

川内の図書館で本を借りて、1階のシアトルズカフェでコーヒーでも飲みながらじっくりそれを読む、これもなかなかおしゃれです。皆さんも恵まれた東北大の環境の中でたくさんの本を読んでください。

本で得る視座の転換と感動体験

米倉　等　YONEKURA, Hitoshi

総長特命教授、東北大学名誉教授、農学博士
専門分野:開発経済学、地域研究

担当科目
基礎ゼミ:「国際開発の課題と方法」／「ユーラシア農耕史:生態、生業、民族」
基幹科目:「歴史と人間社会:東南アジアの歴史と社会」／「経済と社会:アジアの経済発展」
カレントトピックス科目:「資源環境経済学入門:EXCELを使って計算してみよう」

研究室:国際交流棟2階 211号室

学生諸君が手に入れやすい文庫本・新書版化された本を選んだ。初めの3冊は学術的な教養・啓蒙的なものあるいはそのベースになる調査記録だ。私をそれまで縛っていた固定観念をひっくり返してくれた3冊で、日本や日本人というものの理解を相対化してくれた目からウロコの著書。後の3冊は、赤裸々な体験的著書で、個性が全面に出てくる。したがって執筆の過程で、ある程度脚色もあるかもしれない。しかしともかく面白く、こんな状況があったのか、こんな人生があるのか、そしてこんな生き方をしてみたいなどと思った本だ。読書による視座転換や感動の体験はそれを読む個人の年齢や境遇、関心と知識など様々な要因に左右されるだろうから同じ読後感を齎すか否かわからない。しかし、もし心を動かされれば、たぶん知的に逞しく生き抜こうと勇気を得られることだろう。

古典名作の小型廉価普及版の起源は明治時代だが、その後昭和の初めに「円本」などと言われた文学全集が現れ、さらに学術啓蒙的著書も含めた文庫本が登場した。ドイツのレクラム文庫にならった1927年創刊の岩波文庫である。新書版は岩波新書が嚆矢でイギリスのペリカンブックスにならった。文庫本や新書版ばかり選んで、お手軽な「文庫新書教養主義」などと揶揄されそうだが、コンパクトな良書が安く気軽に手に入れられる（学生諸君には安くないかもしれないが）のは優れた文化だと思う。この文化の中から、私の読書年輪の中心軸に近く、覚醒させられた、読んで面白く心底感動したといった著書を選んだ。なので、紹介する本がこのブックレットの副題「研究と講義への案内」にふさわしいかどうかは保証の限りではない。研究にも講義にも何の役にも立たないかもしれない、が何か共感できるところがあれば幸い。

年輪ばかり重ねて薹が立ったせいか、最近読む本は専門書も含めて「どこかで聞いた風な」だったり、読ませようというスキルもどこかで使われていたようなそんな受け止め方をすることが多くなり、今更ながら古典に戻らなければと思う。しかし、若い学生諸君はそんなに気取ることはない、面白そうな本を手当たり次第に読むのが一番。20から30ページも読んで面白くなかったら一旦本を閉じてしまうのも良い。ただ、時が経ってこの上なく面白く読めるようになることもあるので要注意。学生時代、スタンダールの『赤と黒』など文庫本で80ページも読んだのに全く面白くなく途中放棄。しかし、何年かたってふと読み返したところ主人公ジュリアン・ソレルの人生にこの上なく惹かれてあっという間に読んでしまった経験がある。私の講義や論文も後で顧みてわかるような深い意義と味を潜ませている（と勝手に思っている）のだが、気づいてくれた学生はいるだろうか。

増田 四郎 著

ヨーロッパとは何か

岩波新書、1967年

グローバルヒストリーと呼ばれるものの一つといえるだろうか。歴史舞台としてのヨーロッパの性格をつかむことに主眼を置いて、歴史の転換を具体的に記述している。国別ではなくヨーロッパの歴史を一つとしてみるという視点が新鮮で、それが自分の住む日本やアジアを考えるうえでも重要な視点であると分かって大変興味深く読んだ。日本なら、アジアならと比較しつつ歴史の展開を考えることができるようになって、ヨーロッパに関する本を面白く濫読した。ヨーロッパで作られた世界史観が、人類文化発展の頂点にヨーロッパが立っていることを理論づけるための道具だったと指摘している。この歴史を日本にも当てはめて、日本の知識人や青年は地理的なヨーロッパを超えて自己都合的に「世界性」を獲得した結果、アジアの中でいち早く抜きんでて日本が発展でき周辺地域を植民地化することを正当化する道具にもなった、と1967年に書かれたこの本は教えてくれる。教科書で習ったのとは全く違って、天動説から地動説に転換したかのように歴史舞台の構造が見えてきて目からウロコだった。ヨーロッパの歴史的世界観を批判し相対化したサイードの「オリエンタリズム」(1978年）が著される11年も前にこの本は書かれた。

姜 尚中 著

オリエンタリズムの彼方へ
―近代文化批判―

岩波現代文庫、2004年

アジアと日本に関して、3章では「日本の植民政策学とオリエンタリズム」と題して、日本の植民地支配が「科学的植民」として正当化された論理が述べられている。日本のいち早い近代化西欧化が、ヨーロッパとの近似性の発見にあったこと、そのことを根拠づける学問が、ヨーロッパから輸入された今でいえばオリエンタリズムに染め上がった学問だと喝破したところに強く心打たれた。「植民地帝国の地理的暴力が、知的支配と文化的ヘゲモニーを獲得してこのフィルターによって濾過され」てしまったという。著者は、朝鮮半島出身の両親を持ち日本社会ではいはばマイノリティとして成長し教育を受け葛藤を生きてきた。単純に日本社会の中に埋没した人間では描けない日本というものを剔抉してわからせてくれた。複眼的視点と異なる座標軸で社会や歴史を見ることの大切さと面白さを味あわせてくれる。「形式をその内容から切断することで、空虚であるがゆえにどんな内容でも勝手に押し込められる」という「日本化」つまりは良いとこ取りの歴史観は今も生きていて、昨今喧しい国際化も「日本化」へと収束していきかねない「国際化」だと指摘している。たしかに、国際的に活躍できる語学力だ教養や歴史への関心だなどという言説も、どこか「形式から内容を切断」した処世のようにも思える。

中川 善之助 著

民法風土記―「法の現場」を歩く―

講談社学術文庫、2001年

著者は、大正11年当時の東北帝国大学法文学部の助教授に迎えられ以来40年近く東北大学に在職、戦後の民法大改正の基本にもなった日本の家族法理論を確立した権威である。この著書は法社会学的なフィールドワークで、昭和初期から30年頃まで自分の足で訪問調査した18の地域の記録である。東北地方は、南三陸沿岸、陸奥、秋田、仙台、岩手県大船渡付近の奥四ガ浜が採録されている。人身売買にも近い「背負子」と呼ばれた労働力としての養子や同様の「ナンキン小僧」などが東北地方にあったこと、東南アジアで多く見られる末子相続の制度が日本の各地にもあること、今は観光地で有名な飛騨白川郷にあった大家族制度では家長以外の男子は嫁をとってもその家には迎え入れられない妻問の内縁婚であり、明治時代には戸籍制度ができたものの生まれた子には戸籍が無く妻の家で育てられたこと、旧南部藩領（現在は青森県内）の農民的大家族など、が報告されている。今は忘れられつつある日本社会の原風景を伝え、著者が内縁の妻、非嫡出子、養子などの保護を強く説いた背景がわかる。旅行記としても面白く、昭和前半の日本の風土と社会が丁寧に描かれている。描かれた原風景を想うと冨田勲の名曲「新日本紀行」の響きが体中に木霊するかのようだ。

藤原 てい 著

流れる星は生きている

中公文庫、1976年（※2002年新版）

第二次大戦後の満州（現在の中国東北部）の新京（現在の長春）から日本への母と幼子3人の一家の1年間に及ぶ帰還の過程を描いている。子供たちへの遺書のつもりで書き始めたのがこの本になった。何もかも吐き出してやっとこの母は戦後を生き抜く力を取り戻せた。もう一冊紹介する『若き数学者のアメリカ』の著者藤原正彦の母で、幼い正彦氏も本書に登場する。夫は、旧満州の気象台（観象台といった）に勤務、戦後は著名な小説家新田次郎になった人物。ソ連の侵攻が始まるや直ちに逃避行が始まり、朝鮮半島の宣川で夫に再会できたのもつかの間、夫は旧満州・延吉に送られ捕虜となり母と幼子が残された。そこから先は鉄道が閉鎖され宣川の地で越冬、翌年の夏を待って38度線を歩いて越えたのち釜山に到達、船で日本に辿り着いた。中学生や高校生にも薦めたい本だが、大学生としての読み方があろうと思う。戦争、そして国家というものが頼りにならなくなった時の人々がどのような境涯に陥れられるか、その時どう生き抜くのかを生々しく間接体験させてくれる。様々な命の危険、赤貧の暮らし、屈辱や裏切りと人間不信、そしてその逆の人間性、信頼、愛情と思慕が渦巻く様が赤裸々に描かれている。読み終えた時には涙を禁じえなかった感動の書物である。

藤原 正彦 著

若き数学者のアメリカ

新潮文庫、1981年

旧満州から母と兄妹とともに生還、その後意気も軒昂に成長した藤原正彦の1972年から2年間のアメリカでの青春グラフィティだ。とにかく面白く読め、文章にもリズムがあって痛快だ。もっと早く読めていればと思うが、出版されたのは私の学生時代の後だった。日本で教育を受け学位をとりアメリカ中西部のハーバードなどとも称されるミシガン大学に30歳で研究員として渡米、2年目にはコロラド大学に移って助教授として週6時間の講義を受け持つようになる。数学自体はほとんど書かれていないが、日本の数学のレベルの高さが推察されて小気味よい。気恥ずかしさを禁じえない経験もしつつ天性の図々しさか、“貪欲に覚え、臆せず真似をする”方式でたちまち英語をモノにする。それでもやはり海外生活は大変、ミシガンの冬は厳しく孤独でノイローゼのようになってしまう。コロラドに移って、土地柄も明るくなって気を取り戻し、英語も上達したのだろう学生への授業を楽しむ。精気あふれるアメリカの学生群像がいきいきと暖かく描かれている。日本の大学生と違って知識の詰込教育は殆ど受けていない、しかし論争にはめっぽう強く、論理的で明快に議論する。論理の矛盾を突かれてやり込められる、それを懸命にやり返そうと奮闘する若き数学者にも好感が持てて胸が膨らんだ。

服部 正也 著

ルワンダ中央銀行総裁日記

中公新書、1972年（※2009年増補版）

日銀から IMF に出向しそこで1965年から71年まで6年間アフリカのルワンダの中央銀行総裁として、経済の立て直しに奮闘した記録だ。ルワンダと言えば、その後90年代に民族対立による内戦で100万人近い人々が虐殺される悲惨な歴史をたどることになる。この民族対立はベルギーによる植民地支配の負の遺産の一つだった。著者はそのような植民地遺制がまだ色濃く残っていたであろう時代に活動をしたことになる。それまで大蔵省が持っていた外貨管理権を総裁を務めていた中央銀行に奪回することで応急措置をとり、そこから経済再建のスタートを切る。まず経済再建計画を答申し、通貨改革を実施、さらに発展の基礎固めに開発銀行を設立、ルワンダ経済の柱であるコーヒー生産増強のための価格や関税制度などに果敢に切り込むなど改革を進めた。八面六臂の活躍ぶりだ。外国人が国の中央銀行の総裁になれることにも驚いたが、取り組んだ途上国経済の問題点、経済システムの構築などは開発経済学を学ぶ出発点としてもまことに興味深いものだった。また、どのように生きどのように外国で暮らし、その地の人々とどのように信頼と友情を築くか、一人の人としてこんな信念ある生き方をしたいと憧憬の念を抱いた思い出の一冊だ。

高木　泉　TAKAGI, Izumi

背表紙の囁き

高木　泉　TAKAGI, Izumi

総長特命教授、東北大学名誉教授、理学博士
専門分野:数学(数理生物学)

担当科目
基幹科目:「自然界の構造:数理の眼をとおしてみる自然」
基礎ゼミ:「東洋数学の源流を訪ねて」

研究室:国際交流棟2階　216号室

研究ではオリジナリティが求められる。これまで誰も考えたことのなかったことを考え、新しいことを発見し、あるいは誰にも解けなかった問題に解答を与える、新しいことだから発表の価値がある。本を読んだり、話を聴いたりすると、影響を受ける。オリジナリティが損なわれることになるのではないか。気に入った本や論文があると文体まで似てくる。大学院生のころ集中して読んだ Sattinger の講義録を30年後に読み返したとき、自分の書く英語の原型がここにあったのかと驚いた。しかし、言葉の習得がそうであるように、何でも真似ることから始まる。オリジナリティは、吸収し消化した後で漸く姿を現すものだろう。

振り返ってみると、自分の読書は、「いつも夢中になったり飽きてしまったり」(植草甚一の著書の標題）であったと思う。きっかけは多くの場合、偶然である。本屋の書棚に並んでいる本の背表紙が、読んでみませんか?と囁きかけてくる。パラパラとめくってみて波長が合えば、買う。その本が気に入れば、今度は同じ著者のものを求めて本屋に足を運ぶ。あるいは、人に勧められたり新聞の書評欄でその本の存在を知ることもある。いずれにせよ、専門分野の文献以外は、その時々の関心にまかせてランダムに読んできた。偶然読んだ本から新たな関心が芽生えたことのほうが余程多い。しかし、気に入った一人の作者の本を読み続けていくと、何かが違う、と心のどこかで波が立ち始める。もしかすると、これがオリジナリティの芽なのかも知れない。そして、オリジナリティとは、外からの刺激に対する反応の仕方に現れるものではないかと思い至る。

何よりも、読書は愉しい経験である。知らなかった世界を体験するのだから。その経験の蓄積がその人をつくっていくことになるのだろう。早速、図書館、本屋に足を運んで、書棚に並んだ本の背表紙の囁きに耳を欹ててみてはいかが?「眠られぬ夜のために」の隣に「純粋理性批判」を並べる店員さんのユーモアとの不意の出会いのような愉しみもある。

ここに挙げた6冊は講義内容との関係から選んだものではなく、これまで読んだ本で特に印象に残っているものの中から学問に関するもの3冊、戦争が影響するもの3冊である。そのうちの1冊は両方に関係している。なぜ戦争かと云えば、現代の日本は、二十世紀前半の日本のあり方に本質的に規定されているからである。二十一世紀前半をつくっていく若い人たちに、二十世紀中葉の日本のことを是非知っておいてもらいたいと願う。

リチャード・P・ファインマン／ロバート・B・レイトン／マシュー・サンズ 著

ファインマン物理学

Ⅰ：坪井 忠二／Ⅱ：富山 小太郎／Ⅲ：宮島 龍興／
Ⅳ：戸田 盛和／Ⅴ：砂川 重信 訳、岩波書店、1986年

原書："The Feynman Lectures on Physics"(in 3 volumes) by Richard Phillips Feynman/Robert B. Leighton/Matthew Sands, Addison Wesley, 1963/1964/1965

四方堂から届いた小包を開けて出てきた赤い表紙の大判の三冊が Feynman Lectures on Physics だった。四年生になったばかりの春のことだった。友人から、今頃その本を読むなんて遅いよと言われた。

第1章を読み始めてすぐに「しまった、物理にしておけばよかった」と思った。こんなに面白い学問とは知らなかった。（だから、もっと早い時期に読むべき本だ、という友人の指摘の正しさをすぐに理解した。）高校以来、物理は不得意で、苦手意識が強かったが、数学の背後には物理的現実があることに薄々気づき始めたのもその頃だった。なぜ、ファインマンを選んだのか、覚えていないが、第1章を読み終えたとき、これは一生のつきあいになるだろうと思った。次世代にたった一言しか伝えることができないとしたら、「物質は原子からできている」という。それだけ言っておけば、すぐに現代の科学の水準に追いつくだろう…。

第21章は調和振動子であるが、導入部に「バネの振動と電子回路の発振とは数学を通してみれば同じものである」と説明してあるのを読んで、これほど数学の本質を語ったものはないと感動した。しばしば引用させてもらっている。

バーバラ・W・タックマン 著

愚行の世界史
ートロイアからベトナムまで（上・下）

大社 淑子 訳、中公文庫、2009年

原書："The March of Folly: From Troy to Vietnam" by Barbara W. Tuchman, Knopf, 1984
参考：朝日新聞社、1987年（単行本）

1983年秋からニューヨークにあるクーラン数理科学研究所で1年弱を過ごした。研究所の先生の紹介で知り合ったウォルターに、英会話の訓練として様々な雑談の相手をしてもらった。彼は現在のアメリカの最大の問題の一つは貧困である、と言う。当時1ドルが250円前後であり、1ドルの購買力は大きかった。そのアメリカで貧しい人がたくさんいるということは驚きというよりも想像の埒外であった。彼が教えてくれた本がこれだ。The March of Folly. タイトルが強く印象に残ったが、そのときは本を手にすることもなかった。帰国後数年して翻訳が出版されたけれど、原題のほうを気に入っている。

最も重要な局面で、人は最も愚かな選択をしてしまうことがしばしばある。誰もが思い当たることであるが、この本は、トロイアからベトナムまで、これでもかこれでもか、と人類の（政治的）愚行を並べていく。木馬を城内に引き入れたトロイア、真珠湾を攻撃して米国を全面戦争に駆り立てた日本、他にも路があったにも拘らず、魅入られたように最悪の選択をしてしまう。

過去を現在の視点のみから断罪してはいけないと云う考えもあるが、失敗から学ぶ謙虚さを持たないと同じ愚行を繰り返すものである。

團 勝磨 著

ウニと語る―激動の時代 自然を友とした ある生物学者の生涯―（増補）

学会出版センター、1988年

1980年代の半ばに生物学者の勉強会に参加させていただいく機会を得た。数学と生物学は対極にあるもので、複雑な生命現象を理解することと数学とは無関係と思われていた時代であった（いまでもそうだろう）。あなたのような（異質な）人の参加を歓迎しますと仰って参加を黙認してくださった形態形成研究会の主催者團まりな先生には今でも感謝している。生協理薬店の書籍売り場にあった本書を指して、團先生のお父上の自伝ですよ、と教えてくださったのは、形態形成研究会の仲間の生物学科の大椙先生であった。

本書には1904年からほぼ80年間のできごとが書かれている。前半の40年のうちに世界大戦が二度起きている。節の見出しが「戦雲の近づくなかで」、「戦火をくぐって」となり、後半が「廃墟の中から」で始まる。

優れた数学者は生涯にわたる一貫した研究テーマを持っている、とは聞かされていたが、生物学者も然り。團勝磨先生はウニの卵で発生の実験をされた。「ウニとの出会い」、「ウニと別れて」、「ウニとの再会」とあるのを見るとこれはもう愛情物語である。最後は「ウニが語りかけてくる」。生物学者の気持ちがあふれ出ている。

片岡 義男 著

日本語で生きるとは

筑摩書房、1999年

片岡義男の小説やエッセーはときどき読んでいたが、世紀が改まったころにはご無沙汰していた。多分バスを待つ間に立ち寄った本屋でふと目にしたのがこの本だったのだろう。まえがきに「『よろしくお願いします』という日本語を英語で言うには、なんと言えばいいのですかと、…訊かれたことが、僕がこの本を書くためのきっかけとなった」とある。目次をみると「ぺらぺらとはなにだったか」という見出しが目に入る。決めた、買おう。早速バスの中で読み始める。あまりにたくさん共感できることが並んでいたので、二冊買って、指導していた大学院生に読ませたほどである。

やはり背表紙の囁きにひかれて買った中津燎子の『なんで英語やるの?』を読んで以来、「英語がぺらぺら」に疑問をもってきたが、本書では、説得力のある英語を話すには、文法が守られていなければならない、という。滞米何十年となるS教授のカタカナ英語が正確に通じていたのは、そのせいだったのかと納得した。片岡義男の著作から米国社会の構造について多くのことを学んだ。

本書の前に『日本語の外へ』が出ている。米国の大学生が No War for Oil と抵抗した湾岸戦争が考察されている。

水村 美苗 著
本格小説（上・下）
新潮文庫、2005年（2002年）

2002年の暮れ、宮崎に出張したときに道中退屈だろうと思ってこの厚い本を持っていった。宿は「臨江亭」。高校の修学旅行は九州一周だったが、宮崎での宿泊は、このような感じの旅館だったような気がした。そのレトロ感と本書の内容が共振し、夢中になって読んだ。

高校に入学した1966年、横浜駅西口の地下通路では傷痍軍人がアコーディオンを弾いていた。現代国語の授業中に大きな地震が起きたとき、ざわめく生徒たちを「静かにしろ」と一喝して落ち着かせた先生は関東大震災の被災者だった。戦争が終わって20年が過ぎたが、戦前戦中を体験した人々が社会の大多数を占めていた。同時に、高校三年生のときには普通に使われていた「封建的」と云う言葉が大学四年生になったときには死語となっていた。本書は、日本が戦後の貧しさから急速に脱出していった頃を背景に、名家の娘と中国からの引揚者の貧しい少年との恋愛を描いたものである。当時の情景が次々に浮かび上がり、没入してしまった。

水村美苗には『日本語が亡びるとき』という評論がある。英語の世界で暮らした人の母国語に対する思いが詰まっている。

ウィリアム・ブロード／ニコラス・ウェイド 著
背信の科学者たち
―論文捏造はなぜ繰り返されるのか？―
牧野 賢治 訳、講談社、2014年

とにかく呆れた。笑ってしまうしかない。偽造捏造の行進である。皮膚移植の実験がうまくいったように見せるためマウスにフェルトペンで色をつける。これは1974年に起きたことだが、いまなら、フォトショップなどを使って巧妙に捏造するのかも知れない。

学位が欲しくて、研究費が欲しくて、よい就職先を見つけるために、データを捏造する若い人々の例だけではない。サルとヒトの間をつなぐ“ミッシング・リング”の骨を偽造して埋めておくという悪戯もある。発見者を嘲笑するためである。偽造物であると断定されたのは40年後だったという。本書では、プトレマイオス、ガリレイ、ニュートン、ドルトン、メンデル、ミリカンなど教科書に載っている人々も剽窃、捏造を行っているという。

では、我々が信じている科学の正しさとは何なのか、そもそも科学とは何なのか、考えさせられた。また、功名心から学問を目指す者を戒められたM先生を思い出す。万事数値化の世の中である。そのうち、学術雑誌には、この論文を読んで正しいと思った人何人、間違っていると思った人何人というようなレビューがつくようになるのだろうか。

乱読と精読のすすめ
―― 私の読書経験から

座小田 豊 ZAKOTA, Yutaka

総長特命教授、東北大学名誉教授、文学修士
専門分野:哲学、近代哲学

担当科目
基礎ゼミ:「『徒然草』の思想世界へ」
基幹科目:「思想と倫理の世界:「無限」の近代―「理性」というラビリンス」
哲学・倫理学:「自由」と「良心」の行方―ドイツ観念論における「神の思想」の人間的意義
展開ゼミ:「教養の哲学ゼミ1:『善の研究』(西田幾太郎)を読む」/「教養の哲学ゼミ2:『日本的霊性』(鈴木大拙)を読む」

研究室:国際交流棟2階　206号室

『将来の学力は10歳までの「読書量」で決まる!』という本がよく売れているようだ。幼い子供を持つ世の親御さんたちの心をうまく突くタイトルの効果もあるのだろう。「数万部販売」という宣伝文句が踊っている。

この本のタイトル通りだと私の学力は、ほとんど低レベルに留まっていることになりそうである。子供の頃、本を読んだという記憶はおよそ皆無である。小学生までは、野山を駆け巡って虫を採り、川や池に浸かっては魚を捕るという日々を送っていた。本を読むようになったのは中学二年生以降のことである。担任になったＨ先生が、私にだけ1年間に図書室の本を100冊以上読むようにと厳しく指図され、図書室の図書カードを時々チェックされたからである。手当たり次第に読み始め、少しずつ自分の興味関心の対象がはっきりしてきてからは、特に歴史書と小説に手を伸ばして読むようになった。内容の理解のことはさておき、たくさんの本を読むことを第一義にひたすら乱読したが、こうして、情報の少ない当時のこと、本を通して人間や世界の多様さ多彩さに眼を開かれることになったのである。

高校生になっても乱読を続け、内外の様々な小説を渉猟し、読み浸っていたが、いくつかの出来事が重なって、ある時から、この時期誰もが直面する「人間とは何か」という問いに私も出会い、精読しなければ理解できない思想書を読み齧るようになった。この問いに煩悶するなかで、理系から文系へと志望が変わり、その行きつく先に以降の人生の進路を決定づける哲学があったことになる。

大学で哲学を専攻してからは、先生方から徹底的に精読の作法を叩き込まれた。哲学者たちが何をどのように考えているのか、その意味を考えながら、一字一句も疎かにせずに原書を読み解いていく演習での作業が、同時に自分の思考力を鍛えることにもつながる。教員になってからは、時として自分勝手な解釈に流れてしまう受講生に、諸先生方にならって手ほどきをし、テキストに学んで考えることを説き続けてきた。テキストを正確に読みとることが、直ちに自分で考えることになる――これが精読の本義である。とはいえ、私自身は乱読も継続してきた。専門の哲学関係の書物はもちろん、現代の小説、日本の古典文学や内外の詩集、ファンタジー小説、あるいはエッセイ集等々、興味と関心の赴くままに手に取り、乱読を重ねている。新しい楽しみと喜びが得られるとも思うからである。

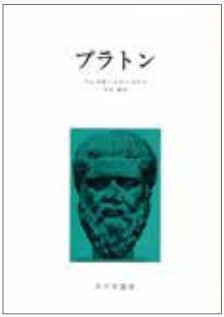
乱読と精読、いずれにせよ自分の思考空間・思考力を広げ涵養するのに読書ほど役立つものはないだろう。「六十の手習い」と言われるほどなのだから、二十代の君たちが始めるのに遅いということのあろうはずもない。

パスカル 著
パンセ
前田　陽一／由木　康　訳、中公文庫、
1973年（※2018年改版）

「人間は考える葦である」――誰もが知っているパスカルの名言である。考えるものである限り、いとも簡単に人間を押しつぶすであろう宇宙よりも人間は「尊い」、なぜなら人間は「自分が死ぬこと、宇宙が自分を超えること、を知っているが、宇宙はなにも知らない」からだ（347番）。『パンセ』には人生のヒントになる警句がみちている。私自身は、人生に悩み始めていた高校1年の終わりに、のちにドイツ語学者になった早熟の友人M君にこの本を教えられた。当時は抄訳本で、いわば名言ばかりが収められた、読みやすい文庫本だったが、この全訳本が出てすぐに買い求め、長い間私の枕頭の書の一つになってきた。もとより、パスカルは信仰の人であるがゆえに、随所に神への祈りが記され、無限と無との中間に位置する人間に対する冷静な視線と細やかな気配りが配されている。真空実験に成功し、数々の科学的功績も上げた彼の幾何学的精神は、人間の驕りや傲慢を戒める厳しい繊細な精神によって支えられている。「二つの行き過ぎ。理性を排除すること、理性しか認めないこと」(253番)。乱読して、気に入った断章にチェックを入れ、繰り返し精読することをお勧めしたい。悩める君には、きっと抜け道が見つかり、明日への力が湧いてくることだろう。

馬場 あき子 著
鬼の研究
ちくま文庫、1988年

かつて「鬼の文化誌」といったものを書いてみたいと考えていた時期がある。「鬼!人でなし!」という、時代劇に登場する悪役に投げつけられる常套の悪態が気になっていたこともそうだが、幼いころから何やら「オニがくるよ」と言われて脅されてきたせいかもしれない。可愛らしい子鬼たち（我が子）が眼の前で戯れている自分の年齢を自覚するようになったからでもある。ちょうど三一書房版のこの書があって、すぐに読み、山なす文献を博捜して得たと思われる著者の該博な知識と、鬼たちへの共感に満ちた多彩な深い洞察力に圧倒された。著者によれば、鬼とは「畏れるべきものであり、慎むべき不安でもあった根源の力」であり、他方で忌み嫌われる鬼たちとは、権力によって追い払われた「反体制、反秩序」の輩たちであり、彼らを著者は「犠とされた人と生活」の「暗黒部に生き耐えた人々の意志や姿」でもあると言う。今回再読してみて、鬼の姿を多面的に浮かび上がらせる著者の力量と表現力には、とてもかなわないと思ったことである。近年私自身「良心」概念を探究するなかで、「オニ」は人びとの心のなかに多様な姿をして住んでいるものだと思うようになっている。「オニ」とは私たちの良心に映し出される自分自身の鏡像ではないのかと。



アレクサンドル・コイレ 著

プラトン

川田 殖 訳、みすず書房、1972年

著者は冒頭で「プラトンの作品は老いることを知らぬかのように、いつも生命力にあふれ、なお生きている」と述べる。科学史家として著名な著者だけに、思想の今日的意味を問うという歴史的研究の射程が十二分に貫かれている。全体は二編に分かれ、前半は『メノン』、『プロタゴラス』、『テアイテトス』の、ソクラテス対話篇の解釈であり、後半がプラトンの政治哲学の現代的意義の提唱という構成になっている。第一篇は「知識とは何か」、「徳とは何か」という問いを中心に、「魂それ自身による、魂の内なる労苦」を促し、「魂の出産を看取る」ソクラテスの姿が描かれる。「魂の深みで行われる」言論の実践者、「プラトンの魂を熱し、哲学の火花を点じた」ソクラテスこそ「人類がかつて知り得たただひとりのまことの哲学者」と呼ぶ。その師を死へと追いやったアテナイの政治状況の解明こそプラトンの最大の関心であったと著者はみる。第二次世界大戦後1945年に発表された本書は、ヨーロッパの混沌とした情勢下にあって、プラトン哲学に立ち帰って危機にさらされた民主主義の根本問題を読み解こうとする著者の、時代を憂い、プラトンを想う熱い息吹が全編に充ち溢れている。民主主義とは何かが問われる今こそ読まれて欲しい書である。

原 民喜 著

小説集　夏の花

岩波文庫、1988年

――「明日の人類に送る記念の作品」

（初版の帯のことば）

「最も痛ましい終末の日の姿」、「想像を絶した地獄変」――1945年8月6日の朝8時過ぎ、広島の上空で原子爆弾がさく裂した。たまたま厠にいて一命をとりとめた著者は、直後の市内の有様を作品の冒頭でまずこう表現し、自らが体験した人々や街の様子を克明に描き出していく。その惨状は、今日の私たちも様々な資料を通して目にすることができるが、その場にいて人々の文字通りの阿鼻叫喚を直接に受け止め、その事実を書き記さなければならなかった著者の苦悩は、私たちの想念をはるかに超えて凄惨である。人々の無惨な死を、そして眼前で死にゆく人々を前にして為すすべもない己の無力をどうすればよいのか。著者の想いは「スベテアッタコトカ　アリエタコトナノカ」というフレーズを含むカタカナの詩に端的に表現されている。大学院生の時、高校で国語の非常勤講師をしていたが、2年生の教科書にこの作品が収められていた。誰もが負うべき作者の重荷をどのように語ることができるのか、迷いに迷い、当時入手できた講談社文庫版を買って、全体をむさぼるように読んだ。併載されていた『鎮魂歌』にある「自分のために生きるな、死んだ人たちの嘆きのためにだけ生きよ」というリフレインが僅かな手がかりになるように思った記憶がある。

高橋 英夫 著
西行
岩波新書、1993年

「願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」――あまりにも有名な、西行が往生を願ったときに読んだ歌である。西行入滅後のちょうど五百年目に、芭蕉が故人を偲んであの「おくの細道」の旅に出立したことも良く知られている。この一事からしても西行が日本人にとってどれほど重大な人物であるかは推して知れる。ドイツ文学の研究から出発した著者は西行の生きざまに心服し、小著ながら、西行の生い立ちや出家のいきさつ、出家後から入滅までの「略伝」を押さえたうえで、その全体像と核心を描き出す。「桜に生き、桜に死す」西行、「人生は旅・旅は人生の原型」西行、「同質性を希求」し、「切に友を求めるがゆえに孤独をひしひしと感じとる」両義的西行。著者はこうした西行に、事柄を見る「眼」とそれを受け止める「心」を切り拓いた「隠者」を認め、西行の旅は、「心」という「もう一つの圏域」に入り込み、「心が心を見つめる極端な自己集中」の旅であったと読解する。西行は、「無」と「浄土」、「仏道と歌道」の一致を追究し続けた歌人であり、冒頭の歌の「情景の底には、荘厳された死」があるのであって、「死は咲き匂う桜花、無と美とは一致する」と断じる。日本文学の受け止め方を教えてくれる一書である。

ブルーノ・スネル 著
精神の発見
―ギリシア人におけるヨーロッパ的思考の発生に関する研究―
新井 靖一 訳、創文社、2003年（1974年一刷）

大学院生のころ哲学研究室で必読書と言われる書物が何冊かあった。これはそのうちの一冊。先生方はもちろん先輩たちもこぞって推奨していた。大部の本で、読むのに相当な苦労をした。当時線を引いた箇所がそのまま残っていて、どこに惹かれていたかが良く分かる。「文化史」の本質的な意義を教えてくれた書物である。古典文献学者である著者の迸るような筆力に、ヨーロッパの学者の驚異的な力量を思い知らされる。のみならず、「文化」や「哲学」が文化的伝統を継承する並々ならぬ苦闘の賜物であることが納得される。表題にあるように、「精神」は一朝一夕に見出されたものではない。古代ギリシアのホメロスの神話や、初期の哲学者たちやアテナイの哲学者たちの長い営為を通してはじめて「発見され」獲得されてきた「概念」なのである。それはまた、単に歴史的な出来事と言うにとどまらず、私たち一人びとりの魂の営みとしても受け取られなければならないのだと著者は言う。「精神」を、単なる言葉としてではなく、自分のものとして生み出していなければ、それが何であるかを語ることはできないからである。ことば、そして概念の持つ力は、歴史的文脈のなかでの理解を通して、私たち自らが生み出すほかはないのだと教えてくれる書である。

書を持って、旅へ出よう

花輪 公雄 HANAWA, Kimio

東北大学理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）（2012年度～2017年度）、教養教育院長（2012年度～2017年度）、東北大学名誉教授、理学博士
専門分野：海洋物理学、特に大規模大気海洋相互作用論

寺山修司は『書を捨てよ、町へ出よう』（芳賀書店、1967年）の中で、閉塞する社会を破壊し時代を変えろと若者を挑発した。私は、挑発ではないが「書を持って、旅へ出よう」と勧めたい。物理的実体としての「書（本）」を‘丸ごと’楽しんでもらいたい。

<本屋に行こう>　どこにいても通販で本を入手できる現在ではあるが、本との出会いは本屋が一番。本屋では‘私を読んでほしい’と、本の表紙や背表紙が訴えている。知らない街で初めて行く本屋では、いつもと違う本との出会いが待っている。

<本を手に取ろう>　角田光代が現代語訳した『源氏物語』（上巻）（河出書房新社、2017年、池澤夏樹個人編集「日本文学全集04」）の厚いこと厚いこと、700ページを超えている。2018年にはほぼ同じページ数の中巻と下巻が出版される（※中：2018年、下：2020年予定）。この分量は、世界初の長編小説と言われるにふさわしい貫禄ではないか。

<本を眺めよう>　1987年、村上春樹は『ノルウェイの森』（上・下巻）（講談社）を出版した。本のカバーは、上巻が緑一色、下巻が赤一色。この衝撃的なカバーは村上春樹自身の作品であり、この本の存在を多くの読者に印象付けた。

装丁は、読者をその本にいざなうとともに、読む前の‘心の置きよう’をも準備させる。丸谷才一や阿川佐和子をはじめとする多くのエッセイ集の表紙を飾る和田誠の作品は、心を癒し和ませてくれる本であることを示唆している。

<ページをめくろう>　「吾輩は猫である」、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」は、小説の最初の一文。誰でも知っているこれらの最初の一文は、小説にとって肝心要の文章であることを物語る。そして最後の一文も重要である。齋藤美奈子は『名作うしろ読み』（中央公論新社、2013年）で最後の一文から小説を読み解いた。

ところで、「春が二階から落ちてきた」で始まり、「春が二階から落ちてきた」で終わる小説とは？

<本棚に飾ろう>　読み終えた本は本棚に収めよう。本棚は、楽しみ、考え、そして学んだ足跡である。収められた本は背表紙で、時々は思い出し振り返ってほしいと訴えている。

最後に、画家で絵本作家、装丁家でもある安野光雅の叫びを引用しよう（『語前語後』から、朝日新聞出版、2008年）。

「僭越ながら、言い残しておきたい。教育の方法など世の中がどうなっても、『本を読む習慣さえつけておけば、あとはなんとかなる』。／重ねて言う。／本を読む習慣だけはつけておけ。／本を読む習慣だけはつけておけ」（筆者注：改行を／で示した）。

さあ、君たち、書を持って、旅へ出ようではないか。

（答え：仙台市在住で本学法学部出身の作家、伊坂幸太郎の『重力ピエロ』（新潮社、2003年））　（2018年2月）

フリッチョフ・ナンセン 著

フラム号北極海横断記－北の果て

太田 昌秀 訳、ニュートンプレス、1998年

19世紀後半、多くの極域探検が行われた。ノルウェーのF. ナンセン（1861-1930）は、1893年から3年間、特別設計のフラム号を北極海の氷域に意図的に閉じ込めて漂流するに任せた。本書はこの3年間にわたる探検の、ナンセンの日記を基にした一般向け報告書である。

ナンセンはこの間、氷山やフラム号が風下方向ではなく、風下に向かって20～40度右手にずれて流されることに気づいた。実際、本書に、「昨夜来の強い南風により、船は北東へと流された」などの記載がある。

ナンセンは、帰国後、ストックホルム大学のV.F.K. ビヤークネス（1862-1951）にこの観察結果を伝えた。ビヤークネスは、学生であったV.W. エクマン（1874-1954）にこの問題を解くようにと指示したところ、彼は理論的にこの謎を解いた。エクマン層の理論と今でも引用されているこの記念碑的英文論文は、1905年に出版された。自転する地球上の海水の運動は、回転の効果によるコリオリ力（転向力とも呼ばれる）が働き、日常の経験とは異なる独特の振舞いをするのである。

なお、ナンセンはその後政治家に転向し、難民問題への貢献で1922年ノーベル平和賞を受賞している。

マイケル・E. マン 著

地球温暖化論争
－標的にされたホッケースティック曲線－

藤倉 良／桂井 太郎 訳、化学同人、2014年

産業革命以来、人類は莫大な化石燃料を消費してエネルギーを獲得してきた。その結果、大気中には二酸化炭素に代表される温室効果気体が大量に残留することとなった。「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」は、2013年に公表した第5次評価報告書の中で、1880年から2012年の間で地上気温は0.85℃増加し、この原因は温室効果気体の増加による可能性が極めて高い（確率95％以上）と評価した。

本書は、2001年に公表されたIPCC第3次報告書の執筆に携わった著者が、懐疑論者から攻撃された事の顛末を綴ったものである。過去の地上気温の変動が、アイスホッケーのスティックのような形に見えることからホッケースティック曲線と呼ばれた（表紙参照）。マンは、データを改竄してこの曲線作ったとの疑いで懐疑論者から激しい攻撃を受けた。マンは慎重かつ丁寧に粘り強く反論し、最終的に懐疑論者達を論破する。この過程で、懐疑論者の活動には石炭・石油業界から資金が流れていたことも分かった。

温暖化は‘3回発見された’と主張する「地球温暖化の<発見>とは何か」(ワート著、みすず書房、2005年）も勧めたい。さて、その3回とは?

三宅 泰雄 著
空気の発見
角川ソフィア文庫、1962年（※表紙は2011年版）

著者の三宅泰雄（1908-90）は、気象研究所と東京教育大学で地球化学・海洋化学研究者として活躍し、日本海洋学会長も務めた。

本書第一部では、空気の重さの発見から、二酸化炭素、窒素、酸素の発見へと続く歴史と、発見に至った過程や発見者の人となりが、時代背景とともに述べられる。第二部では、アルゴンの発見から始まり、オゾンのこと、色のこと、気圧のこと、などが分かりやすく解説される。

著者は、後書きで次のように述べる。「私は、科学教育が科学史とむすびついてなされることを、かねがね主張している。科学的精神をふきこむといっても、科学を創造した人々の思想や生活に、ふれずして、とうていその真髄を理解することはできないであろう。また、私は、科学教育は記憶を重んずるつめ込み主義ではなく、科学の発展してきた論理を生徒に理解せしめることに重点をおかなければならないと考えている。」本書は、まさに著者のこのような考えの実践例である。

本書は小山書店の梟文庫の第16巻として1950年に出版された。1962年に角川ソフィア文庫に収められ、以後、毎年のように版を重ねている。いつの時代でも読者を魅了している‘古典’である。

村上 龍 著
愛と幻想のファシズム（上・下）
講談社、1987年（※講談社文庫、1990年）

日本人作家は、大上段に構えて‘国や社会のありよう’を論ずることを苦手としているのではなかろうか。このジャンルの作品はそうは多くない。高橋和巳の「邪宗門」(河出書房新社、1965年）や、井上ひさしの「吉里吉里人」(新潮社、1981年）とともに、1987年に出版された村上龍による本書は、そのような作品の一つである。

1990年、あることを契機に世界恐慌が勃発する。日本も巻き込まれ、騒動やテロなどにより経済も社会システムも崩れていく。サバイバリスト鈴原をカリスマとする政治結社「狩猟社」は日本をあらゆる手段を用いて掌握しようとする。一方で、多国籍企業集団「ザ・セブン」は日本を支配しようと画策する。さて、「狩猟社」と「ザ・セブンの」の戦いは、そして日本の運命は如何に。本作品は、社会のありようを思考実験した「近未来政治小説」である。なお、カバーデザインは横尾忠則で、これも素晴らしく、この作品を盛り立てる。

ところで、もう一人の村上である春樹も、同年5編目の長編小説となる「ノルウェイの森」を講談社から出版する。私はほぼ同時に二人の村上の重要な作品に触れた。そして以後、龍の作品を好むようになったことを告白しなければならない。

湯川 秀樹 著

旅人　ある物理学者の回想

角川ソフィア文庫、1960年（※表紙は2011年版）

私はずっと大学は工学系にしようと思っていた。最終的に本学理学部の物理系を受験しようと決めたのは、高校3年の夏休みの時期である。そのきっかけの一つが、この本との出会いであった。

本書は、中間子論で日本初のノーベル物理学賞を1949年に受賞した湯川秀樹（1907-81）が50歳になったのを機会に、朝日新聞に1年間連載した記事をまとめたものである。著者は27歳となった1935年に中間子論を発表する。本書は、その時までに起こった様々な出来事と、それに対するその時々の感想や考えについての記録である。新聞担当者の手がだいぶ入っていると思うが、平易な文章で、読者は著者の人となりを身近に感ずることができる。

今回改めて読み直したのだが、次のような記載があり、そうそうと頷いてしまった。昼はなかなかアイデアが浮かばないのだが、寝床に入ると様々なアイデアが浮かび、自由に成長してくる。そして疲れて寝てしまう。朝に思い返してみるとそれらは実につまらなく、期待は悪魔のように消え去っていく。

素粒子論をやりたくて物理系に入った私だが、教養部時代の不勉強に加え、‘人間がそこにいる学問’をやりたくなり、地球物理学へと転向した。

塩野 七生 著

ローマ人の物語 I～XV［全15巻］

新潮社、1992年（I）～2006年（XV）（※新潮文庫、2002年～2011年：全43巻）

本書は作家塩野七生によるローマ通史である。

著者は1992年に出版した第1巻の冒頭「読者へ」の最後に、「それでは今から、私は書きはじめ、あなたは読みはじめる。お互いに、古代のローマ人はどういう人たちであったのか、という想いを共有しながら」と記した。

そして2006年に出版した最終の第15巻の「終わりに」の最後で、「この『ローマ人の物語』全15巻は、何よりもまず私自身が、ローマ人をわかりたいという想いで書いたのである。書き終えた今は心から、わかった、と言える」と述べ、「そして、読者もまた読み終えた後に『わかった』と思ってくれたとしたら、私にとってはこれ以上の喜びはない。なぜなら、書物とは、著者が書き、出版社が本にし、それを読者が読むことで初めて成り立つ媒体だが、この三者をつなぐ一本の赤い線が、『想いを共有する』ことにあるのだから」と結んだ。

世界史上最大の領土を誇るまでになったローマ帝国は、なぜ滅亡しなければならなかったのだろう。著者は、第11巻の副題を「終わりの始まり」とし、ローマ帝国の衰退に想いを巡らす。そして、寛容に多神教を認めていた時代が終わり、一神教であるキリスト教が国教になったからだと指摘する。

山口 隆美 YAMAGUCHI, Takami 退職

乱読、濫読、爛読

山口 隆美 YAMAGUCHI, Takami

総長特命教授（2015年度～2018年度。2019年3月末退職）、特任教授（医工学研究科）、東北大学名誉教授、工学博士、医学博士
専門分野：生体医工学

担当科目
※2018年度
基礎ゼミ：「映画のディテイルから歴史と人間を考える」／「蛍光顕微鏡組立とウズラ卵の発生の観察：トランスグレード教育」
基幹科目：「生命と自然：医学・生物学を専攻しない学生のための人体の仕組みと働き」
展開ゼミ：「Schmidt-Nielsen『動物生理学』を読む」

授業中にこっそり読んだような本が私を作った。記憶にある最初の本は、少年講談全集という総ルビの講談速記本で、寛永の三馬術とか、由井正雪の謀反、鍵屋の辻の仇討ち、といった話を、文字通り乱読した。小学校低学年の時だ。「絵で見る世界史」も隅から隅まで読み、その挿絵のいくつかは未だに記憶に止まる。論語にもある八佾の舞（8×8=64人の舞）の記事と絵を見て、長年不思議であったが、北朝鮮の喜び組の報道をみて、なるほど、権力の嬉しさというのはこれかと後年納得したものだ。誰かが中学校の教室にもってきたサドの『悪徳の栄え』も、その時には書いてあることの何分の一理解したものか。しかし、何といっても、私が乱読したのは SF 小説で、これは、未来と科学技術について人間の想像力のおよぶ限りの思考実験であって、現代と遠い未来までのほぼあらゆること（驚くべきことにインターネットを予言した SF はない）が想像されて、その光と影が吟味されていた。推理小説とスパイ小説も随分乱読した。ル・カレやフリーマントルの英国スパイ小説は、私たちの世代の成長と成熟の通奏低音だった冷戦体制のなかの人間、とりわけケンブリッジ出身の2重スパイたちの動機と行動に思いをいたさせる。文学・小説は、ジャンルを問わず、人間を人間たらしめている想像力の結晶したもので、読書は、何をおいても、小説を乱読することを推したい。

私自身は思想的には、極端な唯物論者であるが、宗教書の壮大な世界観（つまりは嘘だが）に惹かれて、法華経とか密教思想、あるいは、キリスト教でいえば神秘主義にも凝った。これらも、壮大な思考実験であって、とりわけ密教や神秘主義は、世界の秘密を、呪文や修行などの、なんらかの方法で知る、あるいは、理解できるという確信に基づいているという意味で、現代の自然科学と同根である。

いろいろ紆余曲折のあった後に、研究者・教師として大学に奉職する過程で私を一番助けてくれたのは実は作文の能力だった。理系・文系を問わず、研究者や組織の中で生きていくすべての人が、自分の仕事を進めるためには研究費（予算）を獲得するための申請書・企画書を書かなければならない。この競争を勝ち抜くには、一件あたり平均で2-3分しか申請書を読まない審査員の目を引く文章を綴る能力が必須となる。このためには日本語の古典を読むことを薦める。私の個人的経験から言えば平家物語などの軍記物と、古典漢詩文が申請書の文体には最も適する。

とにかく、効率など考えないで手当たり次第読書することを心から勧める。その大部分は何の役にも立たないが、振り返ってみれば、それが、自分を作ったのだと思える本に出会える筈だ。（2019年2月）

クヌート・シュミット＝ニールセン 著
動物生理学［原書第５版］
―環境への適応―
沼田 英治／中嶋 康裕 監訳、東京大学出版会、2007年
原書："Animal Physiology－Adaptation and Environment－5th Edition" by Knut Schmidt-Nielsen, Cambridge University Press, 1997

クヌート・シュミット=ニールセンは、ノルウェーから出て、米国デューク大学の生理学の教授を務めた、掛け値なしの大生理学者で、この本は、比較生理学的視点を縦横に駆使した動物の生理学の教科書である。その学問は、現在の主流である過度な分子生物学依存でなく、綿密な観察と深い考察を展開するもので、世界の生理学者の尊敬をあつめた。この生理学教科書は、物理的な原理に基づいて、実に広範な地球上の生命体が示す、環境への適応を、わかりやすく、かつ、厳密性を失わずに説明する。往々にして、この種の記述は、過度な一般化や、哲学の押しつけに陥りがちであるが、実に、淡々と、いろいろな生物の環境への適応を記述するうちに、動物の生命というものが浮かび上がってくる。とりわけ、医学関係の分科を専門とする学生諸君は、地球上における極めて特殊な種であるヒトについての記述に終始する生理学・解剖学を学ぶことで精一杯で、その記述が、どれほど特殊であり、一般化できないものであるかを認識できないことが多いが、その視野を拡大する上で、この教科書に勝るものはない。日本語訳で読んでもいいが、原書は、北欧人らしい実に平易な英語で、しかも、これほど達意の文章を書くことができるという見本であり、その点でも学ぶべき点が多い。

池澤 夏樹 著
静かな大地
朝日文庫、2007年

2001年から2002年にかけて、朝日新聞に連載になった小説。私が持っているのは、単行本化されたものの初版で、630頁におよぶ長編である。明治維新にあたり、淡路島から北海道に入植した一家、作者池澤夏樹の家族の物語。私は19世紀の末に起こった日本の内乱と政変を明治維新と呼ぶことに抵抗を感じる。故郷の会津若松市は、1968年の明治100年を祝わなかった全国で唯一の自治体で、その代わり、戊辰戦争100年を偲んだ。この小説を読むと、明治政府が強引に推進した「近代化」が、北海道の原住民であるアイヌの人々や、入植した全国各地からの棄民を、どれほど犠牲にしたものであったかが理解できる。それは、飢餓により全滅の危機に瀕したヴァージニア植民地を救ったポウハタン族アメリカ原住民の恩に、銃と略奪・拉致・誘拐で報いたイングランド植民者と全く軌を一にする行動様式であった。自然を愛し、平和な、全く別個の文明を築いていた人々を、土人と蔑み、結局あらゆるものを奪った明治文明は、成功した主人公の一族の牧場をも奸計で奪う。小説は、明治の元勲と称された薩摩と長州の元テロリストたちの暴虐を声高にではなく明らかにしていく。学校で教わる歴史は、勝者の一方的な物語であり、日本人らしさ、とか、愛国心とかは、すべて嘘に立脚していることを見抜く力こそ、大学において学ぶべきことであろう。

大西 巨人 著

神聖喜劇（第１巻～第５巻）

光文社文庫、2002年

参考：漫画「神聖喜劇」（全６巻）大西巨人原作、のぞぁのぷひさ作画、岩田和博監修、幻冬舎、2006-2007年

軍隊生活を描いた、戦後日本文学の一つの特異な到達点を示す小説。評が異口同音に指摘するように、とにかく長くて、理屈が多く、取り付きが悪い代物ではある。しかし、旧帝国陸軍に結晶化された官僚制の本質、苛烈な共産主義運動の弾圧、部落差別など、描かれる課題は優れて現代的であり続けている。各所に引用される文書は、日本の古典、マルクス主義の哲学・政治的文書、そして、旧帝国陸軍の操典などで、相当の予備知識が要るように見えるが、それなしでも、話の面白さで読み進めることができる。著者本人が監修した、原作に極めて忠実な漫画本では、戦後も遙かに遠くなった現代の若者が、旧軍隊の生活をヴィジュアルに追体験できる。話は、左翼運動のために帝大を中退した新聞記者である東堂二等兵の1942年1月から4月までの教育期間における営内（軍隊内）の出来事を基礎に、営外（一般社会）における経験と記憶をフラッシュバックしながら、戦時中の社会のあり方が考察される。私がこれを読んだのは1980年台であったが、当時在籍していた厚生省直轄の国立研究所の管理運営体制と比較して、戦前・戦後を貫く官僚制の連続性を痛感した（因みに、帝国陸海軍の組織は、厚生労働省の社会・援護局が現在なお引き継いでいる）。

イーヴリン・アーサー・セント・ジョン・ウォー 著

回想のブライズヘッド（上・下）

小野寺 健 訳、岩波文庫、2009年

参考：「ブライヅヘッドふたたび」イーヴリン・ウォー著、吉田健一訳、ちくま文庫、1990年（復刻ドットコム2006年）

イーヴリン・ウォーは英米圏では、現在も読まれている作家で、その代表作である。イギリスでは、2回 TV シリーズとなり、米国においても放映された。第一次大戦と第二次大戦の戦間期の、イギリスの貴族階級と上層中間階級の青年たちの、ドイツ風に言えば、教養小説である。イギリスの戦間期は、イギリスの紳士階級の最後の黄金期であり、この小説は、いくつかのエピソードを連ねて、オックスフォード大学の学生生活を描く。イギリスの階級社会は我々には想像のつかないことが多く、小説は、イギリス人なら、当然と思われる事項については詳しく説明しないが、読み進むのに難渋はしない。この小説の（それに興味のない者には何のことだか最後まで分からない）底流は、イギリス社会におけるカトリック信仰の問題で、イーヴリン・ウォーは、少数派のカトリック信者であった。なぜ、これが問題かということは、英国の歴史や社会に即さないと分からないのだが、その意味で、この小説は英国について勉強するための、いわば躓きの石である。私は、英国留学中に TV シリーズを見て以来、何度も読み返しており、その意味で、一読して何がいいたいのか分からない小説であるが、再読、再々読に耐えるものであるとは思う。

石母田 正 著
平家物語
岩波新書、1957年
参考：「中世的世界の形成」石母田正著、岩波文庫、1985年

石母田正は石巻市に育ち、第二高等学校から東京大学国史学科へ進んだ歴史学者で、『中世的世界の形成』は戦後の歴史学に最も影響力のあった著書とされており、古代から中世にいたる社会構成の変化を、荘園制の崩壊と、農民から武士階級が生まれる過程として描いている本で、これを薦めるのが読書の年輪としては本道であろう。しかし、ここでは、同じ著者による本書を薦める。平家物語は中世的世界を生み出した大変動であった源平の興亡を描く軍記物の白眉であるが、石母田は、滅び行く平家の人々の物語を歴史的な記述と人物造型を通して分析している。軍記物および漢詩文は、現代における作文技術の範としても有効であり、これを読み、学ぶ（真似ぶ）ことにより、文書を通じた他人の説得という人間社会の共通の課題への解答を得ることができる。こういう、言わば、ハウツー的・実用的な読み方は邪道であろうが、これを離れても、古今変わらぬ人の営みを見つめるという意味で、1957年の刊行の古い本であるが、本書は人生と社会の理解の指針としての意義を失っていない。源平の興亡における公家・武家の離合集散の浅ましさは、現代社会における組織内の力学と全く同根であり、千年を経てなお、平家物語が読み継がれる所以でもある。

植木 雅俊 訳
サンスクリット原典現代語訳 法華経（上・下）
岩波書店、2015年
参考：「法華経」（上・中・下）坂本幸男／岩本裕訳注、岩波文庫、上1962年、中・下1976年

18世紀の大阪に出た大天才、富永仲基は、大乗非仏説、つまり、大乗仏典はすべて、歴史的な存在である釈迦の説ではないと喝破した。とりわけ法華経すなわち妙法蓮華経は、何が言いたいのかと言えば、法華経は素晴らしいということを強調するに過ぎない。ただそのためだけに、これほどのレトリックを連ねることは、宗教というものの本質を衝き、これを読むというのは、宗教というものの壮大な空虚さを学ぶことである。延々と繰り返される比喩によって賛美される法華経信仰の核心が、真空であることを理解することは、実は、すべての宗教において、その核心—つまり、神とか仏とか、救済とかいう観念—が空虚であることを理解し、宗教から自由になることに通じる。私が、これを読んだのは参考に掲げた岩波文庫版で、サンスクリット語のテクストからの翻訳と、漢訳からの翻訳を並べたものだが、その相違、すなわち、学問の対象としてのロータス・スートラと、信仰の対象としての妙法蓮華経への眼差しの違いも興味深い。もちろん、法華経だけが仏典ではなく、般若経、阿弥陀経、そして、いろいろの意味で究極の大乗仏典である密教経典のそれぞれに特色があり、人間というものが、数千年をかけて紡いだ思考のあとをたどるのも面白い。

好之者不如樂之者

野家 啓一 NOE, Keiichi

総長特命教授（2013年度～2018年度。2019年3月末退職）、東北大学名誉教授、理学修士
専門分野：哲学、科学基礎論

担当科目

※2018年度
基礎ゼミ：「哲学・ゼロからの出発」
基幹科目：「思想と倫理の世界：現代哲学への招待」
哲学・倫理学：「科学技術への招待」
展開ゼミ：「近代日本の名著を読む」

「教養」を一言で定義することは難しい。だが、歴史と社会の中における自分の現在位置を知り、自分の考えを的確に表現する〈知力〉と、異質の他者を理解し共感する〈感受性・想像力〉が教養の二本の柱であることは間違いない。そうした力を培うには、読書にまさる手だてはない。書物の中で私たちは自分とは異なる他人の考えに触れ、また自分とは別の人生を追体験できるからである。

私のこれまでの人生（といっても60数年を生きたにすぎないが）を振り返ってみても、いくつかの分岐点で、本との出会いが決定的な役割を果たしてきた。第一の出会いは小学校一年生のときに訪れた。入学して間もなく、私は集団疫痢で長期入院を余儀なくされ、心配した親戚の小母さんが見舞いに差し入れてくれたのが、子供向けの『ロビンソン漂流記』であった。それまで漫画や少年向けの講談本（『赤穂義士』や『里見八犬伝』など）しか読んだことのなかった私に、この本は広大な世界を垣間見せてくれた。いわば私の眼前に読書の大航海時代の幕が開いたのである。

第二は物理学との出会いである。中学三年生の時に、友人のＫ君がジョージ・ガモフの『1，2，3・・・無限大』という本を見せてくれた。その表題に惹かれて無理やり借り受けると、これが実に面白い。私はたちまち相対性理論や量子力学など現代物理学の魅力に夢中になった。当時は工学部の原子核工学科が一番人気であったが、私は躊躇なく理学部の物理学科を志望した。

第三は哲学との遭遇である。私が学生の頃は大学闘争（と私たちは呼んでいた）の真っ最中であり、理系の学生でもサルトルを小脇に抱え、武谷三男『弁証法の諸問題』の読書会を開いていた時代であった。そんな中で手にしたのが廣松渉『世界の共同主観的存在構造』(実際は『思想』に掲載された同題の論文）である。この本の影響がなかったなら、おそらく私は物理学から哲学への無謀な転向など企てなかったに違いない。

そんなわけで、私が皆さんに薦めたい本は山ほどあり、6冊に限定するのは忍びないが、大学時代にぜひ読んでおいてほしいものを中心に文庫や新書からリストアップした。これらはあくまで入口であり、あとは興味関心の赴くまま、芋づる式に読書範囲を拡大していってほしい。そのためには図書館が強力な羅針盤となってくれる。読書は単に知識を得る手段ではなく、何よりも快楽である。楽しまない手はない。『論語』に「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを樂しむ者に如かず」とある通りである。(2019年2月)

大森 荘蔵 著

大森荘蔵セレクション

飯田 隆／丹治 信春／野家 啓一／野矢 茂樹 編、平凡社ライブラリー、2011年

哲学とは物事を根本に立ち返って「額に汗して」考え抜く作業である。このことを徹底して教えてくれたのは、私の大学院時代の恩師大森荘蔵であった。本書は私を含めその教えを受けた4人の哲学者が、大森の代表的論文を選んで収録した、大森哲学のアンソロジーである。

哲学の入門書を問われるたびに、私は大森荘蔵の『流れとよどみ』(産業図書）を挙げるのを常としている。本セレクションにもそこから6篇の論文が再録されているので、手始めにそれらを読んでみてほしい。哲学的に考えるとはどのようなことかが、おぼろげながら感得できるに違いない。扱われている主題は「夢」や「記憶」や「ロボット」など、誰でもなじみのある事象である。だが、大森の手にかかると、これら自明の事柄が、たちまち「哲学の謎」と化して巨大な疑問符となる。哲学とは、「自明性」をあえて問い直す勇気なのである。

それゆえ、哲学は医学や工学のように、直接に社会の役に立つ学問ではない。学生から「哲学は何の役に立つのですか?」と問われるたびに、私は「哲学とは〈役に立つ〉とはどのようなことかを考える学問です」と答えている。いわばメタレベルの視点を獲得すること、それが哲学である。

野家 啓一 著

科学哲学への招待

ちくま学芸文庫、2015年

東日本大震災と東京電力福島原発事故は、科学技術ならびに科学者に対するわれわれの信頼を大きく揺るがした。また最近では、人工知能が人間の能力を凌駕する「シンギュラリティ」の到来や、デザイナーベビーをも可能にする「ゲノム編集」が大きな話題となっている。いずれも使い方を誤れば、人間のアイデンティティを脅かす深刻な問題である。

しかし、現代社会が科学技術なしには成り立たない以上、それを過信することも、逆に不信に陥ることも共に危険と言わねばならない。要は、科学の不確実性と技術の不完全性をわきまえた上で、適切な「科学技術リテラシー」を身につけることである。本書はそのような要請に応えるために執筆した私自身の著作である。

全体は第一部「科学史」、第二部「科学哲学」、第三部「科学社会学」の三部から成る。第一部では、17世紀の「科学革命」を中心に、科学の歴史的成立過程を展望した。第二部は科学の方法論を軸にした哲学的考察である。第三部では、科学技術と社会との関係を、とくに3.11以後の状況を念頭に科学技術倫理の観点から見直した。科学者や技術者を目指す理系の皆さんにも、科学は苦手と自認する文系の皆さんにも手に取っていただければ幸いである。

レイチェル・カーソン 著
沈黙の春
青樹 築一 訳、新潮文庫、1974年

「核実験で空中にまいあがったストロンチウム90は、やがて雨やほこりにまじって降下し、土壌に入り込み、草や穀物に付着し、そのうち人体の骨に入りこんで、その人間が死ぬまでついてまわる。だが、化学薬品もそれに劣らぬ禍いをもたらすのだ」。カーソンがこのような警告を発したのは、今から半世紀以上も前、1962年のことである。

現在でこそ「環境破壊」や「環境保護」はグローバルな政策課題となっているが、カーソンが本書を刊行した当時は、核兵器の開発競争が拡大の一途をたどる東西冷戦のまっただ中であった。それゆえ、DDT のような殺虫剤や除草剤などの化学農薬が自然環境に与える壊滅的影響を実証的データに基づいて告発したカーソンの著書は、反響を呼ぶ一方で反発を買い、逆に彼女は化学薬品会社などから非難中傷を浴びることとなった。だが、彼女はそうした圧力に屈せず、自らの主張を貫き通し、やがてはアメリカ政府をも動かして農薬の使用制限へと踏み切らせた。その意味で本書は「環境倫理」の原点であり、バイブルでもある。

DDT の発見者パウル・ミュラーはノーベル賞を受賞したが、ノーベル賞はむしろカーソンのような研究者にこそ与えられるべきであろう。

柳田 国男 著
遠野物語
集英社文庫、1991年

現代の最先端の科学と言えば、それを代表するのはやはり脳科学であろう。脳科学の発展は目覚ましく、暗黒大陸と呼ばれた大脳の機能を明らかにすることによって、やがては「心」の本性の解明にまで迫ろうとする勢いである。

だが、フロイトによる「無意識」の発見を持ち出すまでもなく、人間の心が抱え込んでいる底なしの深淵は、やわな現代科学のメスが届かないほど広くかつ深い。その深淵に民俗学という方法をもって測鉛を下ろそうとしたのが柳田國男であった。彼は私たち日本人の生活意識あるいは心性（心の傾き）の構造を書かれた文書史料の中にではなく、祖先から口伝えに伝承されてきた多種多様な物語や伝説の中に探ろうとした。

その最初の成果が本書『遠野物語』にほかならない。これは岩手県遠野出身の文学者佐々木鏡石から柳田が聞き取った「聞き書き」である。だが、簡勁な擬古文によって綴られた幻想的な物語世界は柳田の筆力の賜物であり、彼が序文で「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と自負しただけの迫力を蔵している。かつて三島由紀夫が本書の第22話（通夜の幽霊話）を「この小話は、正に小説」と呼んだのも頷けるところである。

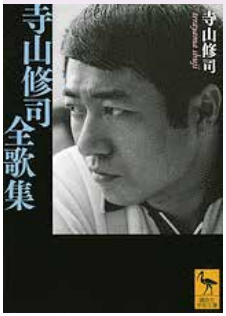
ドストエフスキー 著
罪と罰（1～3）
亀山 郁夫 訳、光文社古典新訳文庫、
1：2008年、2・3：2009年

大学時代は夏休みなどを利用して、ぜひ内外の長編小説に挑戦してみてほしい。社会人になってしまえば、時間的にも心理的にも、長編小説に取り組もうという余裕はめったに訪れるものではない。

私が最初に読んだ長編小説は、ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』である。ベートーベンをモデルにしたと言われるこの大河小説の一節が、中学校の国語教科書の中に採録されていたのが呼び水となった。教科書と同じ豊島与志雄訳を手に入れて、ようやく読了したのは高校三年の夏休みだったと記憶する。

ちょうどその頃、中央公論社から『世界の文学』という文学全集が刊行され始め、親にねだって揃えてもらったが、その第一回配本がドストエフスキーの『罪と罰』（池田健太郎訳）であった。簡単に言えば、主人公の大学生ラスコーリニコフが金貸しの老婆姉妹を殺して金を奪い、やがて娼婦ソーニャの純粋な魂に触れて回心し、自首してシベリアへ送られるまでの物語である。

殺人事件を主題にしているという意味で、『罪と罰』は一種の倒叙型の推理小説としても読むことができる。予審判事ポルフィーリーとの対決など、ワクワクドキドキ感をぜひ味わってほしい。



寺山 修司 著
寺山修司全歌集
講談社学術文庫、2011年

「職業は寺山修司」と豪語した言葉の天才が亡くなって早や30数年になる。私が学生時代を過ごした1960年代後半から70年代を通じて、寺山修司は短歌、俳句、現代詩、小説、評論、演劇、映画、作詞、競馬等々、行くところ可ならざるはなし、といった勢いの「時代のヒーロー」であった。

数ある称号の中で、私が出会ったのは、歌人としての寺山修司である。高校二年の初夏、たしか国語の時間でのこと、隣りの席のＫ君が何やら熱心に教科書の下で隠し読んでいる。先生の目を盗んで回し読みしたその本こそ、後に映画にもなった寺山修司歌集『田園に死す』（本書に収録）であった。そこには国語教科書に出てくる短歌とは似ても似つかない異貌の世界が開かれていた。

「間引かれしゆゑに一生欠席する学校地獄のおとうとの椅子」

「たった一つの嫁入道具の仏壇を義眼のうつるまで磨くなり」

「かくれんぼ鬼のままにて老いたれば誰をさがしにくる村祭」

これらの歌のもつ言葉の毒に圧倒され、私は授業が終わったのも気づかなかった。私にとっての詩歌開眼である。「花には香りを、本には毒を」。

吉野　博　YOSHINO, Hiroshi　退職

読書の思い出

吉野　博　YOSHINO, Hiroshi

総長特命教授（2014年度～2017年度。2018年3月末退職）、東北大学名誉教授、工学博士
専門分野:建築環境工学

担当科目
※2017年度
基礎ゼミ：「住いのエネルギー消費構造を理解して温暖化防止策を探る」
基幹科目：「自然と環境：住いと人と環境」
展開ゼミ：「環境とエネルギー問題」

筆者の専門は建築環境工学と呼ぶ学問領域である。目的の第一は、人が快適・健康に過ごすために建物内の環境はどうあるべきかを明らかにする、第二は、望ましい環境を少ないエネルギーで実現するための建物や設備の設計理論や方法を示す、第三は、建物や設備の適切な使い方、運用の仕方に関する方法を示すことである。これらの研究成果は、建物の設計・建設・運用等の実務に際して基礎的な資料として利用されている。その中で筆者のライフワークは、住宅における居住環境性能とエネルギー消費であり、キーワードで示せば、健康・快適、省エネルギー計画、自然エネルギー利用、気密性能と換気、シックハウス防除、低炭素社会の実現といったところである。この分野に進むきっかけは、建築学科の4年の時に住宅のエネルギー消費と環境に関する卒業研究に関わったことである。

学生時代によく言われたことは、建築は様々な学問の応用として結実するものであるから、あらゆることに興味を持つこと、様々な分野の本を読むことであった。建築には様々な用途があり、利用する人も様々である。また要求条件や制約条件も多々あるため、あらゆることが建築の設計に関係があるという理屈である。大学時代は空手道部に属し、それに熱中していたこともあり、色々な本は読んでいたが印象に残ったことはあまりなく、夏目漱石や司馬遼太郎の一連の小説を読んだことぐらいである。

大学の時よりも中学・高校の時代に熱中して本を読んだという記憶がある。亡くなった叔父が読書家であったことから、その叔父に薦められて倉田百三の『出家とその弟子』を読んだ。これがきっかけとなって、一連の作品『愛と認識との出発』、『超克』、『絶対的生活』など、難解な文章ではあったが何度も読んだ記憶がある。また、関連して、武者小路実篤の『お目出たき人』、『幸福者』、『友情』などの作品を読んだ。これらの本はその後の人生観に大きな影響を与えた。また武者小路の『第三の隠者の運命』を読んでからは、心身ともに強くならなければならないという思いが強くなり、そのことがきっかけで大学時代に空手道部に入ることになった。

さて、大学の学部教育の目的の一つは、「与えられた課題に対して自ら調査し考えて、その課題に対する考えをまとめる」、それができる能力を養うということである。従って、常日頃から様々な方面に情報網を張っておくとともに、論理的に思考できる素養を身につけていくことである。そのためには読書に勝る効果的な方法はない。今回推薦した6冊の図書は、建築や環境に関連する教養書である。土木工学や建築学方面に進学する学生以外にも是非、勧めたいものである。

（2018年2月）

エドワード・アレン 著

建物はどのように働いているか

安藤 正雄／越知 卓英／小松 幸夫／深尾 精一 共著、
鹿島出版会、1982年

本書は、建築環境工学の教科書の副読本として長年推薦してきたものであるが、建築環境の問題だけでなく構造、防火、構法なども含まれており、建築を学ぶ学生のみならず、建築に関心を持つ一般の方にも是非、薦めたい書籍である。

講義では、健康で快適な環境を少ないエネルギー消費で実現するための設計の基礎となる事項を学ぶ。建築環境工学の一般的な教科書は、多くの数式で物理現象や評価手法が記述されているため、学生にとっては興味が沸きにくい科目の一つとなっている。

本の冒頭には「ちょうど人体の成り立ちと働きを要領よくまとめた生理学の入門書のように、建物の働きと仕組みに関する広範なことがらを一巻にまとめたわかりやすい絵入りの本がないものかどうか」と著者の執筆の動機が記されている。

まさにその通り、わかりやすいイラストが随所に示されており、イラストそのものを楽しめるばかりでなく、建物の構造、設備の構成、エネルギーの流れ、物理量と感覚量の関係、物理的な現象が直感的に理解できる。特に、冷房設備の複雑な原理や、熱伝導や熱容量、輻射の物理的な意味などを示すイラストは見事である。

フロレンス・ナイチンゲール 著

看護覚え書
―看護であること　看護でないこと

湯槇 ます／薄井 坦子／小玉 香津子／田村 真／小南 吉彦 訳、現代社、2011年

ナイチンゲールは1820年にイギリスの裕福な家庭に生まれた。通常であれば幸せな一生を終える環境にあったが、自分の使命は病院の患者の世話をすることだと悟り、26歳頃から病院や衛生についての勉強を始め、30歳頃から病院で看護の仕事に就くことになった。

本書は、戦場を含めた多くの看護の現場における経験を踏まえて1860年にまとめられ看護学のバイブルとして読み継がれている。現代とは比較にならないほど非衛生的な環境であったであろうが、病気の回復のためには室内の環境をいかに清潔に維持するか、即ち「住居の健康」が重要であり、十分な換気と保温、音の静かさ、適切な採光などの必要性を説いている。これらの考え方は現代の室内環境のあり方の原点とも言うべき内容である。

また、環境問題に留まらず、患者の気持ちを考えた対応の仕方、接し方についても触れられており、日常的に人間関係を良好に保つための基本的な作法に通じるものがある。

41歳からは歩行困難となり、亡くなる90歳までは殆ど寝室のソファーで作業を行い、陸軍の病院施設のあり方などに関して多くの指導・助言を行い、150篇の報告書・書籍をまとめている。

野村 俊一／是澤 紀子 編

建築遺産　保存と再生の思考 ―災害・空間・歴史

東北大学出版会、2012年

東日本大震災の際に多くの歴史的な建造物が地震と津波によって大きな被害を受けた。その後、筆者らは、建築の保存と再生について考えるための連続シンポジウム「災害・空間・歴史シンポジウム」を開催した。本書は、そのときの講演と質疑応答を原稿として、それらを踏まえた論考を「視点」として加えてまとめたものである。6回のシンポジウムごとに章が設けられ、それぞれの章に二つの講演と質疑応答、それらを踏まえた「視点」がセットになり、全体が巧みに構成されている。

歴史的建造物の被害を踏まえて、保存と再生の問題が幅広く議論され、今後の都市・建築像を志向するという趣旨でまとめられている。震災直後に体験した出来事から、被災の状況、その後の経過などが記載されているばかりでなく、歴史的建造物の意義、建築遺産のあり方、建築空間論など内容が幅広く、また極めて奥の深い議論も行われており、読む者の心を打つ部分が多く見られた。

具体的な例が多く取り入れられており、文化遺産の被害の貴重な記録にもなっているという点からも意義があり、建築遺産の保存と再生を、災害・空間・歴史の観点から論考した質の高い学術書であり、一読を薦める。

バックミンスター・フラー 著

宇宙船地球号　操縦マニュアル

芹沢 高志 訳、ちくま学芸文庫、2000年

筆者はフラー・ドームの開発者として知られるが、現代のレオナルド・ダビンチと言われるほど幅広い分野で活躍し、思想家、デザイナー、構造家、建築家、発明家としても紹介されている。

出版されたのは1969年で著者が74歳のときであり、アポロ11号が月面着陸し、日本では東大安田講堂が「陥落」した年でもある。

地球を一つの宇宙船という概念で捉え、人類が直面している様々な問題を明らかにした上で解決のための方向性を論じたものである。持続可能性の概念を既に明確に示しており、化石燃料は、自動車で言えばバッテリを起動するときに利用すべきであり、走行のためには再生可能エネルギーを使うべきであることを提唱している。また、富の概念について独特の考え方を示し、いわゆる財産ではなく「ある時間と空間の開放レベルを維持するために、私たちがある数の人間のために具体的に準備できた未来の日数のこと」と定義している。大学の教育のあり方についても言及しており、専門分化が包括的思考を妨げているとして警鐘を発している。

今、読んでも実に新鮮に感じられる示唆に富んだ書である。

ドネラ・H・メドウズ／デニス・L・メドウズ／
ヨルゲン・ランダース 著

成長の限界　人類の選択

枝廣 淳子 訳、ダイヤモンド社、2005年

本書は、1972年に出版された『成長の限界』、1991年の『限界を超えて　生きるための選択』に続く三冊目の著作である。最初の著作では、全世界を対象とした計算に基づいて、工業化、人口増加がそのまま続けば、栄養不足、天然資源の枯渇、環境の悪化などで100年以内に成長の限界点に到達することを示し、地球環境問題に大きな議論を巻き起こした。二冊目では、前著の結論を現実の世界に照らして検証したうえで、より洗練されたコンピューター・モデル「ワールド3」を駆使して将来を予測し、人類が直面する限界を乗り越えることができるという展望を示している。

三冊目の本書では、目次の構成は二冊目と同様であるが、生活の豊かさの指標、エコロジカルフットプリントの計算結果を加え、著者らによれば、「より理解しやすい形で、われわれが1972年にだした主張を再度強調する」ことを目指したものである。

結論の一つは、持続可能な政策の実施が遅れれば、「最終的に持続可能な形で享受できる豊かさの水準は下がっていく」ということである。

この課題に関して30年の間、研究を継続していることに対して頭が下がる思いである。

クリストファー・ロイド 著

137億年の物語
―宇宙が始まってから今日までの全歴史

野中 香方子 訳、文藝春秋、2012年

題名からして、どのようなことが述べられているのかと興味がそそられる本である。先輩の教授から、大変に面白い本だと薦められて読んだ。確かに様々な観点から楽しめる本である。その理由は、1）題名どおり137億年と気の遠くなる歴史が一冊に収められている、2）多くの魅力的なイラストや写真が掲載され、絵本のような体裁をとっている、3）137億年を24時間に置き換えて歴史の時間の長さが実感できるように編集されている、4）42の章に分けられ、それぞれのページが色分けされ、西暦と24時間の時刻が各ページに示されている、などなどである。

人（ホモサピエンス）の出現は、これまでの長い地球の歴史のごくごく最近（24時間の中の3秒前）であることに驚かされる。また、文明が形成された以降は、いわば殺戮の歴史であったことも認識できる。オリエント文明、ギリシャ都市国家、ローマ帝国などが栄える過程において、また、ヨーロッパ人が新大陸を征服し、白人が植民地を獲得する際に、更に近年では世界大戦において膨大な数の人々が殺戮されている。

地球の歴史の中で「現在」を見ることは、自分自身を考える上でも重要である。

工藤 昭彦 KUDO, Akihiko 退職

乱読の履歴 ― そしてこれからの推薦本 ―

工藤 昭彦 KUDO, Akihiko

総長特命教授（2010年度～2016年度。2017年3月末退職）、東北大学名誉教授、農学博士
専門分野:農業経済学

担当科目
※2016年度
基礎ゼミ：「『農』的世界の可能性－ポスト工業化社会の展望」／「現代世界の『食』－飽食と飢餓の構造」
基幹科目：「資本主義と農業」／「環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ」
総合科目：「時代の文脈から見た『食』と『農』」

読書は嫌いな方ではなかった。かと云って、年輪を語るほどの記憶はない。系統立てて読むというよりは、乱読であった。中学時代は何と言ってもヘルマンヘッセ。確か夏衣裳の少女のことを謳った詩の一節を、奥座敷の縁側で諳んじたものだ。けたたましいセミの鳴き声を聞くと、今でもかげろうのような光景が時折甦る。青春であった。

往復4時間以上の高校通いが始まると、冬など真っ暗なうちに家を出た。ある日、担任の先生から「図書館の貸出は君が一番多いね」と云われたことがある。相変わらず乱読が続いていた。後で分かったが、先生は密かに小説を書いていたようだ。

この頃は対人恐怖症に悩んでいたこともあり、読書の記憶も楽しい思い出もあまりない。強いて言えば、太宰の『斜陽』ぐらいか。元華族の落ちぶれていく様が、明治生まれの気丈夫な祖母から聞かされた我が家の歴史と重なって、妙に生々しかった。ただ、太宰は最後まで好きになれなかった。

入学の儀式が終わり、米軍が置き去りにした蒲鉾校舎が残る川内で始まった教育部暮しは、気怠かった。4年間続ける羽目になった乗馬部も、ある先輩の強引な客引きに逆らう勇気が無かっただけで、自ら入部を決断した訳ではない。不思議なことに自分から止めようとは思わなかった。

馬が取り結ぶ人間集団の生態は、書物の世界とは違うリアリティがあった。同じ釜の飯を喰ううちに、いつの間にか対人恐怖症からも解放されていた。『風とともに去りぬ』など超娯楽本は別として、それまでの乱読は、しばし眠りについた。

目覚まし時計のベルを激しくかき鳴らしたのは、全国に吹き乱れる学園紛争の嵐であった。皆が脅迫観念に取り憑かれたように活字を貪り、激論を戦わした。マルクスの資本論、ヘーゲルの大論理学、精神現象学などが突如として必読書になったのだからたまらない。読まないと会話についていけない気がした。考えてみれば、意味不明の乱読であった。

ただ、もう一度じっくり読んでみたいのは、マルタン・デュ・ガールの『チボー家の人々』。白水社から山内義雄訳の5巻本が出ていて、これだけはまだ手元に残っている。第一次世界大戦前後の戦争と革命の嵐が吹き荒れるヨーロッパを舞台に、フランス生まれの主人公ジャックと彼を取り巻く人々の生き様を描いた壮大な歴史ドラマだ。

次ページからは、私の講義や基礎ゼミに関連して、これを読んでもらうと嬉しいなと思う本を6冊ほど紹介した。中には絶版本もあるが、図書館には数冊あるし、ネットで古本もまだ手に入る。参考にして欲しい。

（2017年2月）

和辻 哲郎 著

風土　―人間学的考察―

1935年、岩波文庫、1979年

本書が刊行されたのは、戦前の1935年。80年以上になるのに、新たな読者を獲得しながら読み継がれている。環境の世紀を迎え、改めて人間と自然の折り合いのつけ方が問われているからだろう。1991年に若干体裁を整えて再発行された本書は、2009年に5刷りが出るほど静かなブームを呼んでいる。

たやすく読める本ではない。ハイデッカーの『有と時間』を批判的に継承し、人間存在の構造を時間と空間が織りなす風土としてとらえる哲学の書でもあるからだ。

特殊な風土は人間存在の特殊な構造でもある。こうした視点から著者は、モンスーンアジアは「受容的・忍従的」、砂漠地域は「実際的・意志的」、牧場（まきば）的ヨーロッパは「理性的・合理的」といった人間類型の特質を鮮やかに浮き彫りにしてみせた。しばしば誤解されるように、風土が人間類型を規定しているという意味ではない。人間類型もまた風土なのだ。

従って、風土にしろ人間類型にしろ、共に変わり得ると考えていいだろう。グローバル化の嵐が吹き荒れる中、風土を支えてきた屋台骨も激しくぐらついているからだ。どんな風土創りを目指すのか。まずは本書を手にして格闘してみて欲しい。

工藤 昭彦 著

現代農業考
－「農」受容と社会の輪郭－

創森社、2016年

社会と折り合う自動制御装置を欠落したグローバル市場経済の暴走は、格差社会の拡大、地方の疲弊など人々の暮らしの拠点を破壊する。このままでは共倒れになるという危機感を抱いた人々や地域から、生身の人間が耐え難いほど激烈を極める副作用を中和する「もう一つ別の世界」をつくるうねりが起こり始めた。スローフード運動に代表される地産地消など、その先陣を切る試みは世界各国・各地域の農業・農村で芽生え、志を共有する多くの人々を巻き込みながら世界に拡がっている。資本主義の表舞台から疎外され続けてきた農業・農村には、「持続性」や「多様性」を内包した暮らしの原点や原風景を思い起こす手掛かりが、世代を超えて受け継がれてきたからに違いない。

本書では、戦後70年間の食料、農業、農村の変貌を多くの図表を用いて説明した。農業構造改革、食料自給率の向上を掲げた農業政策が破綻した理由についても分析した。アフリカの食料自給に貢献する内発的取り組みを促す農業支援の在り方など、今日的課題にも言及している。最後に、持続性を確保する農業・農村改革の方向やそれを受容する社会の輪郭について、問題提起を込めて素描した。

大変おこがましいが自著自薦である。

ジョセフ・E・スティグリッツ 著

世界を不幸にしたグローバリズムの正体

鈴木 主税 訳、徳間書店、2002年

反グローバリズムの本だと思われがちだが、そうではない。原題は「Globalization and Its Discontents」。グローバリゼーションそのものというよりは、それを推進してきたIMF、世界銀行、WTOなど国際機関側に問題があるというのが著者の立場だ。規制緩和、自由貿易こそ全ての人々の利益になるという信仰にも似た硬直的な思考パターンが、アジア通貨危機への対応のまずさなど、多くの災いを招いてきたからだという。

ビル・クリントン大統領の経済諮問委員会委員長、世界銀行のチーフエコノミストなどを歴任してきただけに、分析はリアルで分かり易い。著者が目指すのは「人間の顔をしたグローバリゼーション」へのチャレンジ。途上国の人びと、破壊が進む自然環境や農業など、疎外されがちな領域に対する眼差は優しい。

もともと著者は「情報の非対象性理論」で2001年にノーベル経済学賞を受賞した数理経済学者。そういう著者をして、数式を一切使わない本書を書かせしめたのは、独立したばかりのケニアでの大学教員経験や世界銀行時代のアジア通貨危機だろう。海図なき航海の時代、本書には羅針盤となるような指摘が随所に鏤(ちりば)められている。

ナオミ・クライン 著

ショック・ドクトリン（上・下）
－惨事便乗型資本主義の正体を暴く－

幾島 幸子／村上 由見子 訳、岩波書店、2011年

3．11の大災害に見舞われた東北そして日本にとって、本書に込められた警告は他人事ではない。社会を危機に陥れる壊滅的な出来事を利用して巨万の富を得る「惨事便乗型資本主義」の生々しい実態が、臨場感溢れる筆致で綴られているからだ。

著者クラインは、上下2巻、700ページを超える力作で、精力的取材活動や膨大な文献考証によりながら、1970年代のチリの軍事クーデターから9．11のアメリカ社会やイラク戦争など、広範な現代史の出来事を分析の俎上に乗せている。そこで暴かれるのは、自由と民主主義という美名のもとに推進された急進的自由市場改革・規制緩和が、大企業や多国籍企業、マネーゲームに踊る投資家の利害と密接に結び付いたものであり、貧富の格差拡大やテロ攻撃を含む社会的緊張を増大させたという「不都合な真実」だ。

時に凄惨な暴力をも辞さない一連の社会実験の原点は、電気ショックや感覚遮断など過剰な「身体ショック」で人の脳を「白紙状態」に戻す「人体実験」にあるというから、おぞましい。本書の警告は、「巨大地震」、「大津波」、「原発事故」という未曽有のトリプルショックで「白紙状態」を強いられている被災地にとっても、決して例外ではないはずだ。危機の時代を見抜く好著であり、一読を勧めたい。

平野 克己 著

経済大陸アフリカ
―資源、食糧問題から開発政策まで―

中公新書、2013年

『経済大陸アフリカ』という書籍のタイトルに違和感を覚える人も多いのではないか。アフリカといえば貧困と飢餓に喘ぐ辺境の地というイメージが強いからだ。本書が注視する急速な経済成長は、こうしたアフリカの固定観念を一掃する。成長の牽引役は中国。その証拠に石油など豊富な天然資源を求めてやみくもにアフリカに攻勢をかけ、各国でのプレゼンスを増している。いまやアフリカの輸出入ともに、圧倒的にトップの座を占めているのは中国だ。

信じ難いことにアフリカの賃金は中国より高い。このため進出した中国企業にとって安価で使い勝手がいいのは本国から連れてくる労働力。経済が成長しても現地の雇用が増えないのはそのためだ。このままだと資源も雇用も中国に奪われてしまいかねない。

著者によれば、アフリカの賃金が高いのは輸入依存度を高める食糧価格の上昇で都市の生活コストが上がったためだ。背景にあるのは国内農業の低迷。だからこそジニ係数が著しく高いアフリカが格差を圧縮し、世界の食料安全保障を脅かす震源地とならないためにも、農業革新に的を絞った内外の投資が必要だと力説する。

割愛した開発援助や企業行動分析を含めて、全編が豊富なデータに裏打ちされているだけに説得力がある。

加藤 尚武 著

新・環境倫理学のすすめ

丸善ライブラリー373、2005年

人間の行動規範を論じる学問という意味で、環境倫理学も古来からの倫理学の範疇に入る。それが独自の学問領域として広く市民権を得るようになったのは、環境問題が深刻化したからだろう。1972年の「国連人間環境会議」(ストックホルム会議) 前後から、欧米で環境倫理学という言葉が使われるようになった。92年の「環境と開発に関する国連環境会議」(リオ・サミット) 以降、環境倫理学は扱う対象や内容を拡大しながら世界に広まった。

いまや「エコしよう」、「エコしている」といった軽いノリで語られるほど、環境倫理学は身近なものとなった。功績の一端を担ったのは、加藤氏が20年前に出版した『環境倫理学のすすめ』だろう。その続編にあたるのが本書だ。

前書は京都議定書のような国際協力体制が生まれることを期待しながら書いたという。今度の本書には、同議定書が誕生と同時に傷だらけになる中、学生諸君のような若い世代への著者の願いや期待が込められている。終章で、「戦争による環境破壊」を警告しているのも、本書ならではだ。

「世界の有限性」、「世代間倫理」、「生物種の生存権」など環境倫理学の三原則は、20年前から少しもぶれていない。

森田 康夫 MORITA, Yasuo 退職

学問とは何か？ ― 大学は何を目指すべきか ―

森田 康夫 MORITA, Yasuo

総長特命教授（2009年度～2015年度。2016年3月末退職）、東北大学名誉教授、理学博士
専門分野：数学（整数論）、数学教育（少子化が教育に与える影響の研究）、入学試験

担当科目
※2015年度
基礎ゼミ：「学校教育の在り方と入学試験の功罪を考える」
基幹科目：「科学と情報：数学と人間－数学を俯瞰する」
総合科目：「教育と科学技術」

私は第二次世界大戦が終わった1945年に生まれ、高度成長期の1970年に数学の研究者として出発し、整数論の色々な分野で研究をしてきた。しかし東北大学の教授として入学試験と交通問題を担当することになり、数学教育や入学試験のことも研究する様になった。このため、それまでは新しい数学の定理を探すことに私は熱中していたが、現実世界の中で入学試験や教育をどのようにして改善するかを考える様になり、真理を知りたいという「思い」重視から、どの様な結果となったかという「結果」重視に価値観を変えた。

私は教育の任務は若者の能力を開花させ、有能な人材として社会に送り出すことにあると考えている。教育は人材育成を行うサービス産業であり、お客様である生徒や学生の幸せと、社会発展の基盤となる有能な人材を育成するため、できる限りの努力をすべきものと私は考えている。しかし、日本社会では少子化の中で大学の学生定員が増加しており、今まで若者を学習させる主たる動機であった入学試験に受かることが容易になり、誰でもどこかの大学に入学できるという「大学全入」が実現している。そのため、ゆとり教育の影響もあり、今までより少ない知識と能力を持った若者が大学に入学している。私は数学という結果が見やすい教科を担当していたため、日本がこの様な状態になることを15年余り前に気づき、友人達と共に入学試験や数学教育の改善のために努力を続けてきた。

私達や私達の直ぐ下の団塊の世代は戦後の貧しさを憶えており、生きるために必死になり働いてきた。その結果、1980年頃には日本は欧米に追いつき、「Japan as No.1」とまで言われる様になった。しかし日本人は慢心し、バブルを起こし、さらにその処理にも失敗し、現在に至っている。

私は、今日本は分かれ道に面していると思っている。そのため、「日本人はこれからの世界でどのようなことを目指すべきか?」を考えることが必要であると考えており、大学人は、「学問とは何か?」、「日本の大学は何を目指すべきか?」について再考すべきだと思っている。

私は入学試験、数学史、および科学技術をテーマとした授業を行っており、授業を行いながら以上の様なことを考えている。以下でお薦めする本は、この様な視点から選ばれたものである。
(2016年2月)

スティーヴン・オッペンハイマー 著
人類の足跡10万年全史
仲村 明子 訳、草思社、2007年

人類は約700万年前にアフリカで類人猿から誕生し、その後ユーラシア大陸に広がった。私達ホモ・サピエンスがどのようにして古いタイプの人類（旧人）から進化したかについては、アフリカで進化して全世界に広がったという説と、世界各地で進化したという二つの説があり、長年議論になってきた。しかし、最近ミトコンドリアの持つ DNA などを使って過去を解析する方法が発達し、ホモ・サピエンスはアフリカで進化したとの説が有力となっている。

この本では、現代人が持つミトコンドリアや Y 染色体の DNA に基づき人類史を詳しく分析し、ホモ・サピエンスは旧人から十数万年前にアフリカで進化し、氷河期による海水の低下に助けられ、約10万年前に（スエズ地峡ではなく）紅海の南端からアラビア半島へ渡り、さらに海沿いにアジア大陸に渡り、約8万年位前に東南アジアを介して東アジアとオーストラリアへ、約5万年位前に中東を介してヨーロッパに、さらにベーリング海峡を経て約2万年前にアメリカ大陸に広がったと主張している。

最近の生命科学の発展や人類の起源などに興味を持つ人に勧めたい本である。

E・T・ベル 著
数学をつくった人びとⅠ、Ⅱ、Ⅲ
田中　勇／銀林　浩 訳、ハヤカワ文庫、2003年

数学は古代文明と共に誕生し、古代ギリシャにおいて数学の学問としての体系ができた。その後、ギリシャの数学はインド・アラビアを介してルネッサンス期のヨーロッパに伝わり、デカルトやニュートンの研究により、「科学を語る言葉」としての数学の地位が確定した。この本では、この様な歴史を数学者の逸話を紹介しながら記述している。

この本は1937年に初版が出た数学史の古典であり、日本語訳は1997年に出版され、2003年に文庫版が出版された。この本が書かれた当時には20世紀の数学の評価が確定していなかったため、20世紀の数学については余り書かれていない。

この本のⅠでは古代から18世紀までの数学を紹介し、Ⅱでは19世紀前半の数学を紹介し、Ⅲでは19世紀前半から20世紀初めまでの数学を紹介している。

この本について、森毅氏は「微分積分学が何をしたくて考え出されたかわかったら、微積分発明の裏にニュートンとライプニッツのどろどろした先取権争いがあったと言ったら、俄然興味がわいてきませんか?」と言っている。

科学や伝記に興味を持つ人に勧めたい本である。

マーカス・デュ・ソートイ 著

素数の音楽

冨永　星 訳、新潮文庫、2013年

オイラー(1707年 -1783年) は

$\zeta(s) = 1+2^{-s}+3^{-s}+4^{-s}+5^{-s}+\cdots+n^{-s}+\cdots$

で定義される関数（ζ関数と呼ぶ）を考え、「自然数は素数の積として表せる」という定理が、

$\zeta(s) = \Pi p\ (1-p^{-s})^{-1}$（p は素数全体を動く）

という等式で表現できることを発見した。その約1世紀後にリーマンはζ（s）を複素変数の関数として研究したが、その時発見された「ζ（s）=0となる複素数 s は、負の整数でなければ、実部が1/2である」というリーマンの予想が本書のテーマである。

この本は、オックスフォード大学の数学の教授で、科学関係の記事を多数書いているソートイ氏が、リーマン予想を中心とする素数研究の現状について書いたものである。数式をほとんど使わないで書きながら、整数論が専門の私の目から見ても、非常に正確に数学的内容を伝えている。

この本は、オイラー、リーマン、ゲーデルなどの数学者の人間的な魅力を、素数というテーマに沿いながら紹介している。これから数学を専門として学習しようとする人、趣味として数学に興味を持っている人、数学とはどの様な学問であるかを知りたい人などにお勧めしたい本である。

柳田 邦男 著

ガン回廊の朝（あした）(上・下)

講談社文庫、1981年

柳田邦男氏はノン・フィクション作家であり、医療や航空などを専門分野としている。本書は、昭和37年に設置された国立がんセンターの開設当初のガン克服を目指した戦いを描いた名著である。

ガン医療は急速に進展しており、最近は完治する人が増えている。しかし、当時は5年生存率も低く、初代のがんセンター総長がガンにかかったときには、本人にガンであることを告知しなかった。このように、この本で書かれていることと現在のガン治療とはかなり異なっている。しかし新しい知見を得て科学を進歩させる努力はいつの時代でも同じであり、この本には高度成長期に日本人がガン撲滅という夢に向かって戦いを始めた時代の熱気が描かれている。

この本は読み物としても面白いが、柳田氏は徹底した取材に基づき客観的に書いており、この本を読むことにより、研究成果を出すとはどういうことか、現実を改善するとはどういうことかを知ることができる。私達が「少子高齢化と財政危機に直面した日本を、これからどう立て直して行くか」を考える際の参考としても、この本は役立つものと思われる。

石巻赤十字病院 著、由井 りょう子 文

石巻赤十字病院の100日間

―東日本大震災　医師・看護師・病院職員たちの苦闘の記録―

小学館文庫、2016年（2011年）

石巻市では東北地方太平洋沖地震による大津波により約4000人が命を落とし、多くの人が家屋をなくした。石巻赤十字病院は、石巻の病院のなかで唯一津波の被害を逃れ、震災直後の医療の中心となった。この本はそのときの同病院の活動を記録したものである。

石巻赤十字病院では被災者の医療の必要性を定めるトリアージを行い、限られた医療資源を効率的に配分し、地域内のすべての避難所の状況を巡回調査し衛生環境の確保につとめ、外部の機関と連携することにより必要な物資を確保し、多くの被災者の命を救った。

本書を読むことにより、災害医療とは何かを知ることができる。また、本書は単なる読み物としても面白く、付属の看護専門学校が津波に襲われ、避難した学生が被災者の医療につくす様子や、逃げ遅れて津波に流された人が病院に運ばれ低体温症や肺炎の治療を受ける様子などが、緊迫感を持って伝わってくる。

日本人は東日本大震災に際し冷静さを失わず、協力して犠牲者の数を抑え世界の賞賛を受けたが、本書によりそのことが確認できる。

※小学館文庫より2016年『石巻赤十字病院の100日間』【増補版】が発行された。

佐野 眞一 著

津波と原発

講談社文庫、2014年（2011年）

佐野眞一氏はノンフィクション作家として定評のある人だが、東日本大震災直後の3月18日から津波で被災した地域の取材を始めた。

佐野氏が訪れた宮城県南三陸町では、志津川病院の建物の4階部分までが津波に襲われ、屋上まで逃げられなかった患者は津波にのみ込まれた。陸前高田市では3000戸以上が全壊し、2000人近くが死亡または行方不明となった。宮古市田老町では、高さ10メートルの防潮堤を作って津波に備えていたが、津波は防潮堤を乗り越え住民を襲った。佐野氏はこれらの町の被災状況を生々しく描写している。

また、佐野氏は4月後半に原発事故で立ち入り禁止となっている楢葉町、富岡町、浪江町などを訪れ、死の町となった現地の状態を描写し、なぜ東北電力の事業範囲である福島の双葉郡に東京電力福島第一原子力発電所が作られたのかを説明している。本書を読むことにより、福島第一原発が作られ深刻な事故を引き起こした社会的背景を知ることができる。

本書は、「津波と原発」について非常に良く書かれた本である。

福西　浩 FUKUNISHI, Hiroshi 退職

自分の夢を社会の夢に
― 日本と世界の未来について考えよう ―

福西　浩 FUKUNISHI, Hiroshi

総長特命教授（2012年度～2013年度。2014年3月末退職）、東北大学名誉教授（大学院理学研究科）、理学博士
専門分野：超高層物理学、宇宙空間物理学

担当科目
※2013年度
基礎ゼミ：「未知への挑戦－南極観測から学ぶ」／「宇宙天気予報に挑戦しよう」
展開ゼミ：「惑星探査技術を学ぶ」
基幹科目：「雷放電から探る地球環境変動」
総合科目：「急成長する中国の科学技術と経済」／「オーロラから探る宇宙環境」

私が中学1年生の1957年に世界初の人工衛星スプートニク1号の打ち上げがあり、南極に昭和基地が開設されるという出来事があった。これに刺激されて南極で宇宙空間の現象であるオーロラを研究することが自分の夢になった。東京大学に入学し、第1次南極観測隊長を務めた永田武教授の研究室で研究を始め、夢の実現に近づいた。そして大学院博士課程の時に南極観測隊に参加し、昭和基地でオーロラの越冬観測を行った。この観測結果を基にした博士論文が世界的に認められ、米国のベル研究所に2年間留学した。その後国立極地研究所に入り、南極観測事業の推進役として3度南極観測隊に参加し、越冬隊長や夏隊長も務めた。1986年に東北大学理学研究科に移り、南極・北極でのオーロラ研究に加えて、人工衛星を用いた宇宙空間と惑星の研究を新たに始めた。研究室では多数の大学院生がさまざまな研究に挑戦し、国際的にインパクトのある素晴らしい研究成果を上げて巣立って行った。

こうした経験から、大学は学生たちの夢を実現する場でなければならないと確信するようになった。東北大学が目指す「研究第一主義」による教育も、学生と教員が一体となった世界レベルの研究チームが創り出されることが前提だ。大学院の学生たちはこうした研究チームに参加することによって新しい研究領域に挑戦する意欲が掻き立てられる。しかし学部の学生たちは研究チームの一員となる前の段階なので、別のやり方で知的好奇心を高める必要がある。

高校までの学びは受験勉強中心なので、いかに効率的に学習するかに焦点を当て、文系・理系別の受験科目に絞った学習が当たり前になっている。しかし現在のグローバル化した社会で活躍するには特定の分野の知識だけでは全く役に立たず、分野横断的なコラボレーション能力やコミュニケーション能力が必須となる。それを身につけるにはまず教養教育で知的好奇心を高め、いろいろな分野に興味をもち、視野を広げていく必要がある。インターネットは広範囲な知識を瞬時に得るという点では優れているが、視野を広げるという点では読書の方がはるかに優れている。一冊の本をじっくり読むことによって、著者の視点や考え方が分かり、「自分だったらどう考えるか」と思索を巡らすことができる。大学の学びの最初の段階で最も重要なことは他人の考えの受け売りではなく、自分流の考え方を確立していくことだ。ここで紹介する6冊の本をとおして自分の夢を社会の夢に高める道について考えてみよう。

（2014年2月）

トクヴィル 著

アメリカのデモクラシー（第1巻上・下、第2巻上・下）

松本 礼二 訳、岩波文庫、第1巻2005年、第2巻2008年

日本は戦後アメリカの指導によってアメリカ流「デモクラシー」の国に変貌し、歴代首相は世界とアジアの安定のために日米関係が最も重要だと言い続けてきた。しかしアメリカ流「デモクラシー」の本質をきちんと言える日本人はあまりいない。1831年、フランスからやって来た25歳のアレクシ・ド・トクヴィルが271日間でアメリカ各地を巡っただけで、その旅から得られた情報を基にデモクラシーの本質を鋭く浮かび上がらせる歴史的名著を書き上げた。

地域の自治を基本にした民主制、州と連邦の関係、大統領制、選挙の仕組み、宗教と政治の関係、なぜ市民の集団的な力の方が国家の権威よりも社会の福利をもたらす力が強いのかなど、民主主義の良いところと悪いところを詳細に分析した。個人同様、国民もその生涯の主要な特徴は若い時分から現れると考え、当時は数百万人しか住んでいなかった北アメリカに、将来はヨーロッパ全土に匹敵する1億5000万人もの互いに平等な人間が住み、世界第一の海洋大国になるだろうと予言し、見事に的中させた。著者の鋭い分析法は私たちが今日、デモクラシーの本質を理解し、日本と世界の未来を考える上できわめて有用である。

クロード・レヴィ＝ストロース 著

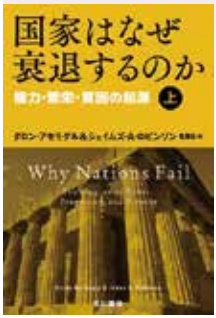
野生の思考

大橋 保夫 訳、みすず書房、2006年

1960年代、日本では多くの学生がマルクス主義や実存主義に魅せられ、学生運動が盛んであった。しかし1970年代に入り社会主義国の経済は行き詰まり、社会主義国家を理想とする学生運動は急速に衰退していった。マルクス主義や実存主義に代わって登場したのが構造主義で、その基礎を創ったのがレヴィ＝ストロースである。

本書は、歴史には「鉄の必然性」をもって貫徹する発展法則があるとし、「未開人」と「文明人」を区別する西洋中心主義のパラダイムを一変させた歴史的書物である。未開社会の「野生の思考」と「近代科学の思考」が同じように合理的な科学的思考であるとし、野生の思考こそが人類に普遍的な思考であることを「トーテム的分類」や「ブリコラージュ(器用仕事)」などの諸事例に共通する構造を抽出することによって示した。

ここで用いられる「構造」という言葉は「要素間の関係」を示し、この関係は「変換」を通して不変であるものと定義される。構造主義での変換の概念は数学の射影変換や位相変換に対応しており、自然や社会の複雑な事象から変換を通して不変な構造を取り出す思考方法は、日本と世界の未来を考える上できわめて有効な手段となろう。



ダロン・アセモグル / ジェイムズ・A・ロビンソン 著

国家はなぜ衰退するのか
―権力・繁栄・貧困の起源―（上・下）

鬼澤 忍 訳、ハヤカワ文庫、2016年

2011年のチュニジアでのジャスミン革命に端を発した大規模な反政府デモと抗議活動は「アラブの春」と呼ばれ、リビアやエジプトなどの周辺国に急速に拡大していった。貧困と格差、政府の腐敗と抑圧に対する民衆の強い怒りがこうした活動の背景となっている。では世界にはなぜ豊かな国と貧しい国が存在するのだろうか。これまでの理論ではこの不平等を地理的条件や文化的条件などで説明しようとしたが、韓国と北朝鮮の例で明らかなように、うまく説明できていなかった。

著者たちは15年に及ぶ独創的な共同研究の成果をもとに、社会科学におけるこの最大の難問に挑み、きわめてシンプルなメカニズムを導き出した。すなわち、包括的（inclusive）な経済制度（開放的で公平な市場経済）に支えられた包括的な政治制度（自由民主政）こそ持続可能な繁栄（好循環）の鍵であり、逆に、収奪的（extractive）な政治制度（権威的な独裁等）と収奪的な経済制度（奴隷制、農奴制、中央指令型計画経済等）が悪循環を生み出すことを世界各国の膨大な歴史的事例から明らかにした。このメカニズムは世界中で進行中の紛争と国家間の対立の原因を究明し、日本の将来を考える上で大きなヒントを与えてくれる。

ジュリアン・ジェインズ 著

神々の沈黙
―意識の誕生と文明の興亡

柴田 裕之 訳、紀伊國屋書店、2005年

古代から現代にいたるまで人々は意識の問題と格闘してきたが、いまだに解決されていない難問である。著者は世界各地の文明の起源と変遷を、歴史、宗教、人類学、心理学、哲学、文学など多面的な視点で探求し、意識はBC2000年頃に誕生したという大胆な仮説を提示する。ホメロスの『イーリアス』の分析から、命令を下す「神々」(右脳）とそれに従う「人間」(左脳）に二分された心を「二分心」と名づけ、古代の神聖政治では死せる王を神として王がその声を聞いて政治を行っていたことが示される。

しかしBC2000年頃になると二分心が衰退し、王が神々の声を直接聞くことができなくなり（神々の沈黙)、宗教的儀式・祈祷・占いによって王の権威を保つようになる。さらにBC1000年頃になると一神教の神が登場し、神は命ずる神から人間の罪を赦す神へと変化し、神の命を受けた王が道徳による政治を行うようになる。意識は脳というハードウエアの進化から生まれたのではなく、言語による学習によって脳が新しいソフトウエアを獲得した結果であるという著者の独創的なアイデアは、文明の興亡を理解する上で、また宗教と科学の関係を考える上できわめて有用である。

内田　樹 著
日本辺境論
新潮新書、2009年

明治維新、戦後復興と二度の奇跡をやり遂げた日本人が3.11東日本大震災後の日本新生をやり遂げるには、まず日本や世界が抱える諸問題について一人ひとりが自分の頭で考えていくことが必要だ。その際に参考になるのが本書である。著者の専門はフランス現代思想だが、武道家でもあり、さまざまなジャンルの著書があり、ユニークな論理を展開している。

本書で著者は、常にどこかに「世界の中心」を必要とする辺境の民が日本人であり、日本人固有の思考や行動は世界から見ればかなり特殊であると述べる。「世界標準からこんなに遅れている」と言われると日本人は必死になって「キャッチアップ」しようとするが、「国際社会はこれからどうあるべきか」という種類の問題になるととたんに口をつぐんでしまう。

しかし辺境人の優れた才能として著者は学びの効率がいいことを指摘する。学びは学んだ後になってはじめて学んだことの意味や有用性について語れるようになる。そこで外来の知見に無防備に身を拡げることが多くの利益をもたらすことを日本人は歴史的経験から習得しており、「学ぶ力」こそ日本の最大の国力であると著者は主張する。

ヘンリー・A・キッシンジャー 著
キッシンジャー回想録　中国（上・下）
塚越 敏彦／松下 文男／横山　司／岩瀬　彰／中川 潔 訳、岩波書店、2012年

尖閣諸島をめぐる対立によって日中関係の将来が心配されているが、現在日本の貿易相手国は輸出入とも中国が全体の20%ほどを占めて第1位になっており、日中はすでに一体化した経済圏を形成している。また2008年に戦略的互恵関係の推進に関する日中共同声明が出され、友好関係を発展させる基盤はでき上がっている。私は2007年に日本学術振興会が開設した北京センターの初代所長として4年間北京に滞在し、日中学術交流を推進する仕事をしてきたが、教育と科学技術に関する両国の交流も急速に発展している。

著者のキッシンジャー博士は1972年のニクソン訪中による米中国交回復の実現のために活躍した人物として歴史に名を残しているが、本書では世界の人々をあっと言わせたこの出来事が「地政学的な発想」と中国の歴史と中国人の考え方を深く理解することによって初めて実現したことを詳しく解説してくれる。私たちは表面的な米中対立に目を奪われがちであるが、キッシンジャー博士は本書の中で、「これからの米中関係を適切に表現すれば、それは協力関係というよりも『相互進化』であろう」と述べている。「相互進化」はこれからの日中関係においても強く求められる。

福地　肇 FUKUCHI, Hajime 退職

すこし離れたところから眺めてみる

福地　肇 FUKUCHI, Hajime

総長特命教授（2012年度～2013年度。2014年3月末退職）、東北大学名誉教授（大学院情報科学研究科）、文学博士
専門分野:英語学、機能言語学

担当科目

※2013年度
基礎ゼミ：「『ことば』の世界に迷い込んでみませんか」
展開ゼミ：「『ことば』の世界を探検してみませんか」
共通科目：「英語A1」／「英語A2」／「英語B1」／「英語B2」／「英語C2」

私は、昭和50年に東北大学に赴任し、平成24年に定年退職しましたが、その間37年、川内キャンパスで1、2年生のための英語の授業を担当してきました。学部や大学院で専門とする英語学や言語学の指導もしましたが、教養（一般）教育の英語の教室で、入学して間もないフレッシュな学生の皆さんに楽しく接してきたことが、英語教師としての私の大きな、そして大事な部分を占めています。

外国語の教室の風景は、昔と今とではかなり変わってきたように見えますが、本質的なところではあまり違いはありません。教材を読み、書き、聴き取り、話すといった基本的な作業が中心となります。紙の辞書から電子辞書に移ったことが以前との目立った違いでしょうか。

このような外国語（英語）の学習に直接参考になる本は無数にあるでしょうが、今回は別の観点から紹介します。教室の内外で意識的に外国語の勉強をしているうちに、「これは何となくおもしろい言い方だ」「日本語ならどう言ったらぴったりするだろう」「（人間の）ことばって不思議な（あるいは不合理な）ものだな」という思いを抱くことがあると思います。これは、外国語という、いま勉強している対象を、少しだけ離れたところから眺め直した時に感じるものかもしれません。私は2012・2013年に「ことばの世界に迷い込んでみませんか」という題目の基礎ゼミを担当しましたが、これは、特に外国語の学習のためではなく、素直な気持ちで身近にあることばを眺めてみようという趣旨です。しかし、そこで何かを見つけたら、外国語に対する新しい見方ができるようになる可能性があります。

このような姿勢は、何も外国語の学習だけにあてはまるものではありません。「どんな学問分野に進むにせよ、その研究分野の歴史をまず勉強しなければならない」という言葉を聞いたことがあります。要するにいきなり作業にはいるのではなく、全体が見えるところから眺めてみる、ということでしょう。私は、自分の専門の勉強をしているときにも、どちらかというと「その周辺」にあることがむしろ気になる性質でした。その周辺から自分の論文の対象となっている事象を眺めることが多かったといえます。

以下で紹介する6冊は、少しわき道によって、ことばとその周辺にあるものを考えながら外国語の学習を続けていったらどうだろうというつもりで選んだものです。
（2014年2月）

岩波新書編集部 編

英語とわたし

岩波新書、2000年（品切重版未定）

英語の参考書は無数にあり、さまざまな角度から英語に関して論じた書籍も数え切れないほど、私たちにとって英語は大きな関心事である。英語を使えるようになりたいと多くの人が願いながら、挫折を味わうというのも現実である。

本書は、各界で活躍している23人の体験的英語論である。政治家、学者、ジャーナリスト、ビジネスマン、スポーツ選手、音楽家など、さまざまな分野の人が仕事をする中で英語とどのように関わって（あるいは格闘して）きたかを淡々と話している。この中にはもちろん英語の達人もいるのだが、英語を専門的に勉強してきた人はいない。みな、日本の学校で教育を受け、あくまでもそれぞれの仕事のなかで英語を勉強してそれを使っている人たちである。また、英語をどのように学びどのように使っているかだけでなく、優れた仕事をする人たちが国際共通語である英語を（あるいはそれを使うことを）どう考えているのかもわかる。皆が皆、英語を使うことを無批判に肯定しているわけではない。なかには皆が英語に向いている現状に少し立ち止まってみることも必要だという人もいて、面白く参考になる。

中村 保男 著

翻訳の秘訣：理論と実践

新潮選書、1982年（絶版）

「翻訳」に関して書かれたものの中には達人による自慢話や苦労話、失敗談になっているものが少なくないが、本書はそのようなところは一切なく、副題からわかるように、翻訳の本質について述べるとともに、翻訳の実際の作業をできるだけ体系的に整理し、翻訳を通して日本語の表現力・表現力を身に付ける方向を目指している。

ふだん外国語の学習をしている学生の皆さんにとっては、「翻訳」とは極めて特殊な専門的な作業であると思うかもしれない。実際そういう面はあるが、本書は、中学校・高校で英語の基礎を学んだ人の語学的な知識を前提として、英文和訳・英文解釈を卒業して翻訳にいたる道筋を教えてくれる。つまり、外国語学習の一つの行き着く先が優れた翻訳であるという視点から、著者の示す道筋は、見えないところで言語学的な基盤と根拠に基づいている。たとえば、著者は「日本語・英語間の語順の違いは文法の違いによるものでいたしかたがないが、『節』順は両者ともに基本的に変わりがない」というが、これは機能言語学の基礎でもある。

自分の持つ外国語力をさらに伸ばしたい方には一読をお勧めする。

池上 嘉彦 著

英語の感覚・日本語の感覚：〈ことばの意味〉のしくみ

NHKブックス、2006年

外国語という科目の中で具体的に学ぶものは、外国語の発音であり文法であり単語（語彙）である。それを学び知った後に、読む、聞く、話す、書く、といった実際的な技能を身に付けることが外国語学習の目的である。しかし、文法に適った文の形を作り適切な語彙をそこにはめ込み、それを正しく発音しても適切な言語コミュニケーションになるわけではないことは、私たちが日常感じているところである。

本書は、文法と（辞書があたえる）意味でできた文の骨格にどのような肉付けをすることによって「自然な」(英語らしさ、日本語らしさ、など）表現ができるのかを、系統的に考察したものである。たとえば、同じことを言うのに、「(私には）星が見える」(自動詞型）というのが日本語的であるのに、英語では「私は星を見る」(他動詞型）という言い方が普通である。このようなことは英語の教室で先生が何かの機会に話をしてくれるのだが、本書では、文法書や辞書だけではわからない言語表現の豊かさを、言語学の視点から論じたものである。

「ことばにこだわる」方面には何かの参考になると思う。

井上 ひさし 著

日本語教室

新潮新書、2011年

2010年に惜しまれて世を去った著者は、すぐれた小説や戯曲を数多く残しただけでなく、日本語について深い見識をもった作家として知られる。『私家版日本語文法』『自家製文章読本』のようなタイトルの日本語論が数多く、言語学者や日本語学者が思いもつかない現象に目を向ける鋭い観察眼の持ち主である。新聞の不動産広告に見られる最小の字数で最大の情報を伝える手法の分析など、あっと驚くセンスがある。

本書は、これまでの身の回りの気がつきにくいことばの現象を論じるよりは、もう少し言語を正面から見据えて日本語のすがたを論じたものである。しかし、講演の記録をもとにしたということもあり、決して堅苦しいものではなく、「レモンティー」ではなく「レモンテー」が正しい、というような例を出して日本語の音韻の特徴をさりげなく教えてくれる。

しかし、この本から読者が感じる最大のものは、日本語にたいする著者のやさしい眼差しであろう。「ことばの乱れはいつの世にもある」「ことばとは精神そのもの」「グローバリゼーションは危険だ」などという言い方から、日本人が大事にすべきことばに対する、著者の限りない愛情を感じる。

鈴木 孝夫 著
ことばと文化
岩波新書、1973年

言葉が違えば文化も違う、というのはいわばあたりまえのことで、決してめずらしい見かたではないが、どのように、と訊かれると困ることがある。ことばが人間の思考や文化の形態を決める、というのが言語相対論という言語観であるが、どの程度決定するのかによって、弱い仮説と強い仮説がある。

こういう議論をするときによく出される例や話題は、日本の幼児は太陽を書かせると赤いクレヨンを使うが、黄色を使う国もある、とか、ピーターパンの挿絵に出てくるワニは緑色である、という他愛のないものもある。

本書の中心的内容となっている日本語の呼称体系は、ことばがいかに日本人の人間関係の形成に関わっているかを知るうえで考えさせられる。親は子を固有名詞や代名詞で呼び、子は親をお父さん・お母さんと普通名詞で呼ぶ、子に対して親は自分のことを普通名詞で呼び、子は代名詞を用いる。小学校低学年担当の先生も自分を普通名詞で指すことがある。また、職場の上司は部下を固有名詞で呼ぶが、部下は上司を課長などの普通名詞で呼ぶ、など、いわば整然とした体系をなしていると思われる。ことばが文化的基盤の形成にどうかかわっているか、その様子がよくわかる。

中西　進 著
日本の文化構造
岩波書店、2010年

タイトル通りの内容であり、タイトル通りの堅い本である。今回紹介した6冊の本のなかでは一番高度な内容になると思うが、それほど難解というわけではない。講演や学術誌に載せた論文を収集編集したもので、体系立てて書かれたものではなく、その点では気楽に読めるとも言える。

著者は高名な万葉学者であり、縄文の時代にさかのぼって現在までの日本文化を特徴づける話題を拾って論じているが、それを通して日本文化と他の文化のパターンの違いに目を向けているように思う。たとえば、日本の建物をふくめた構築物は平面的に広がるパターンがあるのに対し、西洋のそれは垂直に伸びようとするパターンがある、という指摘がある。代表的な建築、たとえば野山を借景とする寝殿造りと、何百年もかけて完成されるゴシックの大聖堂を思い浮かべればすぐに実感することであるが、無秩序に広がる日本の団地と、2本の道路が交差するだけで出来上がり番地の付け方まで決まるアメリカ西部の小さな町にまで話題が広がる。

英語教師の私は、ここから、節を並列させたがる日本語と節を積み上げたがる英語の文（節）の構成パターンの違いを想う。

前　忠彦 MAE, Tadahiko 退職

若い頃の洋書との出会い

前　忠彦 MAE, Tadahiko

総長特命教授（2011年度～2013年度。2014年3月末退職）、東北大学名誉教授（大学院農学研究科）、農学博士
専門分野：植物栄養生理学（作物の生産性に関わる生理・生化学、栄養学）

担当科目
※2013年度
基礎ゼミ：「“植物の独立栄養性”を検証する」／「ヒトの暮し・文化と植物の多様な関わり」
基幹科目：「地球の命支える“光合成”をひもとく」
総合科目：「植物面白考―巧みな生存戦略と私達の暮し」

私はこれまで、植物栄養学、光合成、作物の生産性に関わる生理・生化学等について、研究と教育を行ってきた。ここでは、若いころの洋書との出会いについて述べたいと思う。

学部時代、運動部で部活動中心の生活を送っていた私は4年で卒業して社会に出るには心もとなく、大学院に進んで勉学しなおすこととした。

私が大学院生となった1960年代後半は生化学の研究が盛んで、私が所属した研究室では米国から帰国後間もない助教授を中心に、植物のアミノ酸に関する研究が活発に行われており、私の研究もその流れに沿うものであった。

当時、最新の科学情報は、今のようにコンピューターを操作することで瞬時に手に入るのとは違い、発行後数ヶ月遅れでやっと届く外国雑誌に拠っていた。また、最近の情報を盛り込んだ広範な知見を得ようとする場合は、外国の教科書・専門書を手に入れるしかなかった。当時は、洋書を扱う本屋が定期的に研究室を訪れ注文をとっていく時代で、1ドル360円だったことに加え、定価に高額の郵送料、手数料が上乗せされてさらに高いものとなった。よって洋書は、院生にとって一大決心をしないと購入できないものであった。自分自身で初めて選んで購入した洋書は、『Dynamic Aspects of Biochemistry』（Baldwin、1967）と題する青い表紙の本だった。それを初めて手にした時の気持ちの高ぶりが今でも懐かしい。研究者になることを決心した証しでもあった。

大学院の修了を機に研究の幅を広げようと留学を決意した。自分の研究に行き詰まりを感じていたからである。幸い、オランダのワーゲニンゲンの植物生理中央研究所が博士研究員として迎えてくれることになった。オランダに渡り、街の本屋にいってみて驚いた。私の欲しい本が、信じられないような手頃な値段で並んでいた。滞在した街は小さいながらも、オランダ唯一の農科大学に加え国の農業研究機関のほとんどが集結しているという環境にあったため、店頭にはヨーロッパはもちろん、米国からの本も豊富にあった。うれしくて多くの本を購入した。おかげで留学期間中に植物科学の幅広い分野について多くを学ぶことができた。このときの経験が、私のその後の研究に対して広い視野と奥行きを与えてくれたと思っている。

学生諸君に伝えたい。“ここぞと思うときに集中して学ぶ!それはのちにきっと大きな力となる”。

以下には、私の担当している講義に関連した本を紹介する。

（2014年2月）

葛西 奈津子 著

植物が地球をかえた！

植物まるかじり叢書①、(株)化学同人、2007年

わたし達をはじめとする動物は、“植物”によって生かされている。しかし、わたし達は、生き物としての植物をどれだけ理解しているだろうか?

「植物まるかじり叢書」は、生きものとしての植物の営みを最新の知見を交えて紹介するとともに、こうした植物を研究している人たちがどんなことを考えているのかを合わせて紹介しようと日本の植物生理学会が中心となって企画した全5巻のシリーズものである。高校生、大学1・2年生、一般向けとしながらも学問的な内容は植物科学の第一線の息吹が感じられる本を目指し書かれている。

その第一巻が本書で、植物の大切な働きの一つ、光合成を中心にまとめたものである。植物の行っている光合成はわたし達の食糧だけでなく、地球環境の形成や維持にも大きく関わっている。

サイエンスライターである葛西奈津子氏が、8人の光合成に関わる研究者にインタビューして、それぞれの内容を章ごとにまとめている。著者が内容を分かりやすく紹介しているとともに、それぞれの研究者の研究に対する考え方や取り組む姿勢が丁寧に紹介されていてそれだけでも興味深い本となっている。光合成の営みやその研究の面白さを知るのに格好の本である。

丸山 茂徳／磯崎 行雄 著

生命と地球の歴史

岩波新書、1998年

地球の歴史は46億年、生命の歴史は40億年に及ぶ。この間、生命はいかなる進化を遂げ、地球はどのように変動し、それら進化と変動の要因はどう説明されるだろうか?　本書は、このような疑問に真っ直ぐに答えてくれる。「生命の進化史」を著者ら独自の「固体地球の進歩史」という大きな視点からとらえ解説している。

主な内容は、地球と生命の歴史の中の七大事件、地球の変動原理、生命の誕生から原核生物までの初期生命の歴史、酸素発生型光合成の開始から5.5億年前の硬骨格生物出現までの生命発展の歴史、生物の大量絶滅と新種の出現が繰り返された5.5億年前から今日までの歴史、大気・海洋・地殻の歴史、地球のテクトニクス、マントルと核の歴史、そして生命と地球の共進化についてである。

本書を読むと、地球の表層環境とそこに生きる生命体がその歴史を通して固体地球あるいは宇宙の変動にいかに大きく左右されてきたかがひしひしと伝わってくる。東日本大震災を経験した直後故に、そのインパクトは強烈である。わたし達の自然に対する向き合い方を深く考えさせてくれる内容で、皆に読んでもらいたい本である。

園池 公毅 著

光合成とはなにか
―生命システムを支える力―

講談社ブルーバックス、2008年

「光合成」と言えば「植物が光によって葉でデンプンをつくる反応」と小学校で習って以来、誰もが知っている。しかし、一歩踏み込んで「光合成のしくみは?」と正面きって問われると、多くのヒトが答えるのが怪しくなってしまう。

地球環境の保全、食糧問題、エネルギー問題等が日常的に話題となる時勢である。これらの問題に「光合成」が深く関わるとなれば、さらにその理解を深めておくことが現代人にとって必要なことであろう。

「光合成」を解説する本はいくつかあるが、そのほとんどは複数の著者によって書かれたものである。そのたぐいの本は、個々の項目の理解にはよいが項目間の関連を掴みにくいのが欠点である。光合成を全体的・網羅的に理解するのに手頃な本が案外少ない。

そんな中で、文庫本サイズに「光合成」の重要な項目をバランスよくまとめ、読みやすい文体で一人の著者により書かれているのが本書である。全体を通し一貫した見方・考え方で説明されていて、入り組んだ生理反応の相互関係も理解しやすい。内容には最近の情報まで組み込まれており、光合成のほぼ全分野を網羅している。「光合成の全体像」をつかむのには適した本として推奨したい。

東京大学光合成教育研究会 編

光合成の科学

東京大学出版会、2007年

理系ばかりでなく文系の学生や社会人にも興味を持って読んでもらえるように、との編集方針のもとにつくられた「光合成」の解説書である。また、関連事項についてちょっと調べたい時などに便利な本でもある。

これまでの教科書は、光合成のメカニズムの解説を中心としたものが多かったが、本書は、そればかりではなく、近年のゲノム研究や遺伝子操作による新しい展開、環境や生態における光合成の意義、食糧との関わり、地球の歴史の中で光合成が果たしてきた役割など、光合成が生命科学・地球科学・社会に与える意義等についても幅広く解説している。

内容は、1. 光合成について考えてみよう、2. 生命世界は光合成が作り上げた、3. 多様な光合成生物の姿、4. 光合成を支える細胞構造、5. 光をとらえて利用するしくみ、6. 光合成膜で起きるはじめの反応、7. 植物の体を作るための物質同化反応、8. 光合成を助けるしくみ、9. 葉緑体を機能させるための遺伝子、10. 葉緑体をつくり増やすしくみ、11. 環境に適応する光合成のしくみ、12. 光合成生物の進化とゲノム科学、13. 光合成は生命世界を作り続けるとなっている。

幅広く光合成を学びたい人にお薦めの本である。

デービッド・アッテンボロー 著

植物の私生活

門田 祐一 監訳、手塚　勲／小堀 民恵 訳、山と渓谷社、1998年

自然をテーマにしたドキュメンタリーの第一人者として知られるデービッド・アッテンボローが、植物たちの秘密と謎に満ちた驚きの生活を、多くの美しい写真に分かり易い説明文を添えて、世に送り出した名著である。

熱帯雨林、砂漠そして極地等で暮らす植物のさまざまな生き方を3年の月日を費やし追跡している。写真を見ただけでもわたし達の知らない植物のたくましさ、強さ、そのしたたかな生存戦略を知ることができる。

全体は6章からなり、第1章では植物が子孫を増やし縄張りを拡大していく戦略、第2章では養分の多様な調達方法、第3章では花粉輸送の作戦、第4章では環境変化の中での生き残り戦略、第5章では植物とさまざまな生物とのパートナーシップ（共生)、そして第6章では南極、北極、高山、砂漠等の極限の世界でのサバイバル戦略が紹介されている。

本書を読むと、太古からの様々な試練を乗り越えて適応・進化し今日まで命をつないできた植物のすごさが伝わってくる。植物に対するわたし達の一般的なイメージを大きく変えさせる内容と迫力をあわせ持った本である。一息入れたいときに手にとるにふさわしい楽しい本でもある。

L・T・エヴァンス 著

100億人への食糧
―人口増加と食糧生産の知恵―

日向 康吉 訳、学会出版センター、2006年

世界人口は、2011年11月に70億人を突破した。そしてその増加は今後も続き、2050年には100億人に達するとも予想されている。

はたしてこの地球は、増え続ける世界人口を将来も養うことができるのだろうか?予想される食糧危機は、環境、生物多様性、教育、政治、経済等多くの問題と関わっており、世界が知恵を寄せ合って解決しなければならない問題である。

本書は、農学者として世界によく知られるロイド・エヴァンスによるもので、1−10章では、人類の出現から今日までの世界人口の変遷と作物生産に関わる技術、科学の発展、食糧供給の関係を、時代を追って説明している。11章では、現在世界では何を食べているのか、そして著者の強い思いが込められた最終章では、100億人への食糧供給への具体的な戦略の提示とその実現に際しての問題点が述べられている。

古今東西の人文科学から自然科学、社会科学と幅広い分野の膨大な情報をもとに、多様な観点からの論議が展開されている。その圧倒的な知識には驚嘆させられる。世界の農業史、農業技術史としても興味深い内容である。

海老澤 丕道 EBISAWA, Hiromichi 退職

本との出会い ― 今、君たちだったら ―

海老澤 丕道 EBISAWA, Hiromichi

総長特命教授（2008年度～2013年度。2014年3月末退職）、東北大学名誉教授（大学院情報科学研究科）、理学博士
専門分野：理論物理学（超伝導／超流動、ナノ物理学）、ゆらぎ科学

担当科目
※2013年度
基礎ゼミ：「創造的な研究とは―ノーベル物理学賞に学ぶ」
展開ゼミ：「創造的な科学研究と人間社会」
基幹科目：「自然界の構造：おはなし物理学」
総合科目：「科学と人間」

高校生時代までに学校で得る知識はたいがい、皆一緒に同じことを同じところまで教わって得るものだ。入学試験問題をなるべく正しく解くために役立つ学力が身につくであろうが、それは結果を教わることが主であり、学問とは言えない。皆が同じことを教わるからではなく、結果を教わるからだ。大学での学びは記憶に取り込んだ広い知識ばかりではなく、身についた力が目標でなくてはならない。それも、既存の問題が解ける力ではない。私はそんなことを考えて、担当する授業科目の内容をより良くする努力を続けてきた。

およそ半世紀前、諸君と同じように大学生としての一歩を踏み出した。1年半ほど考えた末、私は物理学者になる道をたどり始めた。その頃は物理学科自体が小さな学科で家族的であり、好きな分野と限らずに皆で専門書を一緒に勉強し、専門外の本を輪読する学部学生生活だった。その時代、つまり進路を決めるまでと研究生活が本格化するまでの過程で、それまで子供時代から読んできた本とは別の種類の本に知識を求めた。高校生時代までは文学書が主だったし、子供の時は子供向けの科学書も多く読んでいたのだった。

私の「読書の年輪」はその学生時代のところの刻みが厚い。論文を読むことに追われる前のことである。読んだ本はその後の研究に役立ったというよりも研究をする私の心を作った本といえる。そう長い時間を読書に使う余裕もなかったので、多くは新書や文庫本であった。分厚いような本は題目に惹かれて買っても読み通せなかったように思う。

教養教育院に所属して教養教育科目を担当することになって新たに授業内容を創ることになり、あの頃に読んだ本が半世紀の時空を超えて頭の中によみがえってきた。それらの本に気持ちを高められて、研究がどんな意味を持つかを課題にした「科学と人間」の授業の企画ができた。小学生から中学生の頃に愛読した一冊の科学啓蒙書に影響されて、数式になるべく頼らないで物理学を知り、身近な現象について考える力を養おうとする「自然界の構造：おはなし物理学」の授業内容が構想できた。

それらの科目の詳しい説明はさておき、それらを企画・構想する基となった本を紹介しよう。私が出会った本の一部である。物理学に偏っているが、物理学が学問の樹における幹の位置にあるのだから、として許していただきたい。手にとって読んでもらうと良いが、少なくとも参考になることをのぞんでいる。君たちがそれぞれ読みたい本、君たちを育ててくれる本と出会うことが願いである。

（2014年2月）

アインシュタイン／インフェルト 著

物理学はいかに創られたか（上・下）

石原　純 訳、岩波新書、1963年

二十世紀に活躍した世界最有名人で相対性理論を打ち立てた人として知られるアインシュタインは理論物理学者の中でも代表的な存在だ。自然現象を相手に人間の心が物理学という「物語」をどのように作り上げようとしてきたか、evolution（発展、進化）として語っている。数式を使わないで「たとえ」で説明し、要所に図・写真を使った丁寧かつ明快な記述である。

まず、ニュートンの力学とファラデーとマックスウェルによる電磁気学の歴史を「力学的世界観の『勃興』と『凋落』」として語り、物理学としての内容を説明し、自然科学とは人間のいかなる活動であるかを教えてくれている。次いで相対性理論・量子論を詳しく説いている。アインシュタインはボーアらの波動関数の「確率解釈」を認めなかった人だが、そこはインフェルトがしっかり書いてくれた。

訳者の石原純（元東北大学教授）はアララギ派歌人でもありきれいな日本語で書かれている。初版以来70年そのまま発行され続けた文面はいくらか古めかしいが。視覚的にはほとんど文字ばかりであるがそれだけに、内容がぎっしり詰まっている。文系理系を問わずに思考力と知的好奇心を備えた学生なら読み進められる名著である。

ポアンカレ 著

科学と仮説

河野 伊三郎 訳、岩波文庫、和訳初版1938年（原書1902年）

クラスメート達のおかげでこの本に出会った。量子論・電磁気学など専門基礎科目を学ぶのに忙しかった頃、泊まりがけの読書会の提案があり、かなりの人が参加した。伊豆にあった大学の施設だったが、楽しい集まりだった。読んだ本がこれである。

ポアンカレは数学者だが理論物理学者・天文学者としても功績を残している。論文だけでなく著書の数も膨大である。科学思想については、この本が彼が書いた最初のものであり、最も有名である。

私達が直接に興味を持ったのは第九章「物理学における仮説」であったのだと思う。物理学は実験によって真実を知る学問である。だが、それなら数理物理学の役割は何なのか。ここで、事実の集積が科学ではない、それは石を積み上げても家にはならないのと同じだ、という。良い実験は一般化を許す、これにより充実してゆく科学を蔵書が絶えず増大する図書館にたとえると目録を調整する役割を果たすのが数理物理学だ、という。一般化はそれぞれが仮説であり、物理学ではそれは多く数学的形式をとる。こう始めて、科学がどう発展してきたか、どうあるべきかを豊富な例をあげて教えてくれる。科学を学ぶ人にも哲学を学ぶ人にも優れた古典である。

寺田 寅彦 著／小宮 豊隆 編

寺田寅彦随筆集　第一巻～第五巻

岩波文庫、1・2：1993年（1947年）、3・4：1983年（1948年）、5：1986年（1948年）

寺田寅彦という物理学者は夏目漱石の『三四郎』に登場する野々宮さんのモデルとして、また「天災は忘れた頃に来る」という防災の警句で知られ、随筆家で俳人でもある。

寺田の研究には、まだX線が粒子線か電磁波かが不明だったとき、鉱石の結晶による波としての回折の実験を行ったものがある。実験を成功させNature 誌に発表した。しかし、ブラッグ父子がほんの少し先んじて研究していたことを知って寺田はこの研究を止め、全く別の方向に研究を変えた。「人まね嫌い」だったそうである。ブラッグ父子はノーベル賞を受賞し、寺田は学士院恩賜賞を受けた。

随筆集『備忘録』中の「線香花火」には花火の説明に加えて、日本固有の線香花火が次々に枝分かれする現象を日本人の手で解明したい、西洋の学者の掘り散らかした後へ鉱石のかけらを探しに行くもよいが足下に埋もれている宝をも忘れてはならない、と書いている。この『備忘録』は第2巻に収録されているが、文庫には第1巻から第5巻まであり、科学を対象にしたものに限らず文学味豊かな多くの随筆が集められている。すべての分野の学生諸君に勧めたい。身近なことを観察しながら本質を洞察する寺田寅彦の精神を学び、楽しんでほしい。

湯川 秀樹 著

目に見えないもの

講談社学術文庫、1976年

日本人の心が敗戦直後沈んでいた時代に、湯川秀樹が日本人として初のノーベル賞を受賞するというニュースは人々に元気を与えた。多くの若者が物理学の研究を目指すことになった。私もその一人である。しかし、湯川が多くの本を読んでいる教養人であり、格調高く深い内容をもつ学問論や現代の物理学の解説を多く書いていることには気づいていなかった。最近改めてこの古くてなお新しい本を読んでみた。

湯川の研究は理論物理学である。現代の理論物理学が何を研究し何をめざすのか、当時（1940年代まで）の状況を踏まえて述べたのが前半である。後半には自らの生い立ちや折々感じたことを振り返り、自然観、研究観、科学論等々を述べた文章が集められている。私にとって印象深い箇所の一つは「科学と教養」の中で、ある自然科学書が単なる知識としてではなく真に一般人の教養に役立つか否かは、主として著者の心構えとか気魄とかがその内容を通じて感得せられるか否かだと書いているところである。もう一つは「目に見えないもの」の中で、黴菌の研究と医学をたとえにして、人々に原子や電子の研究に親しみをもつよう仕向ける必要性を示唆しているところである。今日の、人間生活と先端科学の精神的な乖離を予想していたかのようである。

ジェームズ・D・ワトソン 著

二重らせん
—DNA の構造を発見した科学者の記録—

江上 不二夫／中村 桂子 訳、講談社ブルーバックス、2012年

科学研究の現場の話は一般の人たちには小難しくなってしまい、面白くもないだろう。これは私が研究を始めた頃に抱いていたイメージであった。ところが、この本を読むと、研究がどんなに人間的であり、社会的であり、すごいドラマの展開であるかを如実に感じることができる。

遺伝子の所在は細胞の核にある核酸、DNA の上であろうと分かり始めた時代に、DNA の物理的な構造模型を提唱したのが著者ワトソンとその共同研究者フランシス・クリックであった。その基となった X 線回折の研究を行ったモーリス・ウィルキンスとともに1962年のノーベル生理学・医学賞を受けている。研究は1951年から1953年にかけて展開されたが、その経過の実に人間臭い記録が本書である。

私は博士課程の学生だった時に、原著が書かれた（1968年）同年にタイムライフインターナショナル社から出版された同じ翻訳者達によるものを読んだ。確かに、どんな経緯で研究が進んだかよく分かった。読んで感動したと言うより、競争相手、協力者他登場人物の関係の複雑さに驚いた。一方で、ワトソンの強烈な個性に対して違和感を覚えた気もする。

佐野 昌一 著

おはなし電氣學

科學知識普及會（明治書院発売）、1939年（絶版）

こんな感じの本を今、知識欲盛んな子供達が食い入るように読み進むところを想像してみると本当に楽しい。電子の話から始まってざっと挙げると、静電気、電流、電磁気の話、発電の話、家庭内の電気の話、電車の話、電気機関車の話、電話の話、電話交換機の話、放送の話、真空管の話、電波の話、落雷の話、映画の話、テレビジョンの話まで47話の構成である。縦書き、右めくりの、小説スタイルである。それもそのはず、著者は逓信省電氣試験所研究員の技術者ながら海野十三（じゅうざ）のペンネームで SF 小説や探偵小説を書いた作家でもある。著者自身手書きの挿絵も豊富であり、楽しめる。

序文にテレビジョン開発で知られる川原田政太郎元早大教授が、「快著」であるとしてその平易さ、面白さ、かゆいところに手が届く様を賞賛している。アマチュアファンのみならず、学生、専門家もこれによって真の意味を初めて掴み得るところ多々とある。私は父の書架で見つけ、出版後10数年を経たこの本の虜になってしまい、小学生時代から電気が好きになった。今は内容的には古い部分がほとんどだが、この本を読み返すと科学技術の知識とはかくあるべきだということがよく分かる名著である。附属図書館に収蔵されている。

柳父 圀近 YAGYU, Kunichika 退職

「大学時代でなくても、できること」ではなく

柳父 圀近 YAGYU, Kunichika

総長特命教授（2009年度～2010年度。2011年3月末退職）、東北大学名誉教授（大学院法学研究科）、博士（法学）
専門分野：西洋政治思想史、マックス・ウェーバー研究

担当科目
※2010年度
基礎ゼミ：「文明論の概略を読む」／「福沢、岡倉、内村―西洋化と知識人」
基幹科目：「法・政治と社会：政治学入門」／「歴史と人間社会：職業観念から見る社会史」
総合科目：「西洋史と政治思想」

私は長らく西洋政治思想史を担当してきました。とくに近代西欧に生じた市民社会の特質と近代国家の関係を、またマックス・ウェーバーの学問と思想を研究テーマとしてきました。

川北でもその関連のテーマで授業をします。

それはそうと、皆さんはこれからの大学時代をどのように使おうと思っていますか?

大学で勉強するということは、「世界の多面性」を知り始めることではないかと私は思っています。皆さんも、世の中にはいろいろな考え方があって、いろいろな価値観を持った人たちがいるのだということに次第に目覚めるのではないかと思っています。大学で、異なる価値観からは、世界のあり方が、自分の見方とは違って見えて来るのに気がつくことは大切です。（世の中の多様な考え方に接するのは、社会人になってからではないか、と思うかもしれません。しかし社会人になると、案外その組織や業界の一つの考え方とか時代の空気などに染まってしまうものです。）

大学では、授業を通じて、それまでの自分の頭とは違った考え方や、物事の捉え方に出会うでしょう。いろいろな学説や本に出会います。また、生身のいろいろな先生たち、友人たちとディスカッションして、くり返し、「世界の見え方」の多面性に目覚めて行くことになるでしょう。しかも「いろいろな見方」を、「私利私欲」を離れて検討し、理性的・批判的に深く考察する訓練を体験するはずです。そしてそれこそは、大学生活ならではの、一種の「純粋経験」ではないかと私は思っています。そしてその中で先生や友人たちとの交流を深めてゆくことができれば、それも生涯の「財産」になるだろうと思います。

4年間はアッという間です。しかし上手に使えば実りの多い時間です。ですから何であれ、「大学でなくても」できることや、「大学を出てからこそ」できることに、学生時代を使うのは賢明ではないと思います。「大学でなければ」できないのは、たぶんこの知性の「純粋経験」でしょう。

大学には、さまざまな立場の研究者がいることが必要であり、学生は、多様な立場の学問に接し得る必要があるということです。また是非いろいろな本や文献に接してほしいと思います。この後すこし本を紹介しておきますが、それはあくまで私の講義との関係で参考になるものを紹介するという限りのものです。

（2011年2月）

マックス・ウェーバー 著
職業としての政治
脇　圭平 訳、岩波文庫、1980年、原書1919年

古今の「政治の世界」に通じた著者の知識が惜しげもなく使われ、また「政治と人間」についての深い思索が語られている、まずは類例のない講演です。

もちろん時代の制約を受けています。しかしぜひ読んで、いろいろ考えてみてください。

第一次大戦直後の混乱したミュンヘンで学生団体の求めに応じた講演ですが、今日でも大きな影響を、政治に関心のある人々(政治家だけではなく)に及ぼし続けています。

ひとつの行為がもたらし得る「意図せざる結果」をも、できるだけ予測して（その予測のためにこそ、社会科学は存在する)、そうした「意図せざる結果への責任」をも引き受けるのが、政治における倫理的態度（=「責任倫理」）だ。それは「動機の純粋性」に生きる「心情倫理」(信念倫理）の態度とは違ってくる、という議論を —— 他にもいろいろ「政治の世界」の特質を論じていますが —— とくにじっくり読んでみてください。

変則的なアドヴァイスですが、この本に限っては、最後から読み始めて、前へ前へとさかのぼり、もう一度頭から読むのがよいかも知れません。

大塚 久雄 著
社会科学における人間
岩波新書、1977年

この本は NHK 大学講座の講義をもとに書かれています。学生時代に読んでから今日まで多くの示唆を与えられて来ました。

社会科学はまず近代の西洋で、近代西洋人とその社会を自明の前提として形成されました。しかしそのままでは近代西洋以外の時代や文化圏の諸社会について学問的に分析するのには無理が生じます。例えば近代日本の人間と社会には、近代西洋の場合と重なる面もありますが、大きな違いもあります。西洋の場合と学問的に比較するにはどうすればよいでしょうか。もちろん共通する要素の分析は重要です。しかし、それぞれの社会の人々の社会的行為の「主観的動機の意味」をよく理解し、社会現象を、その動機を「原因」として生じるものとしても因果関係的に十分説明する必要があります。この場合、それぞれの社会の文化、特に宗教意識の影響は大きな意味を持ちえます。そうした宗教文化との関係で生じる「人間類型」ないし「エートス」に注目して社会科学の新たな方法を形成したのがマックス・ウェーバーでした。

大塚さんはウェーバーのこうした方法をマルクスの歴史理論との関係で考察しながら、独自の方法へと展開しています。

マックス・ウェーバー 著

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神

大塚 久雄 訳、岩波文庫、1989年、原書1920年

現代社会科学の古典のひとつ。単なる「営利欲」や「投機」、また政治的特権に「寄生」する営業ではなく、ひたすら「合理的な隣人愛」実践としての職業活動にいそしむことへと、当時の人々を強く動機づけたのが、プロテスタンティズムの職業観念だったと分析しています。「社会」とはある意味では「職業」のネットワークです。プロテスタンティズムの「職業観念」は、封建時代の職分のネットワークたる「身分制社会」を一変させ、「市場」に媒介された「市民社会」を形成する社会の動きを加速させた。こういう分析です。

しかし歴史はここにとどまらず、同じプロテスタンティズムの「職業観念」は、意図せざる結果として、とどまることを知らない近代資本主義の進展にスイッチを入れました。その進展の先に生じる「人間疎外」の問題も、本書は鋭く論じており、現代の社会科学に大きな影響を与えています。

ところで、西欧とは違う文化伝統のもとにあった日本や東アジアの「近代化」の場合、こうした問題にあたるものは一体どうなっていたのでしょうか?

こうした問題関心にもいざなう本です。

福田 歓一 著

近代の政治思想 —その現実的・理論的諸前提—

岩波新書、1970年

「デモクラシー」とか「国民国家」と云った政治制度や政治理論の多くのものは、ヨーロッパの歴史の中で形成されて来たものです。

もちろん、現代の世界では、ヨーロッパ文化圏の重みは相対化されていますし、また時代的にも「近代」と「現代」では大きな変化が生じています。しかしそれだからと云って、政治について考えてみようという場合は、また積極的に政治学を学びたいという人は、西洋近代の政治学、政治思想の歴史を学ばないですますわけにはゆきません。中世や古代のヨーロッパ政治思想についても学んでゆく必要があります。デモクラシーと云う言葉が、古代ギリシャに由来することは知っているのではないでしょうか。

この本は、戦後の政治学と西洋政治思想史研究の発展に大きな役割を果たし、07年に亡くなった著者の、岩波市民講座の講演がもとになっています。学生時代に読んで政治思想史の扉が開かれた感のあった本の一つです。

なお、少し難しいかもしれませんが、同じ著者の、2009年刊行された論文集『デモクラシーと国民国家』(岩波現代文庫) も読んでみるとよいでしょう。

丸山 眞男 著
忠誠と反逆
―転形期日本の精神史的位相―
ちくま学芸文庫、1998年

著者は日本政治思想史の専門家です。戦国武士の心には「天道」への忠誠心と、「主君」への忠誠心との矛盾が宿っていたと分析しています。その矛盾の間に生きていたゆえに、武士は時には天道に反する主君をいさめ、その方法として「腹を切る」場合もあったと言います。

今日でも、ひとは「普遍的な原理（道理）」と、「組織」の「特殊利害」との緊張関係の間に立たされることがあります。そのとき人は「自分はどうする?」という問いに目覚めます。その自問によって初めて、ひとは「個人」としての自分に目覚めるのです。ところが日本では明治後半以後の「発展」とともに、上述の意味での「個」の意識がむしろ失われてゆく傾向が見られると、著者は資料によって分析しています。

この傾向にそれぞれの思想で抵抗した人びとを論じた論文「福沢・岡倉・内村；西欧化と知識人」の鮮明な印象は忘れられません。また幕末と明治初期にはあったいろいろな政治的、思想的可能性を論じた論文「開国」も示唆に富みます。

萩原 延壽 著
書書周游　萩原 延壽集5
朝日新聞出版、2008年

萩原さんは本来歴史家ですが、政治、芸術、思想などさまざまな分野の本の書評を集めたものです。最初は、1972年に文芸春秋社から出た名著です。

ひとくちに「書評」と云いますが、他人の書いた本を公平に、また深く理解して紹介し、そのうえで、しっかりした批評を書くのはなかなか難しいものです。今日でも世間には「その本がちっとも読めていない書評」や、「内輪ほめ」の類が少なくありません。しかしこの本は、しなやかな自己意識と、「他者のものの見方」を積極的に理解しようとする精神による、本当の「対話」が伝わって来ます。これを読んで著者のその精神に「感染」することを薦めます。

この本で取り上げられているのは、20世紀の哲学者バーリンの名著『自由論』から、ナチズムとの困難な闘争を闘った名指揮者フルトヴェングラーの『書簡集』に至るまで、多岐にわたっています。ですからこの本は、社会と文化と歴史についてのすぐれた入門書でもあります。続編と云うべき『自由の精神』の巻も是非読むことを薦めておきます。

教育・研究の舞台裏
― 私を支え・慰め・励ましてくれた本 ―

海野 道郎 UMINO, Michio

総長特命教授（2008年度～2010年度、2014年度。2015年3月末退職）、東北大学名誉教授、工学修士
専門分野:数理計量社会学、環境社会学

担当科目
※2014年度
基礎ゼミ：「文学作品にみる『社会と思想』」／「人に会う：生きる意味と世の中の仕組み」
基幹科目：「社会の構造：社会の生成メカニズム」／「社会の構造：社会的決定のメカニズム」
総合科目：「東日本大震災に学ぶ：社会科学の可能性」／「社会的ジレンマ：環境問題の基本メカニズム」
復興大学：「復興の社会学」

「チリリンチリリンじてんしゃが、おやまのみちをとおってく」と始まる本があった。ロクちゃんという子供が、いろいろな動物たちに巡り合う。白い髭を生やしたヤギのおじさんに出会ったロクちゃんが問いかけ、おじさんが答える、「おじさん、おひげはなぜしろい。／ちいさいときにしろいこめ、たくさんたべたでしろいのさ。／ロクちゃんこっくりうなずいた」。――「白い米」が憧れの時代だったのだ。この、小さい頃に読み聞かせられた絵本が、私の記憶に残っている最初の本だ。

少年時代に出会った本の中でも、湯川秀樹監修『理科図鑑』は忘れがたい。湯川秀樹のノーベル物理学賞受賞（1949年）が契機となったと思われるこの本を、私は頁がばらばらになるまで読み込んだ。『ぼくのじっけん：ケンちゃんの不思議』（三石巌著）は、科学する心を育ててくれた。オパーリン『生命の起源』は、生物から化学に私の関心をシフトさせた。こうした読書経験は、小学校以来の小動物飼育や中学・高校時代の化学実験の経験と相まって、大学受験に際して迷うことなく理科系を選ばせた。

しかし、私は今、文学研究科出身の総長特命教授として、君に語りかけている。その間の事情を記す余裕はないが（とりあえずは、中村捷編2005『人文科学ハンドブック』東北大学出版会、193頁を参照）、私は大学院の途中で社会科学に転じ、環境や不公平などに関する社会意識の分析や、個人の意思決定と社会的決定との関係についての理論分析に携わってきた。授業では、そのような問題を通して、受講者の皆さんが感性豊かな論理的思考力を身につけるのを援助したいと思っている。

以下に選んだ6冊は、必ずしも私の専門分野（社会意識の数理・計量社会学）の本ではない。社会科学者としての私の進路を決定付けた専門書は、個人的には重要な本だが、ここで紹介しても、ほとんど意味がない。授業の中で紹介する本は、シラバスを見ればよい。また、専門分野を離れた本であっても、高村薫『太陽を曳く馬』(新潮社、2009年）のような現役作家の本や立花隆+立花ゼミ『二十歳のころ』(新潮文庫、2002年)のような学生の目に付きやすい本、『方丈記』のような誰でも知っている本（私は、海外出張のときに携えていくことが多い）は除いた。こうして選ばれた本は、君の専門分野が何であろうと読むことができ、しかも、君の精神を鍛えしなやかにしてくれるだろう。じっさい、過半の本は、私が理科系の学生・院生だった頃に読み、その後も折に触れて頁を繰り、今なお、敬意と愛着を抱いている本である。大学入学以後の私を支え・慰め・励ましてくれた本でもある。

（2015年2月）

プラトン 著
国家（上・下）
藤沢 令夫 訳、岩波文庫、1979年、原著BC4世紀

ギリシャ時代の哲学書など難しそうだし、国家のことなど自分には関係ない、と君は思うかもしれない。しかし、君が実際にこの本を読み始めるなら、それが2つとも誤りであることに気づくはずだ。

第一に『国家』は読みやすく面白い。プラトンの師ソクラテスを中心とした対話が続く中で、しばしばどんでん返しが起こる。「なるほど、そうだ」と思っていると、実はその考えに問題があることが述べられる。そのようにして、探求が深まりを見せる。その「劇」を見ながら、あるいはそれに参加しながら、読者の思索は深められ、知的しなやかさが養われる。

第二に、この本は君のための本でもある。なぜなら、副題「正義について」が示唆するように、この本は、正義の意味を探求し、幸福との関係を論じているからだ。そしてそれは、これまでの自分から脱皮して新しい精神をもった自己を構築し直す時機にある君が、正に考えるべき問題だからだ。しかも、それなくしては、友人関係も部活動も長続きしない。社会の基本問題でもある。この本は、社会の中に生きる自我を確立しようとする君にとって、不可欠な本になるだろう。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』(岩波文庫)は、この問題を、さらに体系的に論じている。

桑原 万寿太郎 著
動物の体内時計
岩波新書、1966年（絶版）

ミツバチは時間感覚を持っているのだろうか。ある日、研究者の食卓にあるママレードに、一匹のミツバチが訪れた。やがて、多くのハチが食卓を訪れるようになった。彼が毎日同じ時間に朝食を食べていると、ハチたちはその時間帯には来るが、他の時間帯にはほとんど訪れない。試みに5日目にはママレードを出さなかったが、朝食時刻になると大勢のハチが来た。

しかし、これだけでは、ミツバチが時間感覚を持っている証拠にはならない。同じ現象が、他の理由によって生じる可能性もあるからだ。こうして研究は始まり、ミツバチのコミュニケーションとそれを支える体内時計の機構が明らかにされていく。

この本は、かなり古い本であり、書かれている個々の事実については、その後の修正があるかもしれない。しかし、新たな観察や実験とともに科学的発見が次々になされていく過程と、それを生み出す科学的探究の精神は鮮やかだ。学生諸君には是非、その醍醐味を味わい身につけて欲しい、と私は思う。

科学的探究について記し同じような感動をもたらしてくれた本には、同じ著者による『動物と太陽コンパス』、東北大学教授だった栗原康による『有限の生態学』など、多くの良書がある。

木下 順二 著

風浪

『風波・蛙昇天』木下順二戯曲選Ⅰ、岩波文庫、1982年、原著1953年

現代の日本社会は明治初期や第二次世界大戦後と並ぶ激動期にある、と言われる。その中で青年期を迎えた君にとって、明治初期の熊本を舞台としたこの戯曲は、共感とともに読むことができるだろう。

社会の変動期には、次の社会を形成するさまざまな思想が提唱される。明治初期の熊本では、横井小楠を師と仰ぐ実学党、朱子学に依る学校党、神道系の敬神党などが並立し、それぞれの思想によって新しい社会を創造しようとしていた。さらに、キリスト教も入ってきた。このような社会状況の中で、志を持つ青年たちは、それぞれの道を追求する。

しかし、主人公・佐山健次は、どの思想にも共感する面を見出しながら、どの一つにも入り込めない。神風連事件前後の激動期に生きる佐山の葛藤を中心テーマとして、この戯曲は展開する。

大学生となり、これまでの自分から人間的・思想的に脱皮する時機を迎えた君にとって、佐山の葛藤は他人事ではない。

木下順二は、『夕鶴』などの民話劇作家である以上に現代劇作家である。『風浪』を読んだ後には、第二次世界大戦中のスパイ事件を題材にした『オットーと呼ばれる日本人』や戦後の極東軍事裁判をめぐる『神と人との間』など、多くの作品に進んで欲しい。

井上 ひさし 著

吉里吉里人（上・中・下）

新潮文庫、1985年、原著1981年

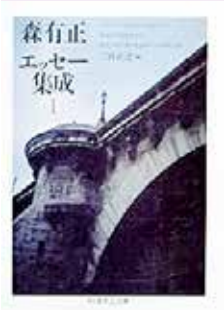
読み方によっては、荒唐無稽な娯楽小説である。

売れない小説家・古橋健二が、取材のために東北本線で一関付近を北上中に、吉里吉里国の独立運動に巻き込まれ、ひょんなことから大統領にまでなってしまう。この間に生じる種々の出来事が、『ひょっこりひょうたん島』の作者によって描かれている。寝転がって笑いながら読むことができる。

しかし、この小説は、それ以上に思想小説である。

吉里吉里村は、面積40平方キロ弱、人口4千人余の小さな村に過ぎない。しかし、食料は自給可能であり、先進的医療技術を誇る病院を経営し、行政は極端に簡素化され、金本位制度の導入によって国際企業からも支持を得ており、日本国からの独立が法的にも経済的にも可能である。そこで、この小さな村は、自分たちの理想の実現を目指し、日本国から独立しようとする。周到な準備を経て始まったその運動は、しかしながら、独立を阻もうとする日本国の力によって潰されていく。その過程を見る中で、我々が日ごろ当たり前だと思っている物事が、次々に俎上に載せられていく。

この小説は、固定観念に縛られがちな我々の思考を解放し、自由な精神に導いてくれる。高橋和己『邪宗門』とは対照的なユートピア小説である。



森　有正 著

バビロンの流れのほとりにて

『森有正エッセー集成Ⅰ』ちくま学芸文庫、1999年、原著1957年

東京大学文学部助教授だった森有正は、1950年、船でフランスに旅立つ。40歳を前にしての渡仏だった。そして、その3年後、一連の思索を、次のような文で始めた。

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露れているのではないだろうか。

当初は数年のつもりだった森有正のフランス滞在は、結局、彼の死まで続き、この書簡体の文章もまた、彼の生涯に渡って綴られることになって、彼の思想を今に伝えてくれる。ここには、初代文部大臣・森有礼の孫であり、キリスト教の牧師の子として生まれ、フランスの修道会が設立した小中学校で学び、デカルトやパスカルの研究者として研鑽を積んだ森有正が、フランス文化（あるいは、西欧の精神）と格闘せざるを得なかった過程が書き留められている。そこに描かれるのは、凡百の旅行記や紹介文が描くフランスとはまったく異質の、深く硬質な世界である。

この本に私が出会ったのは、1968年、日ごとに変わる喧騒の中で、しかもなお静かに深く考えることを教えてくれた本であった。

森有正は晩年、『生きることと考えること』(講談社現代新書）などの親しみやすい本も残している。

加藤 周一 著

読書術

岩波現代文庫、2000年、初版1962年

どういう本を読んだらよいかについては論じようがないが、どう読んだらよいかは一般論として論じられる。著者はそう考え、自らの読書術を公開する。

その技術は多面的である。急がば回れ、古典を味わう精読術。新刊を数でこなす速読術。臨機応変、読まずにすます読書術。原著に挑み、原語に触れる解読術。新聞・雑誌の看破術。難解な本をとりこむ読破術。それぞれが、豊富な例示とともに語られる。

中でも私が気に入ったのは、最終章「難しい本の読破術」である。この章は、いきなり、「わからない本は読まないこと」という助言で始まる。第一に、難しい本の大部分は、文章が下手か、著者が自分の言うことを十分に理解していないかである。第二に、立派な本の中にもある難しい本の場合には、分からない理由が読者の側にある。その種の本の理解には、単語の意味の正確な理解だけでなく、著者の経験とほとんど同種の経験を持っていなければならない、という。この主張には一瞬たじろぐが、「私にとってむずかしい本は私にとって必要でなく、私にとって必要な本は私にとってかならずやさしい」という言葉に力づけられる。

医学から出発して東西の文化を論じた当代随一の知性・加藤周一の言葉だけに、傾聴の価値があろう。

秋葉 征夫 AKIBA, Yukio 退職

学ぶ本・議論する本・楽しむ本・鼻歌まじりの本…出会った本

秋葉 征夫 AKIBA, Yukio

総長特命教授（2008年度～ 2010年度。2011年3月末退職）、東北大学名誉教授（大学院農学研究科）、農学博士
専門分野:動物栄養生化学、家禽学

担当科目
※2010年度
基礎ゼミ:「食の比較生化学 －ヒトと動物－」／「ペット栄養から観るヒトの食と栄養代謝」
基幹科目:「生命と自然:鳥とニワトリの生物科学」
総合科目:「食から探る生物・生命・暮らしの科学」

私が本を読み始めたと言える（意識している）のは高校時代だと思う。それは他の人たちに比べて断然遅く、自慢にはならない。高校時代は歴史小説を若干読んだ。吉川英治の文芸書『私本太平記』だったと思う。足利尊氏の波乱に満ちた生涯を活写したもので、この本を手にして以来、本を読むことの抵抗感が薄れたように記憶している。その後、東北大学に入り、クラブ（軟式テニス同好会）に入って、先輩からいろいろの書物を紹介され、そしてそれらの本の感想についての議論や好きな作品の文章の書き写しなどを経験し、やっと半人前の「本読む学生」になったと思っている。学生時代は背伸びしながらも、詩集や哲学系の本にも手を伸ばし、結果的に人文系の知識も少しは得ることができた。

研究生活（本学農学部）に入ってからは、農学や栄養学の専門書や専門関連の書籍を読むことで手一杯になってしまった時期が多い。さらに昨今は、時折に読む一般書は心休まる小説や随筆が多くなってしまった。そんなわけで、大学の教師としての読書量はきわめて少ないものと自覚（反省）せざるを得ない。それでも、好きな本や、勉強させられた本、印象深かった本は頭に浮かぶ。

教養教育院の教員として全学教育の一部を担当してから2年が経過する。担当講義は、私自身の40年間の研究領域であった食・栄養・生化学・動物・ニワトリを中心に組み立てた。講義の狙いは、私たちにとって身近でしかも大切な「食と栄養」そして「鳥類やペットなどの身の回りにいる動物」をよく観察し、ヒトと生物たちの「生命の営みとその不思議さ」を考えることを通して、身近な事象と視点から「科学する」することの楽しさを身に着けてもらうこと、と私は考えている。

ここに紹介する書籍は、私が読んで自身の生活に役立った本、楽しかった（良かったと感じた）本である。いくつかは私の専門分野と講義内容に少し関連し、いくつかは関係なく感銘した本、そして気持ちが落ち着く本、楽しかった本、である。

何といっても、本を好きになること、そのために好きな本を見つけること、好きな本に出会うための少しの努力をすること、が大事のように思う。学生時代は、ジャンルにこだわらず何でも読める、何でもチャレンジできる、しかし過剰に気負うことなしに過ごせる、長くはない貴重な期間と捉えたい。
（2011年2月）

木下 是雄 著
理科系の作文技術
中公新書、1981年

小中学校時代に課せられた「作文」そして「読書感想文」がきらいだった。人を感動させるような「感想」はとても書けなかった。このように「作文」「文章つくり」「レポートつくり」は苦手のままに過ごしてきたが、大学院学生時代に私の恩師である松本達郎教授にこの本を紹介され、そして読破してからは、文章に対する苦手意識がほぼなくなった。そしていろいろな報告の文章や本でも、この『理科系の作文技術』を頭に思い出しながら味わうことができるようになった。

レポートなどを書くためには、主題を決定してその材料を集め、パラグラフを構成して文を組み立てる。その中で、事実と意見を明確に区別する、読む対象者を意識して結論を早めに提示する、わかりやすく短い文章にする、漢字を使いすぎない（文を黒くしすぎない）、同じ語尾の繰り返しは使わない、など、多くの注意点が示され、今でも私の中に生きている。小学校・中学校教育の中では「主観的記述」を植えつけられてきた面が強いが、大学および社会では調査報告、出張報告、技術報告、開発計画の申請書など「客観的記述」を求められる場面が多いのではないか。

私自身、これまで大変参考になった「指南書」である。

本川 達雄 著
ゾウの時間 ネズミの時間 —サイズの生物学—
中公新書、1992年

私は40年以上にわたって「動物栄養生化学」を勉強し、研究し、それらを学生たちに指導してきた。栄養学、栄養生化学は動物の体と生命の科学であり、その形態と機能に密接に関連するものである。私の恩師の一人である堀口雅昭教授からは動物栄養学を全動物の体のサイズから認識することの大事さを指導していただき、エネルギーの流れやエントロピーの教えもいただいた。本書は、動物のサイズから動物の行動、動物のデザイン、動物の機能を解釈しようとしたものであり、ネズミからゾウにいたるまで全動物に通じる理論を導き出そうとする書である。

動物のサイズによってその動物が感じる時間が異なること、動物の行動圏と食事量、動物の運搬コスト、動物サイズと呼吸数や心拍数の関係などが論理的に展開されている。また一生の間の心拍数や呼吸数は動物のサイズに関係なくほぼ同じであり、動物のエネルギー消費量は体重の3/4乗に比例することなど、生物と生命を理解する意味では心に残りやすい記述が多い。

本書全体がわかりやすい文章で構成されており、生物学を学んでこなかった学生にも手に取りやすい新書（240頁）であり、動物世界を理解し、生命を思い、そして私たち自身を考える観点を提供してくれる本の一つといえる。

安田 喜憲 著

森と文明の物語 ―環境考古学は語る

ちくま新書、1995年

私の専門は農学であり、「農」は人類が長年にわたって築き上げてきた壮大な知恵であり、文化を作り出す源である、と学生に教えてきた。5000年も前に誕生した都市文明はいまや地球環境を破壊しかねない文化へと展開してしまったのを、私たちは目にしている。

本書（著者は東北大学の卒業生）では、文明の発祥の地であるメソポタミアやその周辺領域では豊かな森が存在したが、その名残りは地中海沿岸に少しだけ残っている巨大なレバノン杉に見られるのみで、現在ではこの地域にいわゆる森は無い、と述べられている。もともと文明と森は共存していたのだが、文明の深化とともに破壊された森林、森林争奪戦争だったというトロイ戦争、地中海沿岸での森林伐採後の代替として植栽されたオリーブの木、消えたモアイの森の話など、化石や花粉の分析と放射性炭素などの技術を用いた環境考古学を駆使しての森林の盛衰を語る本書は、「文明・環境・農」を考える意味でも多くの視点を与えてくれる。そして、私たちの身近にある里山の森の歴史と機能から、「共生の森」の保存を論じていることに心を傾けたい。

関連する書籍として、『森林の思考・砂漠の思考』、鈴木秀夫著、NHK ブックス（1994年）も面白い。

千葉 成夫 著

奇蹟の器 ―デルフトのフェルメール―

五柳叢書、1994年

いつから絵好きになったのか、好きといっても油絵を描くわけではなく、見るのが少し好きなだけだ。オランダ、デルフトの画家フェルメールの作品を初めて観たのは国立西洋美術館の特別展での「手紙を書く女」である。静謐で時が止まり、手紙を書く女性の遠くを想う心がにじみ出ている画面に惹かれた。

本書はフェルメールの作品から著者が独断で選んだ数点の作品（私の好きな数点でもある）について、フェルメール自身がどんな想いで何を描こうとしたのか、観る人が作品から何を感じるのか、などを述べたものであり、奇蹟の器であるフェルメールの絵を心底から愛する著者の姿勢が浮かびあがる。

一般美術書にあるように作者と作品の歴史を紹介してはいるが、それよりも、フェルメールの絵に対する著者（東北大学の卒業生）の深い思い入れに基づいた文学作品的な印象を私は受けており、美術書としては少し変わっているのかもしれない。フェルメールの美術書を何冊か読んだが、フェルメールの作品の紹介などは『謎解き フェルメール』小林頼子・朽木ゆり子（共著)(新潮社、2003年）がお勧めだろう。

絵は本を読むよりも、直接観て、感じることにある。フェルメールの30数点の作品のうち、これまで約半分は観ることができた。

ピーター・メンツェル／フェイス・ダルージオ 著
地球の食卓
―世界24か国の家族のごはん―
みつじ まちこ 訳、TOTO出版、2006年

食べ物の写真を見るのはとても楽しい。どんな人たちがどんな食事をしているのかを知るのも楽しい。食は等しく人間の生活の基本であり、外国に旅行した時、私はいつも食の市場を訪れる。市場の多様な食材、そしてその国特有の食品を見ると、その国と住む人々の大半を理解できたような気分になる。

本書は、世界のいろいろな人種の家族と1週間分の食品のポートレイト、食事風景を中心としたルポルタージュであり、それぞれの家族の1週間分の食品、各家庭のご自慢のレシピ、食の問題を提起する6つのエッセイを収録した写真集である。豊かな環境で豊富な食材を使い、幸せそうに写る家族、そして片方では、厳しい環境で数少ない食料・食品を囲む固い顔の家族の写真もある。本来楽しかるべき食卓・食品の前での写真も、場所によっては苦しい悲しい絵に思える。心に重く響く写真集でもある。世界人口68億人のうち、約十数億人は飢餓に近い状況にあること、そして一方では有り余る食料の中で肥満に苦しむ十数億の人たちがいることを思い起こさせる。

しかし、家族がいる食事風景はやはり人の心を安んじさせることは間違いない。食について考え、学ぶ学生に限らず、本書を見てみる価値はありそうだ。

東北大学農学部「農学ビジョン懇談会」(編)
人間と環境のコミュニケーション農学
―杜の都からの発信―
農林統計協会、1997年

これは手前味噌の本の紹介になる。この手の話を嫌う人は多いと思うが、その人たちには下記の拙文はスキップしていただかざるを得ない。

これまで（特に1990年代までに）農学は少し分かりにくい、農学の方向性が紹介されていない、農学が過小評価されているなど、農と農学に関する多くの意見・懸念が出されてきた。本書は食料問題、環境問題、資源問題などの深刻化が予測される21世紀に向けて、農学の果たすべき役割とその将来ビジョンを発信したものである。私を含めた農学部の5人の若手教授（1995年当時）が3年余りの議論を経て、農の歴史を踏まえて今世紀における農学の役割を「コミュニケーション」というキーワードから展望したものである。本書の中にあるように、私たちの生活そして科学の中で「生命の神秘」「生命のゆらぎ」「生命生理の多様性と可塑性」をコンセプトにする「農学的思考」を身につけることは、多様な視点形成が重要視され、環境の時代ともいわれる今世紀の私たちに、なお一層望まれているように感じられる。

長大な農の歴史に思いを馳せるとともに、農が20世紀までに造り上げてきた功罪を見据えながら、農と農学と人間の行きかたに触れてみるのも楽しいのではないか。

■本誌の書籍紹介一覧

書籍名	著者　翻訳	発行年（原書）
オーパ！	開高健著 高橋昇写真	1981年
深夜特急1～6（全6冊）	沢木耕太郎著	1994年
野火	大岡昇平著	2014年（1954年）
がん遺伝子の発見 ―がん解明の同時代史―	黒木登志夫著	1996年
遺伝子 ―親密なる人類史―（上・下）	シッダールタ・ムカジー著 仲野徹監修、田中文訳	2018年
サピエンス全史 ―文明の構造と人類の幸福―（上・下）	ユヴァル・ノア・ハラリ著 柴田裕之訳	2016年
知的生産の技術	梅棹忠夫著	1969年
〈新版〉日本語の作文技術	本多勝一著	2015年
百姓生活百年記	高瀬助次郎著 / 村山民俗学会編	2014年
先祖の話	柳田國男著	2013年
死を見つめる心 ―ガンとたたかった十年間	岸本英夫著	1973年
死者の書	折口信夫著	2017年
火怨　北の耀星アテルイ（上・下）	高橋克彦著	2002年
研究不正 ―科学者の捏造、改竄、盗用	黒木登志夫著	2016年
これでナットク！　植物の謎 Part2	日本植物生理学会編	2013年
植物は感じて生きている	滝澤美奈子著 / 日本植物生理学会監	2008年
植物はなぜ薬を作るのか	斉藤和季著	2017年
超能力微生物	小泉武夫著	2017年
ソーニャ・コヴァレフスカヤ ―自伝と追想―	ソーニャ・コヴァレフスカヤ著 野上弥生子訳	1978年
こころ／坊ちゃん	夏目漱石著	1996年
仮面の告白	三島由紀夫著	1950年
ご冗談でしょう、ファインマンさん（上・下）	リチャード・ファインマン著 大貫昌子訳	2000年
クレーヴの奥方　他二編	ラファイエット夫人著 生島遼一訳	1976年
スティーブ・ジョブズ　1	ウォルター・アイザックソン著 井口耕二訳	2015年

出版社	シリーズ	版　型	ページ	定　価
集英社	集英社文庫	文庫	352p	960円＋税
新潮社	新潮文庫	文庫	1：238p/2：223p/ 3：226p/4：204p/ 5：247p/6：243p	1・2・3・5・6：539円税込 4：506円税込
新潮社	新潮文庫	文庫	216p	473円税込
中央公論新社	中公新書	新書	272p	780円＋税
早川書房		B6判	上：420p/ 下：411p	各2750円税込
河出書房新社		四六判	上：272p、下：296p	各1900円＋税
岩波書店	岩波新書 青 F-93	新書	254p	840円＋税
朝日新聞出版	朝日文庫	文庫	328p	660円税込
原人舎		B５判	220p	2000円＋税
KADOKAWA	角川ソフィア文庫	文庫	256p	640円＋税
講談社	講談社文庫	文庫	226p	500円＋税
KADOKAWA	角川ソフィア文庫	文庫	386p	920円＋税
講談社	講談社文庫	文庫	上：504p/ 下：560p	上：840円＋税 下：890円＋税
中央公論新社	中公新書	新書	320p	880円＋税
講談社	ブルーバックス	新書	272p	980円＋税
化学同人	植物まるかじり叢書	B6判	165p	品切中（1200円＋税）
文藝春秋	文春新書	新書		880円＋税
文藝春秋	文春新書	新書	224p	800円＋税
岩波書店	岩波文庫 赤638-1	文庫	278p	品切中（553円＋税）
文藝春秋	文春文庫	文庫	480p	580円＋税
新潮社	新潮文庫	文庫	281p	562円税込
岩波書店	岩波現代文庫 社会5・6	文庫	上：356p/ 下：334p	上：1200円＋税 下：1300円＋税
岩波書店	岩波文庫 赤515-1	文庫	308p	品切中（900円＋税）
講談社	講談社＋α文庫	文庫	576p	850円＋税

書籍名	著者　翻訳	発行年（原書）
ヨーロッパとは何か	増田四郎著	1967年
オリエンタリズムの彼方へ ―近代文化批判―	姜尚中著	2004年
民法風土記 ―「法の現場」を歩く―	中川善之助著	2001年
流れる星は生きている	藤原てい著	2002年
若き数学者のアメリカ	藤原正彦著	1981年
ルワンダ中央銀行総裁日記　増補版	服部正也著	2009年
ファインマン物理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ	リチャード・P・ファインマン / ロバート・B・レイトン / マシュー・サンズ著 坪井忠二 / 富山小太郎 / 宮島龍興 / 戸田盛和 / 砂川重信訳	1986年 （1963・64・65年）
愚行の世界史 ―トロイアからベトナムまで―（上・下）	バーバラ・W・タックマン著 大社淑子訳	2009年（1984年）
ウニと語る ―激動の時代自然を友としたある生物学者の生涯―【増補】	團勝磨著	1988年
日本語で生きるとは	片岡義男著	1999年
本格小説（上・下）	水村美苗著	2005年（2002年）
背信の科学者たち ―論文捏造はなぜ繰り返されるのか？―	ウィリアム・ブロード / ニコラス・ウェイド著 牧野賢治訳	2014年
パンセ	パスカル著 前田陽一／由木康訳	2018年（1973年）
鬼の研究	馬場あき子著	1988年
プラトン	アレクサンドル・コイレ著 川田殖訳	1972年
小説集　夏の花	原民喜著	1988年
西行	高橋英夫著	1993年
精神の発見 ―ギリシア人におけるヨーロッパ的思考の発生に関する研究―	B. スネル著 新井靖一訳	2003年（1946年）
フラム号北極海横断記 北の果て	フリッチョフ・ナンセン著 太田昌秀訳	1998年
地球温暖化論争 標的にされたホッケースティック曲線	マイケル・E・マン著 藤倉良 / 桂井太郎訳	2014年
空気の発見	三宅泰雄著	2011年（1962年）
愛と幻想のファシズム（上・下）	村上龍著	1987年
旅人　ある物理学者の回想	湯川秀樹著	2011年（1960年）
ローマ人の物語 I～XV	塩野七生著	1992年～2006年

出版社	シリーズ	版　型	ページ	定　価
岩波書店	岩波新書 青版 D-14	新書	216p	780円＋税
岩波書店	岩波現代文庫 学術119	文庫	314p	品切中（1200円＋税）
講談社	講談社学術文庫	文庫	352p	1000円＋税
中央公論新社	中公文庫	文庫	328p	686円＋税
新潮社	新潮文庫	文庫	283p	649円税込
中央公論新社	中公新書	新書	360 p	960円＋税
岩波書店		B5	Ⅰ：398p/ Ⅱ：414p/ Ⅲ：330p/ Ⅳ：384p/ Ⅴ：508p	Ⅰ：3400円+税 / Ⅱ：3800円＋税 Ⅲ：3400円+税 / Ⅳ：4000円+税 / Ⅴ：4300円＋税
中央公論新社	中公文庫	文庫	上：384p/ 下：416p	上：1190円＋税 下：1238円＋税
学会出版センター		B6判	398p	品切中（2624円税込）
筑摩書房		四六判	264p	2200円＋税
新潮社	新潮文庫	文庫	上：605p/ 下：540p	上：924円税込 下：825円税込
講談社		四六判	354p	1600円＋税
中央公論新社	中公文庫	文庫	752p	1400円＋税
筑摩書房	ちくま文庫	文庫	304p	760円＋税
みすず書房		四六判	264p	品切中（2600円＋税）
岩波書店	岩波文庫 緑108-1	文庫	216p	600円＋税
岩波書店	岩波新書 新赤版277	新書	254p	品切中（800円＋税）
創文社	名著翻訳叢書	A 5	618p	7500円＋税
ニュートンプレス		単行本	418p	絶版
化学同人		四六判	504p	4500円＋税
KADOKAWA	角川ソフィア文庫	文庫	160p	438円＋税
講談社		四六判	上：416p/ 下：446p	各1600円＋税
KADOKAWA	角川ソフィア文庫	文庫	304p	590円＋税
新潮社		A5判変型	Ⅰ：282p、Ⅱ：398p、Ⅲ：278p、 Ⅳ：458p、Ⅴ：508p、Ⅵ：354p、 Ⅶ：526p、Ⅷ：390p、Ⅸ：416p、 Ⅹ：308p、Ⅺ：366p、Ⅻ：380p、 XIII：310p、XIV：324p、XV：444p	Ⅰ：2530円、Ⅱ：3080円、Ⅲ：2530円、 Ⅳ：3410円、Ⅴ：3520円、Ⅵ：2970円、 Ⅶ：3740円、Ⅷ：3080円、Ⅸ：3300円、 Ⅹ：3300円、Ⅺ：3080円、Ⅻ：3080円、 XIII：2860円、XIV：2860円、XV：3300円、各税込

書籍名	著者　翻訳	発行年（原書）
動物生理学［原書第5版］ ―環境への適応―	クヌート・シュミット＝ニールセン著 沼田英治／中嶋康裕監訳	2007年
静かな大地	池澤夏樹著	2007年
神聖喜劇（第1巻～第5巻）	大西巨人著	2002年
回想のブライズヘッド（上・下）	イーヴリン・ウォー著 小野寺健訳	2009年
平家物語	石母田正著	1957年
サンスクリット原典現代語訳 法華経（上・下）	植木雅俊訳	2015年
大森荘蔵セレクション	大森荘蔵著 飯田隆／丹治信春／野家啓一／野矢茂樹編	2011年
科学哲学への招待	野家啓一著	2015年
沈黙の春	レイチェル・カーソン著 青樹築一訳	1974年
遠野物語	柳田国男著	1991年
罪と罰（1～3）	ドストエフスキー著 亀山郁夫訳	1：2008年 2・3：2009年
寺山修司全歌集	寺山修司著	2011年
建物はどのように働いているか	エドワード・アレン著 安藤正雄／越知卓英／小松幸夫／深尾精一共訳	1982年
看護覚え書 ―看護であること　看護でないこと	フロレンス・ナイチンゲール著 湯槙ます／薄井坦子／小玉香津子／田村真／小南吉彦訳	2011年（1860年）
建築遺産　保存と再生の思考 ―災害・空間・歴史	野村俊一／是澤紀子編	2012年
宇宙船地球号　操縦マニュアル	バックミンスター・フラー著 芹沢高志訳	2000年
成長の限界　人類の選択	ﾄﾞﾈﾗ･H･ﾒﾄﾞｳｽﾞ/ﾃﾞﾆｽ･L･ﾒﾄﾞｳｽﾞ/ﾖﾙｹﾞﾝ･ﾗﾝﾀﾞｰｽ著 枝廣淳子訳	2005年
137億年の物語 ―宇宙が始まってから今日までの全歴史	クリストファー・ロイド著 アンディ・フォーショー絵、野中香方子訳	2012年
風土 ―人間学的考察	和辻哲郎著	1979年（1935年）
現代農業考 ～「農」受容と社会の輪郭～	工藤昭彦著	2016年
世界を不幸にしたグローバリズムの正体	ジョセフ・Ｅ・スティグリッツ著 鈴木主税訳	2002年
ショック・ドクトリン（上・下） ―惨事便乗型資本主義の正体を暴く―	ナオミ・クライン著 幾島幸子／村上由見子訳	2011年
経済大陸アフリカ ―資源、食糧問題から開発政策まで―	平野克己著	2013年
新・環境倫理学のすすめ	加藤尚武著	2005年
人類の足跡10万年全史	スティーヴン・オッペンハイマー著 仲村明子訳	2007年（2004年）

	出版社	シリーズ	版　型	ページ	定　価
	東京大学出版会		B 5	600p	14000円＋税
	朝日新聞出版	朝日文庫	文庫	672p	品切中（1100円税込）
	光文社	光文社文庫	文庫	1巻578p/2巻538p/3巻537p/ 4巻495p/5巻510p	1・3・4・5巻：各1060円＋税 2巻：1048円＋税
	岩波書店	岩波文庫 赤277-2・3	文庫	上304p/ 下388p	品切中 （上：780円＋税、下860円＋税）
	岩波書店	岩波新書 青版 E-28	新書	234p	品切中（820円＋税）
	岩波書店		四六判	上302p/ 下310p	各2500円＋税
	平凡社	平凡社ライブラリー 748	B6変	496p	1700円＋税
	筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	304p	1100円＋税
	新潮社	新潮文庫	文庫	394p	781円税込
	集英社	集英社文庫	文庫	264p	520円＋税
	光文社	光文社古典 新訳文庫	文庫	1：488p/2：465p/ 3：536p	1：819円＋税 /2：800円＋税 /3：876円＋税
	講談社	講談社学術文庫	文庫	352p	1130円＋税
	鹿島出版会		四六判	288p	2500円＋税
	現代社		菊判	308p	1700円＋税
	東北大学出版会		四六判	540p	3300円＋税
	筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	224p	900円＋税
	ダイヤモンド社		四六判	410p	2400円＋税
	文藝春秋		A5軽装	512p	2990円＋税
	岩波書店	岩波文庫 青144-2	文庫	372p	1010円＋税
	創森社		A 5	176p	2000円＋税
	徳間書店		B 6	390p	1800円＋税
	岩波書店		四六判	上402p/ 下406p	品切中（各2500円＋税）
	中央公論新社	中公新書	新書	304p	880円＋税
	丸善出版	丸善 ライブラリー373	新書	232p	780円＋税
	草思社		四六判	416p	2400円＋税

書籍名	著者　翻訳	発行年（原書）
数学をつくった人びとⅠ、Ⅱ、Ⅲ	Ｅ・Ｔ・ベル著 田中勇／銀林浩訳	2003年（1937年）
素数の音楽	マーカス・デュ・ソートイ著 冨永星訳	2013年（2003年）
ガン回廊の朝（あした）(上・下)	柳田邦男著	1981年（1979年）
石巻赤十字病院の100日間【増補版】	石巻赤十字病院著、由井りょう子文	2016年（2011年）
津波と原発	佐野眞一著	2014年（2011年）
アメリカのデモクラシー (第1巻上・下、第2巻上・下)	トクヴィル著 松本礼二訳	第1巻：2005年 第2巻：2008年
野生の思考	クロード・レヴィ＝ストロース著 大橋保夫訳	2006年（1962年）
国家はなぜ衰退するのか ―権力・繁栄・貧困の起源―(上・下)	ダロン・アセモグル／ジェイムズ・A・ロビンソン著 鬼澤忍訳	2016年（2012年）
神々の沈黙 ―意識の誕生と文明の興亡	ジュリアン・ジェインズ著 柴田裕之訳	2005年
日本辺境論	内田樹著	2009年
キッシンジャー回想録　中国（上・下）	ヘンリー・A. キッシンジャー著 塚越敏彦／松下文男／横山司／岩瀬彰／中川潔訳	2012年
英語とわたし	岩波書店編集部編	2000年
翻訳の秘訣：理論と実践	中村保男著	1982年
英語の感覚・日本語の感覚： ＜ことばの意味＞のしくみ	池上嘉彦著	2006年
日本語教室	井上ひさし著	2011年
ことばと文化	鈴木孝夫著	1973年
日本の文化構造	中西進著	2010年
植物が地球をかえた！	葛西奈津子著 日本植物生理学会監 日本光合成研究会協力	2007年
生命と地球の歴史	丸山茂徳／磯崎行雄著	1998年
光合成とはなにか ―生命システムを支える力―	園池公毅著	2008年
光合成の科学	東京大学光合成教育研究会編	2007年
植物の私生活	デービッド・アッテンボロー著 門田祐一監訳、手塚勲／小堀民恵訳	1998年
100億人への食糧 ―人口増加と食糧生産への知恵―	Ｌ・Ｔ・エヴァンス著 日向康吉訳	2006年
物理学はいかに創られたか（上・下）	アインシュタイン／インフェルト著 石原純訳	1963年（1938年）

	出版社	シリーズ	版　型	ページ	定　価
	早川書房	ハヤカワ文庫	文庫	Ⅰ：421p/ Ⅱ：421p/ Ⅲ：392p	各1078円税込
	新潮社	新潮文庫 Science&History Collection	文庫	622p	979円税込
	講談社	講談社文庫	文庫	上329p/ 下321p	各571円＋税
	小学館	小学館文庫	文庫	288p	600円＋税
	講談社	講談社文庫	文庫	304p	640円＋税
	岩波書店	岩波文庫 白9-2・3・4・5	文庫	第1巻上364p/ 下480p 第2巻上280p/ 下328p	第1巻上970円＋税 / 下1200円＋税 第2巻上840円＋税 / 下900円＋税
	みすず書房		A5	408p	4800円＋税
	早川書房	ハヤカワ文庫	文庫	上414p/ 下410p	各1100円税込
	紀伊國屋書店		A5	632p	3200円＋税
	新潮社	新潮新書	新書	255p	880円税込
	岩波書店		四六判	上342p/ 下342p	各2800円＋税
	岩波書店	岩波新書 新赤版702	新書	240p	品切重版未定
	新潮社	新潮選書	B6	247p	絶版
	NHK 出版	ＮＨＫブックス No.1066	B6	256p	970円＋税
	新潮社	新潮新書	新書	186p	792円税込
	岩波書店	岩波新書 青版 C-98	新書	220p	780円＋税
	岩波書店		四六判	386p	3600円＋税
	化学同人	植物まるかじり叢書	四六判	160p	品切中（1200円＋税）
	岩波書店	岩波新書 新赤版543	新書	282p	900円＋税
	講談社	ブルーバックス	新書	264p	1000円＋税
	東京大学出版会		A5	304p	3800円＋税
	山と渓谷社		B5変型	320p	品切中（3200円＋税）
	学会出版センター		A5	290p	品切中（3800円＋税）
	岩波書店	岩波新書 赤版 R-14・15	新書	上194p/ 下202p	各760円＋税

書籍名	著者　翻訳	発行年（原書）
科学と仮説	ポアンカレ著 河野伊三郎訳	1938年
寺田寅彦随筆集　第一巻〜第五巻	寺田寅彦著 小宮豊隆編	1・2：1947年 3・4・5：1948年
目に見えないもの	湯川秀樹著	1976年
二重らせん —DNA の構造を発見した科学者の記録—	ジェームズ・D・ワトソン著 江上不二夫／中村桂子訳	2012年（1968年）
おはなし電氣學	佐野昌一著	1939年（絶版）
職業としての政治	マックス・ウェーバー著 脇圭平訳	1980年（1919年）
社会科学における人間	大塚久雄著	1977年
プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神	マックス・ウェーバー著 大塚久雄訳	1989年（1920年）
近代の政治思想 —その現実的・理論的諸前提—	福田歓一著	1970年
忠誠と反逆 —転形期日本の精神史的位相—	丸山眞男著	1998年
書書周游　萩原延壽集５	萩原延壽著	2008年
国家（上・下）	プラトン著 藤沢令夫訳	1979年（BC4世紀）
動物の体内時計	桑原万寿太郎著	1966年（絶版）
風浪・蛙昇天　木下順二戯曲選１	木下順二著	1982年（1953年）
吉里吉里人（上・中・下）	井上ひさし著	2016年（1981年）
森有正エッセー集成１ （『バビロンの流れのほとりにて』収録）	森有正著 二宮正之編集	1999年（1957年）
読書術	加藤周一著	2000年（1962年）
理科系の作文技術	木下是雄著	1981年
ゾウの時間ネズミの時間 —サイズの生物学—	本川達雄著	1992年
森と文明の物語—環境考古学は語る	安田喜憲著	1995年
奇蹟の器 —デルフトのフェルメール—	千葉成夫著	1994年
地球の食卓 —世界24か国の家族のごはん—	ピーター・メンツェル／フェイス・ダルージオ著 みつじまちこ訳	2006年
人間と環境のコミュニケーション農学 —杜の都からの発信—	東北大学農学部「農学ビジョン懇談会」編	1997年

出版社	シリーズ	版　型	ページ	定　価
岩波書店	岩波文庫 青902-1	文庫	296p	840円＋税
岩波書店	岩波文庫 緑37-1～5	文庫	1：306p、2：316p 3：332p、4：308p 5：310p	1・4：740円＋税 2・3・5：700円＋税
講談社	講談社学術文庫	文庫	163p	720円＋税
講談社	ブルーバックス	新書	248p	1000円＋税
明治書院	科學知識普及會	四六判	486p	絶版
岩波書店	岩波文庫 白209-7	文庫	122p	520円＋税
岩波書店	岩波新書 黄版11	新書	232p	820円＋税
岩波書店	岩波文庫 白209-3	文庫	436p	1080円＋税
岩波書店	岩波新書 青版 A-2	新書	206p	760円＋税
筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	512p	1400円＋税
朝日新聞出版		四六判	336p	品切中（2860円税込）
岩波書店	岩波文庫 青601-7・8	文庫	上510p/ 下552p	各1260円＋税
岩波書店	岩波新書	新書	201p	絶版
岩波書店	岩波文庫 緑100-1	文庫	340p	700円＋税
新潮社	新潮文庫	文庫	上589p/ 中591p / 下614p	上・中869円税込 下924円税込
筑摩書房	ちくま学芸文庫	文庫	576p	1500円＋税
岩波書店	岩波現代文庫	文庫	232p	1000円＋税
中央公論新社	中公新書	新書	256p	700円＋税
中央公論新社	中公新書	新書	240p	680円＋税
筑摩書房	ちくま新書	新書	208p	660円＋税
五柳書院	五柳叢書43	四六判	240p	2427円＋税
TOTO 出版		224× 304㎜	288p	2800円＋税
農林統計協会		B5	124p	2400円＋税

発行日：2020年3月1日
発行者：東北大学　教養教育院　（高度教養教育・学生支援機構）
〒980-8576　仙台市青葉区川内41（川内キャンパス内）
Tel：022-795-4723　Fax：022-795-7647
http://www.las.tohoku.ac.jp
e-mail　info@las.tohoku.ac.jp

COPYRIGHT©TOHOKU UNIVERSITY ALL RIGHTS RESERVED.
本冊子の記載記事・写真などを了承なく転載することはできません。

このパンフレットは「水なし印刷」により印刷しております。
環境にやさしい植物油インキ「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。